

392

165



始



395
160

傳督基蘇耶邊



下

392-165



俗通

耶

蘇

基

督

傳

(下)

大正
12.7.24
内交

<p>第二章 幕屋祭</p> <p>一 エルザレム神殿に於ける教話</p>	<p>七 癩癩病者の平癒</p> <p>六 吾主の御變容</p> <p>五 ペトロの信仰宣言</p> <p>四 フアリザイ人、徴を求む。彼等のパン酵</p> <p>三 デカポリスに於て聾者を癒し、再びパンを殖し給ふ</p> <p>二 カナアンの婦人</p> <p>一 フアリザイ人等の形式主義を論駁し給ふ</p>	<p>宣教第三年</p> <p>第一章 ガリレア地方に於ける最後の御巡廻</p>
<p>五〇</p> <p>五〇</p> <p>四四</p> <p>三七</p> <p>二六</p> <p>二〇</p> <p>一五</p> <p>九</p> <p>二</p> <p>一</p>	<p>大正</p> <p>12.7.24</p> <p>南交</p>	

Nihil Obstat:
Leo Gracy, Cens.

Imprimatur
Joannes - Claudius,
Ep. Nagasaki.
Nagasaki die 25 Januarii 1923.

第四章

七 改心の必要……………一三九

八 途中の第一安息日……………一四一

九 第二安息日……………一四八

一〇 弟子たらん者の覺悟……………一五二

一一 天主の御哀憐……………一五六

一二 財産の善用に關する諭……………一六二

一三 躓に注意せよ……………一六九

一四 お互に赦合ふべきこと……………一七二

一五 サマリアとガリレアの間……………一七六

一六 止みなく祈れ……………一八三

一 ペレア地方に於ける宣教……………一八六

二 婚姻問題……………一八六

二 ラザルの復活……………一九一

第三章

二 幕屋祭最終の日と姦婦事件……………一五八

三 フアリザイ人との大論戰……………一六五

四 生來の盲者……………一七六

五 善き牧者……………一八六

六 奉殿記念祭……………一九一

七 使徒等の教養……………一九六

一 最後のエルザレム旅行……………二〇二

一 意地悪のサマリア人……………二〇三

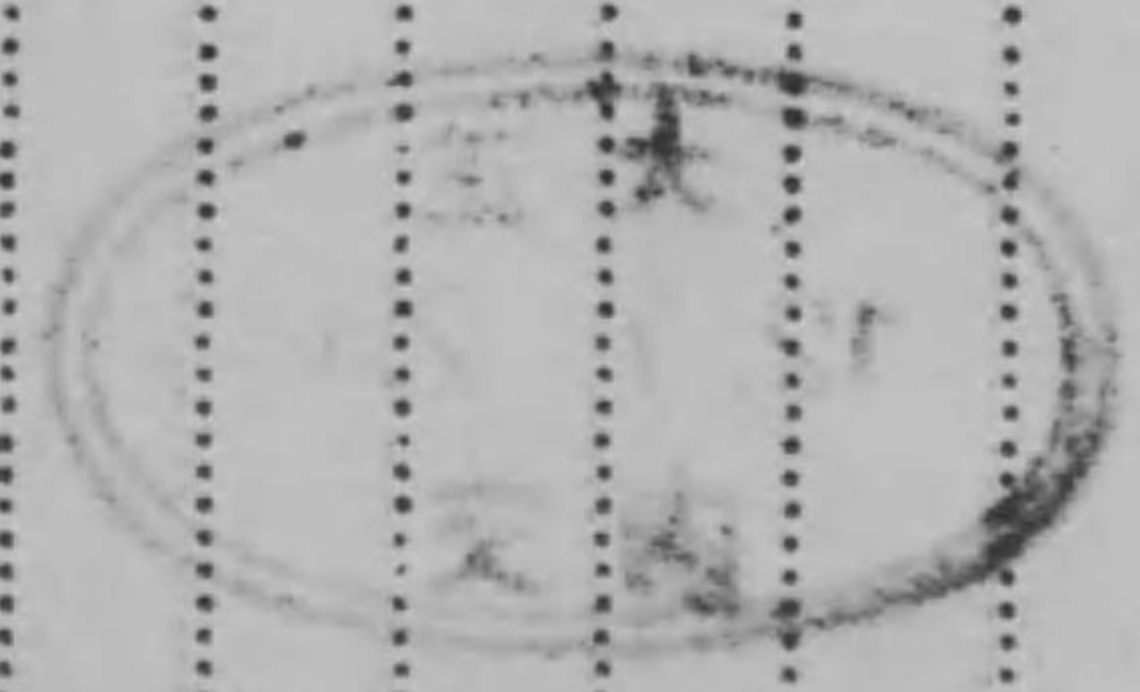
二 七十二弟子の派遣……………二〇六

三 善きサマリア人の諭……………二一三

四 マルタとマリア。主禱文……………二一八

五 途すがら弟子等に教へ給ふ……………二二三

六 續いて弟子等に教へ給ふ……………二三三



第五章

御受難期

三 幼兒の掩祝、並に誠命と勧誘……………101

四 御受難の預言とゼベデオの二子……………101

五 ザケオ……………104

第一章 エルザレムに於ける吾主最後の御奮闘……………104

一 凱旋的入都の光景……………104

二 月曜日の出来事……………103

三 火曜日の出来事……………101

四 大論戦……………100

五 水曜日、律法學士、ファリサイ人等の譴責……………100

六 エルザレムの滅亡と世の終末の預言……………98

七 警戒の必要……………97

第六章 最終晚餐……………96

第七章

神の犠牲

吾主の御受難

一 衆議會の密議とユダの裏切……………106

二 最終晚餐の準備……………101

三 晚餐の間……………97

四 聖體の御制定……………97

五 聖體御制定の後……………96

六 高間に於ける御物語……………95

七 途中での御話……………94

八 司祭的祈禱……………93

神の犠牲……………93

吾主の御受難……………92

一 ゲツセマニの園に於ける御心痛……………91

二 捕縛……………90

三 衆議會に於ける審問……………89

第八卷 凱旋の凱旋

第八章 御復活と御昇天

一 御墓に於ける最初の御顯……………四二〇

二 エンマウス途上、及び高間に於ける御顯……………四二九

三 ガリレアに於ける御顯……………四三七

四 御昇天……………四四七

九 御墓……………四四四

八 カルワリオ……………三九七

七 答刑……………三九〇

六 ピラトの審問(其二)……………三八四

五 ピラトの審問(其一)……………三七五

四 ペトロの否認と再度の審問……………三六七

通 俗 耶 蘇 基 督 傳 (下)

宣 教 第 三 年

吾主がベツサイダの曠野に於て、パンをお殖しになつたのは、宣教第三年の過越祭前の事でした。其所までは明白に分つて居る。夫から參拜團に加はつて、エルザレムへお登りになつたものか、或は今年に限つてエルザレム行きを見合せ、其まゝガリレアに御止りになつたものか、其邊が一向はつきりしません。なるほどヨハネ福音書には、「其後イエズス様は、ユデアを巡ることを好み給はず、ガリレアをお廻りになつた。ユデア人が殺さんと謀つて居たからである」(七ノ一)、と云ふ記事が出て居る。夫から以て推せば、御參拜なさらなかつたらしく思はれぬでもない。多くの註釋家はさう判断して居る。だが夫とても確言は出来ない。パンをお殖しになつた後、ゼネザレトへ御上陸なさつたのは、エルザレム參拜の途すがら、御立寄り遊ばしたものと見れば見られぬこともない。其上、過越祭と云へば、モイゼの律法

中でも、極めて重要なお祭禮でした。餘程の理由が無いならば、之を缺がしなさうとも思はれぬ。其んな事でも爲さつたものなら、豫てより鶴の目鷹の目、イエズス様の缺點さがしを遣つて居たファリサイ人等が、逆も黙つて見遁しはせぬ筈である。夫に彼等が何の咎立てもしなかつたのを以て見れば、やはり御参拜なさつたと云ふ方が、事實に近いのではありますまいか。唯御参拜はなさつても、ユデア人の悪意を看破つて、逸早くガリレアへ御引返しになつたのだとすれば、ヨハネ福音書の記事も立派に解釋が出来ぬではありません。さてガリレアへ御歸り遊ばしたイエズス様は、再ファリサイ人や、律法學士等と論戦をお交へになり、間もなく使徒等を従へ、西はチロ、シドン地方から、北はフィリッポのセザレア方面まで御巡廻になつた。其間にペトロの信仰宣言、御受難の豫告、御變容等、重要な出来事が次から次へと起つて來た。吾主の公生活は、いよいよ最頂點に達したのであります。

第一章 ガレリア地方に於ける最後の御巡廻

(一) ファリサイ人等の形式主義を論駁し給ふ(マテオ、二五ノ一二三〇)

「ファリサイ人等の形式主義」、ユデア人のイエズス様に對する悪感情は、日を追うて濃厚さを加へ、終には之を殺害せんと謀るに至りました。因つてイエズス様は、ユデアの宣教を見合せガリレアの各地を御巡廻になりました。時にファリサイ派に屬せる幾人かの律法學士が、エルザレムから乗り込んで來ました。彼等は間諜でした。イエズス様の行動を探つて、之を訴へん由もがなと、態々出張つて來たのでした。彼等は素知らぬ顔して、イエズス様の身邊に付きつ、纏ひつ、凄い眼を光らして、その一舉一動を睥んで居る。所が弟子等の中に、古來の習慣に背き、手も洗はぬで、其まゝパンを食する者がありました。ファリサイ人から見ると容易ならぬ罪だ。彼等は、早速之を見咎めた。一體ファリサイ人を始め、すべてユデア人は、古來の傳を固く守り、食事をする前には、必ず手を洗ふ。市街から歸つた時などは、躰までも洗つてからでなければ、食卓には就かない。其他、酒杯や、土器や、銅器や、食器用の床を洗ひ清めると云ふ様な事に就て守るべき傳は澤山なものでした。ユデア人の古い傳説を記載したタルムドと云ふ書には、是等の規定を詳細に録してある。エレアザルと云ふ教師は、その規定を等閑にして、正確に守らなかつた廉を以て、衆議會から破門せられ、死後その棺の上には大きな

石を載せられた。その罪が石殺に當る、と云ふことを示したものでありましたとか。

イエズス様は、是等の形式主義に囚はれない様、豫て弟子等を訓へて居なされた。弟子等も次第に御訓の旨を悟り、手を洗はずに、其ま、食事をする様になつて來た。之を見たファリザイ人、迎も黙つて居よう筈が無い。素より責任はイエズス様にあるのだ。然し眞甲からの攻撃は遣り切れなかつたと見え、彼等はイエズス様に近いて、弟子等の行動を咎めました。

何故、貴下の弟子等は、古人の傳に従つて歩かず、パンを食するのに、手を洗はないのですか？

御返事次第では、第二、第三と攻撃の矢を射向ける考だつたのでせうが、流石はイエズス様です。其矢を、ハツシと受留めて、直に之を彼等に投返しなされた。

何故、諸君も亦諸君の傳の爲に、天主様の掟を破るのです？イザヤは善くこそ偽善なる諸君に就て預言しました。「此民は唇で以て私を尊ぶが、其心は私に遠つて居る。人の訓誡を教へて、空しく私を尊ぶ」(二九ノ二三)と。實際、諸君は天主様の掟を棄てて、人の傳を守り、土器や、酒杯の洗清とか、又は其んな類の事を多く行つて居るのです。

斯う云つて、先づ彼等の度膽を抜き、夫から更に短刀直入、彼等の急所を突かれました。

諸君は自分の傳を守らうとして、能くも天主様の掟を廢して居るのです。モイゼは「汝の父母を敬へ」と曰ひました。又「父、若くは母を咀ふ人は死ぬべきだ」とも申しました。然るに諸君は曰つて居る。「人が、若し父か母かに向ひ、すべて私の獻げるコルバン、即獻物は、皆貴方のお爲になりますよ、とさへ言へば、夫で足りる。その父なり母なりを敬はぬでも可い」と。して別には何一つ、父なり母なりに爲て上げるのを容しません。斯の如くして、諸君は自分の傳へた傳によつて、天主様の御言を廢し、又そんな類の事を多く行つて居るのです。是までイエズス様は、ファリザイ人等の得て勝手な説法も、大概は知らぬ顔で、開流しにして置かれた。然し彼等が天主様の重大な掟までも廢物になし、馬鹿氣きつた傳をば、左も勿體らしく説くのを見ては、何時までも放つて置く譯には行かぬ。今度ばかりは、思ひ切つて之に痛棒を喰はせなされた。彼等を「偽善者」と呼び、その化の皮を引剥ぎ、その陋劣極まる心事を赤裸裸に見せつけなされたのであります。

天主様が、特更ら第四誠に重を置き給ふ事は、聖書の到る處に見えて居る。然るにファリザ

イ人等の立てた傳を以てすれば、容易にこの重大な掟を潜ることが出来る。父母が窮乏に泣いて居る時でも、「私の所有財産は、皆コルバンです。天主様に獻げたものです」と言ひさへすれば、夫で可い。幾ら金庫には有り餘る金を隠らして居ても、忽ち無一文と見なされ、父母を救援ける義務を免除されて了ふ。負債者にしても、同一便法を用ゐれば、平氣でその負債を踏み倒して可い譯でした。夫では、雷に第四誡が臺なしになる許りか、社會は根底から覆されて了ふ。イエズス様が少の容赦もなく、ビシ／＼と彼等を責め付けなされたのも、無理からぬ次第だと謂はなければなりません。

【群衆への御注意】、ファリザイ人等はイエズス様の痛棒に辟易して、更に二の句が繼げぬ。其まゝ黙り込んで了つた。初めイエズス様の周圍には、群衆が寄り添つて居たのだが、ファリザイの先生等が遣つて來たのを見て、御側を離れ、彼等に座を譲つて、敬意を表したのでした。因つてイエズス様はファリザイ人との談話を打切り、群衆を近くへ呼び寄せ、今の論戰に就て、一言の注意をお與へになりました。

皆私の言ふ所を聞いて、お曉りなさい。人の外から入る物は、何だつて人を汚すことは出

來ません。人の内から出る物こそ、人を汚すのです。聞く耳を有つた人は、お聞きなさい。

斯う言つて群衆を離れ、弟子等と家へ御這入りになりました。弟子等は近いて、

御存じでいますか。ファリザイ人等が御言を聞いて、躓きましたのは？

と申しました。イエズス様は異みなさらぬ。ファリザイ人でも、彼等の發案に係る制定でも、靈界の畑に發生した雜草だ、取合ふには及ばぬ、放つて置くが可い、と諭して、斯う曰うた。

すべて天に在す我父のお植ゑにならない植物は、引抜かれる迄です。彼等を差措きなさい。

盲者です。盲者の手引です。盲者が、若し盲者の手引をなしたら、二人とも坑に陥るでありませう。

彼等見た様な盲者の手引は、やがて坑に落込んで、滅びる筈のものだ。其んな者を相手として、彼此れ言ふには及ばぬ。唯彼等に誤られて、一步一步、滅亡の坑に進んで行く國民こそ可哀相だ、と仰有つたのである。弟子等は、稍安堵しました。然し素朴な彼等の頭には、未だ御言の意味が十分呑み込めません。ペトロは一同に代つて、

この諭を私等にお釋き下さいませ。

と願ひ出ました。「噓」とは、心の汚に關しての御話である。イエズス様は御答へになります。諸子は、未だ智慧が無いんですか。すべて外から口に入る物は、心に這入るのではなく、腹に下り、すべての食物を淨めて厠に落ちる、人を汚すこと出来ないものだ、と曉らぬのですか？却つて口から出る物は、心から出て人を汚すのです。即ち人の心の内から出るものは、悪念、姦淫、私通、殺人、偷盜、貪吝、狡猾、詐偽、猥褻、惡視、胃瀆、傲慢、愚痴であつて、是等一切の惡事は、内から出て、人を汚すのです。手を洗はぬで食事するのが、人を汚すではありません。

何を言つても、人は心が第一だ。心は善惡邪正の製造場だ。幾ら手を洗ひ、體を清めても、心が曲つて居ては、到底不正な惡人たるを免れぬ。ファリザイ人等は、是しきの事が理解らぬで居ながら、何うして人の手引だなんて、大きな顔がされたのでせうか。人を躓すのは宜しくない。然し其の躓が、躓く人の惡意に出るのならば、打遣つて置くより外に仕方がない。ファリザイ人等の躓が正しく夫でした。其所からして、人の言行を惡意に取つて躓くことを、神學上では「ファリザイ人の躓」と申します。

(二) カナアンの婦人 (マテオ、一五ノ二一—二八)

【國境の外へ】、是までガリレアの人々は、イエズス様の御教に深く感じ、その奇蹟に甚く打驚き、何處へ御出になつても、五月蠅く附き纏はつたものでした。然しイエズス様がパンをお殖しになつた後、カファルナウムの會堂に於て、靈的パンを食するの必要をお説きになつてからは、彼等の期待はガラリと外れた。所角、ユデアの國王に擁立てて、獨立動運を始めよう、と手ぐすね引いて待つて居た甲斐もなく、イエズス様が自分等の要望に應じて下さらぬので、彼等は落膽して了つた。ファリザイ人等は其所に付入つた。イエズス様に遣込められて、無念の齒を喰ひしぼり、其腹癪に群衆を煽つて、反對熱を焚付けようと、盛に運動しました。無論、彼等が幾ら蠢動したからとて、之と論戰を交へ、グウの音も出せない様にしてやるのは、お易い事だ。然しさうした所で、格別益もない話。寧ろ彼等の鋒先を避けて、一時ガリレアを立ち退いたが得策だ。斯うお考へになつて、イエズス様は弟子等とゼネザレト湖の畔を去り、上ガリレアの山又山を西北に横り、數日間の旅行を續けて、チロ、シドン地方へ出られました。

でも宣教の爲め御出になつたのではなく、昔のエリア預言者と同じく、迫害を遁れて、一時身を此處に寄せられたのみだから、勉めて人目に立たぬ、閑静な地にお住居ひになりました。

「カナアンの婦人」、イエズス様の噂は夙に國の境を越え、チロ、シドン方面にも、程餘高くなつて居ました。ユデアにダウイドの子(救世主)がお生れになつた。偉大なる預言者がお見えになつたと云ふことは、早くもシリア一帯に知れ渡り、御教を承はりたいたいのもの、疾病を癒して戴きたいものと、大勢ガリラア地方までも、推寄せたものでありました。

斯んな鹽梅でしたから、幾ら隠れようとしても、到底永く隠れ了せるものではない、早速、一人のカナアン婦人が飛出して來ました。娘が悪魔に憑かれて、痙攣を起し、騒ぎ立てるのでホト／＼弱り果てて居る所に、イエズス様が御越しになつたと聞いたものだから、是幸と駈付けたのでありました。

主よ、ダウイドの子よ、私を憐み給へ。私の娘は甚く悪魔に苦められて居ますのです。と背後から叫んで、御助を求めました。彼女はシロ・フェニチアに生れた異邦人でした。チロ

やシドン地方は、昔から單にフェニチアと呼んだものでしたが、然し此頃は、羅馬の領土となり、シリア總督の管下に屬せる所から、シロ・フェニチアの名を冠することゝなつて居たのであります。

平素、情の厚いイエズス様、常に頼まれぬ前から同情を寄せ給ふイエズス様、憂ふる人、悲める人、苦める人の願を一度でもお拒絶りになつた事のないイエズス様が、今度に限つて、一言の御答へもなさらぬ。婦人は連りに叫ぶ。弟子等ですら心を動かして、イエズス様に近き、彼の婦人が私等の背後から叫ぶやういませんか。彼を去らしめて下さいませ。とお願ひしました。彼女を憐み、その願を聽容れて立去らしめなさいましては、と周旋してやつたのであります。然るにイエズス様の御答は案外でした。

私は、唯イスラエル家の迷へる羊の爲にのみ遣はされたのです。と冷かに曰つて、一向取合つて下さらぬ。救世の事業は、固より世界的である。イエズス様は全世界を救済はんが爲に、遣はされ給うた。然し直接、御自分に托せられた使命は、ユデア國內に限られてある。今カナアンの婦人は異邦人だ。其願を聽いてやる譯には行かぬ、と仰有つた

のである。夫ばかりか、彼女の叫びを聞きたくない。五月蠅くて仕方がないよ、と言はんばかりに、其まゝ家の中へ這入つて了はれた。斯う云ふ冷かな御返答を受け、薄情な素振を見せられては、誰だつて希望の綱を失ひ、悄然と立去る筈なのに、彼女は、流石に母親である。失望もせねば、立去りもせぬ。思ひ切つて家の中へ飛込んで來ました。恭しくイエズス様の足許に平伏して、

主よ、私を御助け下さいまし、

と強請りました。イエズス様は、相變らず冷かだ。

先づ兒等に飽かして下さいね。兒等のパンを取つて、犬に與へるのは宜しくありませんよ、と御答へになりました。甚い御語ぢやありませんか。人の子の中で、最も愛の深い、優しい、同情に富めるイエズス様の御口から洩出さうな御語でせうか。自分を憎んで、迫害して、殺さうとまでして居るユデア人をば、『兒童』と呼んで可愛がり、却つて斯んなに徳の高い婦人、今しも御足の下に平伏して居る、深く御力を信じ、連りに御憐を祈つて止まない、この感すべき婦人をば、たとへ異邦人であるにもせよ、『犬』と呼んで辱めるとは、餘りと謂へば餘りぢやあり

ませんか。然し感心なのは彼の婦人です。大低の人ならば、『犬』の、何のと言はれては、屹つとブン／＼怒り出す。拒絶られた上に、侮辱されたのだから、夫が腹立たしさに、必ずイエズス様に喰つて掛る。今迄の謙遜は横着に變り、信頼は輕侮となり、尊敬は惡言となる所だが、彼女は、其んな淺ましい人間ではなかつた。侮辱されては、却つて益々謙遜した。拒絶わられては、いよ／＼御憐に絶りよつた。イエズス様の御言葉を捉へて、執拗く強請りました。

左様でムいます。主よ、然し狗兒も食卓の下に在つて、兒等のパンの遺片を食べますでムいます。彼女は益々その感すべき信仰、驚くべき謙遜を見せて來ました。『固より私は狗兒の如く賤しいものです。然し御惠の屑なりと、分けて戴けぬ筈はありません。私の願をお聽容れになつたからとて、ユデア人は何の失ふ所もありません。』と言つたのであります。イエズス様も、到頭、彼女の謙遜と忍耐とに我を折られた。是まで彼女の願をお拒絶りになつたのは、その信仰を試すが爲でした。根氣強く願へば、何事たりとも聽かれぬ事はない、と云ふ實物教示をして置かう、と思召されたからでありました。もう是で十二分にその目的を達せられた。今まで無理に壓付けて居なかつた同情は、一時にサツトと込みあげて來ました。

お、婦人よ、其方の信仰は誠に大きい。望みのまゝに其方に成ります様に！往きなさい。悪魔は娘さんから出ましたよ。

婦人は御言を信じて宅へ歸りました。見ると、今まで彼んなに狂ひ廻つて居た娘が、床に横つて、静に休んで居る。悪魔は、早や出去つたのだ。彼女の歡喜つたら如何ばかりだつたでせう？

祈禱を聽容れて戴くには、信頼と、謙遜と、忍耐と、この三つの條件が必要である。我身の賤しい、取るにも足らぬことを認め、天主様の御哀憐に深く頼り縋り、何時までも忍耐して五月蠅いと言はれるほど強請らねばならぬ。彼の婦人を御覽。イエズス様の冷かな態度を見ても、自分の切なる願を無視して、取合つて下さらぬと分つても、力を落しません。信頼の念を失ひません。『主よ、ダウイドの子よ、私を憐み給へ』と繰返しました。『止みなしに願へ、何時迄も叩け』と云ふイエズス様の御諭を知つて居たかの如く、何處までも後をつけて、連りに叫びました。止みなしに願ひました。何時までも叩きました。そして終に聽かれました。開けて戴きました。私等に取りつて又なき美鑑ではありませんか。天主様は、五月蠅く強請られるのを、お喜びになるのであります。

(三) テカポリスに於て聾者を癒し、再びパン

を殖し給ふ(マテオ、一五ノ二九―三九)

『ゼネザレト湖の畔へ』、イエズス様がフェニチアの地に御滞留なさつたのは、暫くの間、マルコ福音書には、カナアンの婦人の記事に續いて、左の如く記してある。

イエズス様は、又チロの地方を出で、シドンを経てデカポリス地方の中央を横り、ガリレリア湖(ゼネザレト湖)へ到り給うた、

と。パレスチナの地圖を展げて見なさい。チロ、シドンはガレリアの西北に位し、デカポリス地方は、ゼネザレト湖の東、ヨルダン河の左岸に沿うて、縦に長く連つて居る。イエズス様の一行が西から北、北から東へ半圓形の大迂廻をなさつたことが首肯かれませう。先づチロからシドンを指して北に進まれた。チロでも、シドンでも、極く古い、繁華な商業地で、兩地の間には、エリア預言者を以て名高いサレフタがある。沿道には、バル、アスタルテ神社の白い屋根が、棕櫚、オレンジの青い森蔭に見え隠れして、身は宛ら晝の中でも行くが如くであり

ましたらうか。然しイエズス様の思は其所には無い。都會の繁華、風景の絶勝等には御心を曳かされなさる遑すらありません。たゞ惱める人を搜ねて之を慰め、挫けた心を探して、之を強めんご欲し給ふのみである。兎に角、イエズス様は、シドンから東へ向つて、リバン山の南の麓を横り、セレ・シリアの低窪地を涉り、ヨルダン河の源流近く、アンチ・リバン地方に辿り着き、夫から南の方、フィリツポのセザレア、ベツサイダ・ユリアス等を経て、デカポリスへ御降りになつたものらしく思はれる。途中は風景の絶勝な割に、人煙は稀少に、人通も多からず、無論イエズス様を見識つた者も居ない。靜に心身を休め、弟子等の教養に力を注ぐことも御出来になつたのでありませう。

デカポリス地方は、ゼネザレト湖の東側に位し、北はダマスコ附近から、南はヤボクの急流に至るまでの地域を總稱し、其間に十個の自由都市が相聯り、互に同盟を結んで、緩急相援ふ事にして居たものである。住民は、多少ユデア人も雜居して居ないではないが、主に希臘人でした。然しセラザの惡魔憑が、夙にイエズス様の御力を吹聴して居た、カファアルナウムとは、僅に帯の様な湖を隔て、居るに過ぎないのですから、イエズス様の噂も、満更ら初耳ではなかつ

たのであります。

【啞聾者】、偕て處の人々は、イエズス様が突然御出になつたと聞かや、逸早く啞で聾の男を連れて來た。之に按手して下さる様にと嘆願した。イエズス様は、決して御拒絶にならぬ。然し餘り噂を立てられない爲に、其男の手を取つて、之を群衆の中から引出し、先づ指を彼の耳に入れ、少の唾を彼の舌に付けられた。彼に信仰を起させ、その萎縮せる器官に力を回復させる爲め、然うなさつたのである。夫れから御目を舉げ、天を仰いで、嘆息せられた。罪の爲め、斯る憐れな境遇に陥つた其男の身上を憫がり、併せて眞理の聲に耳を塞ぎ、自ら好んで、聾者となつて居る人々の事を思つて、お嘆き遊ばしたのである。斯くて、

エツフェタ、即ち開けよ、

と曰うた。すると忽ち其耳は開け、其の舌の縛は解けた。正しく物言ふことが出来る様になりました。イエズス様は例によつて、

此事を人に語つては可けませんよ、

と戒められた。然し戒めなされるれば戒めなされるほど、人々は之を盛に言弘めました。

善くまア何事も成し給うたものだ。聳者を聞かせ、啞者に物言はせなすつたのです、
ど、いよ／＼感嘆して、讚め立てるのでありました。

【再びパンを殖し給ふ】、人々が騒ぎ立てるのを見て、イエズス様は、弟子等と曠野へお立退き
になつた。夥しい群衆が忽ち押掛けた。啞者、聳者、跛者、不具者、其他、多くの病者を携へ
來つて、イエズス様に近き、御足の下に置いた。イエズス様は一々之を癒してやられた。啞
者が物言ひ、跛者が歩き出し、盲者が見える様になつたのを、面に打眺めた群衆は、ます
ます感嘆しました。イエズス様に斯ほどの能力を授け、その民を恵み給うたに付けて、光榮を
イスラエルの神様に歸し奉るのであります。

群衆は刻一刻と殖え、婦人小童を除いて、四千人の多きに達した。何時迄も御側を離れず、
御話に聞恍れて居る。用意の食物を食べ盡しても、猶歸らうとはしない。處は曠野である。
附近に人家らしい人家は無い。此儘にして置くと、餓えて、力盡きて、倒れる許りだ。イエズ
ス様は弟子等をお側に招き寄せ、

私は群衆を憐む。もう三日も忍へて私と共に居る。食すべき物も持たない。空腹のまゝ

立去らしたくはない。中には遠方から來た人々もある。恐らく途中で倒れるかも知れない。
と仰有つた。群衆の熱心も左ることながら、イエズス様の御情も亦感心ぢやありませんか。
御自分の爲に、食べること飲むことも打忘れて居る群衆の身の上を、深く思遣つて下さつた。
空腹を抱へて歩かせたかないものだ。パンを殖して彼等に飽かして遣つたら、と思召された。
弟子等の思を其所に導きたいものと、彼んなに仰有つたのである。然し弟子等は、一向イエズ
ス様の思召を悟つて呉れません。

でも此の曠野で、群衆に飽かせる程のパンを、何處から求め得ませう、
と彼等は答へるのみでした。一二ヶ月前に、この附近で、五のパンと、二尾の魚とを以て、五
千人を飽かしなすつた事すら、思出さない様である。

諸子は幾個のパンを有つて居ますか。

イエズス様は已を得ず、御自分の方から、御尋ねになりました。

七のパンと少の小魚とがある許りです、

と彼等は答へて曰ひました。イエズス様は命じて群衆を地に据らせ、七のパンを取り、感謝

して之を擧ぎ、弟子等にお與へになつた。弟子等は之を群衆の前に供へた。又少の小魚をも祝し、命じて人々の前に供へさせなされた。人々は食して、十分飽足することが出来た。残んの屑を拾つたら、七筐もあつた。食した者は婦人小童を除いて、四千人。イエズス様は群衆を立去らせ、御自分は小舟に乗つて、ダルマヌタ地方へ渡られました。ダルマヌタは、何の邊に位するか、今判然しない。マテオはダルマヌタの代りに「マゼダンの地方」と呼んで居る。多分セラサの南の方で、今日テルハシエと稱する部落が夫らしい、と云ふ考證もあるが、何とも斷言は出来ません。

デカボリスの人々は、食べることも、飲むことも打忘れて、イエズス様に従ひました。三日の間も御話に聞惚れましたので、イエズス様も之に食物をお與へになりました。彼等は、先づ神の國と其義を求めたのです。因つて現世の事をも加へられました。私等の鑑むべき所ではありませんか。

(四) フアリザイ人、徴を求む。彼等のパン酵 (マテオ、一六ノ二一—二六)

【ファリザイ人とサドカイ人の提携】 イエズス様は既に群衆を歸して、ダルマヌタへ赴かれた。然しファリザイ人等は、何うして嗅ぎ附けたものか、直に復押寄せて來た。是までイエズス様の宣教に妨害運動を試みたのは、主としてファリザイ人でした。サドカイ派の人々は政治問題に没頭んで、ガレリアの新預言者の事なんか、格別念頭に置かないのでした。殊に平素から、ファリザイ人とは、犬と猿との間柄ではあつたし、彼等の關係する問題には、一向取合ひたくない。寧ろ高所から傍觀して居る、と云ふ塩梅であつた。然し此頃になつて、律法學士等に説付けられ、終に彼等と事を共にする様になつたものらしい。ダルマヌタの位置が何處であるか、斷言こそ出来ないにせよ、カファルナウムや、デカボリスよりも南方に位し、ヘロデの居城チベリアドに近かつたことだけは確だ。ヘロデの臣下は、多くサドカイ派の人々である。彼等はファリザイ人等と打連れだつて、イエズス様に近き、矢鱈に議論を吹きかけた。イエズス様を試みて、「天からの徴を見せて貰ひたい」と願ひ出た。ファリザイ人等は前にも同じ事を言つて、イエズス様に強か極め付けられて居ながら、懲性もなく、復其んな願を持出したのである。是までの奇蹟では、未だ何うも信用が出来ない。ヨズエが日の脚を引留めたが如

く、サムエルが晴天に雷鳴を轟かしたか如く、エリアが火の車に乗つて天に昇つたか如く、何か天空に奇事を見せて下さい、と言つたのである。イエズス様は彼等の心の頑冥なのを悲しまれました。

諸君は夕暮に當つて、「空が紅いから晴天だらう」と言ひます。朝には、「空が曇つて赤味を帯びてる、今日は暴風になりさうだ」と仰有る。其んなに空の模様すら見分けることを知つて居ながら、時の徴を認め得ないのでですか。

王笏は早やユダ族を離れて居る。ダニエルの七十週は終に近いて来た。先驅者は、既に顯はれた。イザヤを始め、其他の預言者が告げ置いた奇蹟は、數知れず行はれつゝある。天の象さへ見分け得る程の者が、是等の徴にお氣が附かないとは、如何にも不思議だ。イエズス様は、心中、深い／＼嘆息を洩しながら仰せられます。

奸惡なる現代は何で徴を求めるのです。私は、誠に諸君に告げます。現代の人が、何うして徴を與へられませう。預言者ヨナの徴の外に、徴は與へられますまいよ。

イエズス様は夫でフイと話を打ち切つて、彼等を去らしめ、御自分は復船に乗つて、湖の彼方

へ御渡りになつた。然し餘り突然の御出發だつたものだから、弟子等はパンを携へることを忘れしました。船の中には、たゞ一個のパンしかありません。

「**ファリサイ人のパン酵**」、イエズス様はファリサイ人等の腹黒さを情なく思ひ、彼等が他日、如何な惡辣手段を弄んで、弟子等を苦めるかと氣遣ひ、夫となく御注意を與へて、

諸子は慎んでファリサイ人のパン酵と、ヘロデのパン酵とを用心なさいよ、

と仰有つた。ユデア邊では、パン酵を以て、「腐敗」を象徴つたもので、ファリサイ人や、サドカイ人の僻論、邪説こそ、正しくパン酵、人を腐敗らすものである。然るに曉の鈍い弟子等はイエズス様の御言を取違へて、「パンを携へなかつたから、斯う被仰るんだな」と、ヒヨんな考を起しました。今し方パンを殖して、幾千の人を飽かせなかつたのを目撃して居ながら、パンを持たないことが氣に懸つてならぬ。幾ら信仰が薄い、悟が鈍い、と云つても、夫は亦餘りである。イエズス様も其点を御咎めになりました。

主「信仰の薄い人等だな。パンを有たないからつて、何を其んなに案じるのです。未だ知らないのですか。曉らないのですか。諸子の心は未だ盲なんですか。目があつても見えないんで

すか。耳があつても聞かないんですか。未だ思付きもせぬのですか。私が五のパンを五千人に擘いて與へた時、諸子は屑の満ちた筐を幾杯、收めましたか？」

弟子「十二杯でムいました。」

主「又七のパンを四千人に擘いて與へた時、諸子は幾杯の屑を收めましたか？」

弟子「七杯でムいました。」

主「ではファリザイ人、サドカイ人のパン酵を用心せよ、と私が諸子に言つたのは、パンの事を言つたのではない、と何うして曉らないんですか？」

斯う言はれて、彼等は辛つと悟を開きました。成るほど、イエズス様が用心せよ、と仰しやつたのは、パン酵ではない、ファリザイ人や、サドカイ人等の教の事であつたのだなど、其時、漸く分りました。

【ベツサイダの盲者】、一行は進んで、フィリツボの領内に入り、ヨルダン河に沿うて、ベツサイダ・ユリアスの附近へ到着しました。人々は一人の盲者を連れて来て、之に御手を觸れ給はん事を願ひました。イエズス様は成るべく人に隠れ、噂を立てられたく無いものだ、と思召さ

れ、盲者の手を取つて、之を村外へ連れ行かれた。そして彼の目に唾をつけ、之に按手して、

何か見えるものがありますか、

とお尋ねになつた。彼は目を睜つて、

人々の歩くのが、樹の様に見える、

と答へました。この答から推せば、彼は生れながらの盲者では無かつたらしい。然もなくば、直に樹だの、人だの、と其んなに易々と見分け得よう筈がない。兎に角、見ねは見えるが、未だ朦朧として、物の文理が判然しない。やがて、復彼の目に按手なさると、目が漸く開いた。全く回復して、總の物が明に見える様になりました。イエズス様は彼を家へお歸しになつて、

家へ往きなさい。村に入らず、誰にも言ひなさるなよ、

と誠めて置かれた。彼は、果してイエズス様の御誠を守つたでせうか。是迄の例を以て見れば、頗る疑はしい。守らなかつた、と云ふ方が、事實に近いらしく思はれます。

ファリザイ人のパン酵！今日の如く、人の心を腐敗させるパン酵の多い時がありませんか？

新聞に、雑誌に、小説に、講談に、演劇に、活動寫眞に、真理の害はれ、清淨の傷けられ誤謬の種播かれ、不淨不潔の宣傳され、譽囂される時がありませうか？使徒等以上に、私等は此等のパン酵を用心せねばならぬぢやありませんか？、悲しい哉、世の人は之を一向悟つて呉れません。口に食べ、身に着る事なら、夫はく悟が速い。一を聞いて十を知る、と云ふ鹽梅ですが、靈魂の衣物、食物と來ては、何が何うならうと、全く御構ひなしです。有らゆる誤謬、有らゆる腐敗が世に蔓り行くのは、決して怪むに足りません。

(五) ペトロの信仰宣言

(マテオ、一六ノ一三—二八)
(マテオ、八ノ二七—三九)
(ルカ、九ノ一八—二九)

【セザレアのフィリツポ市】、イエズス様は弟子等と道を續けて、セザレアのフィリツポ市附近まで行かれた。此の市はイスラエルの領主フィリツポがバネアス（パン神の意味）と云ふ舊い都の跡に築き、羅馬皇帝セザル・チベリウスの片名を取つて、セザレアのフィリツポと呼んだものである。パン神（風の神）を祀れる洞穴を以て名高く、唯今はバネアスを少し訛つて、バネアスと呼び、小な一村落に其名殘を留めて居る。住民は、殆ど皆異邦人でした。イエズス様

が此處へ御越しになつたのは、群衆を集め、聖教を説き、奇蹟を行ふが爲ではなく、一時反對派の氣勢を避け、心靜に御父に祈り、専ら弟子等の薰陶に力を盡す思召からでした。随つて多分市内へは足を踏入れなさらぬで、寧ろ閑靜なヘルモン山の麓へ御隱退なされたものではありますまいか。ヘルモン山の最高峰は、海拔二千七百五十米突、水晶の様な清水が、絶えず滾々と流れて、ヨルダン河に注ぎ、地味肥え、草木茂り、四時の眺も夫々に面白く、灰色が、つた石灰岩のゴロ／＼せるユデア地方から見ると、全く別世界の趣があつたものである。さて其の途中の出來事でありました。

【ペトロの宣言】、イエズス様は例の如く、獨御祈禱をなされた。弟子等も共に居ました。祈禱終つて、イエズス様は突然弟子等に向ひ、

人々は私を誰だと言つて居るかね、

と御尋ねになりました。御主様は固より群衆の胸の底でも、其言葉の先でも、明に知抜いてお在だ。態々弟子等に御尋ねになる必要はない。斯んな問をお出しになつたのは、人々の思はくを知るが爲ではなく、もつと重大な話の緒を引出すが爲でした。弟子等は答へました。

洗者ヨハネと言ふ人があります。エリアと言ふ人があります。エレミア、或は古の豫言者の一人が復活したのだと言ふ人もあります。

イエズス様の高遠な御教、其の驚くべき奇蹟、その一舉一動の未だ閃いて居る御徳を見ては、是は、何でも凡人ではない、偉大なる豫言者だ、世にも稀なる聖者だ、と云ふことだけは、流石のユデア人も感付いたのである。然し世の始から約束されたメツシアだとは、未だに認めて居ない。如何にも嘆かばしい次第である。固より大きな、常ならぬ奇蹟を觀た時だけは、「基督よ」「約束のメツシアよ」と、直に騒ぎ立てる。然しイエズス様が彼等の誤れるメツシア觀に應じて、ユデアの王にならうとして下さらぬ。始終慎しやかに差控へて居なさる。一方ファリサイ人等は、色んな讒謗を投げ付けて、御信用を墮さう墮さうに掛つて居る。其爲に彼等の熱狂せる叫も、花火線香見た様に、パツと燃えて、パツと消え失せる。漸の事に、メツシアの先驅者位にししか認め得なかつたのであります。

然らば諸子は私を誰だと言ふのです？

イエズス様は重ねて、御尋ねになつた。三年前から、イスタエル家の迷へる羊を拾ひ集めに

掛られた。之が司牧に當るべき人々をも準備せられた。自分は何時迄も斯土に留る譯には行かぬ。自分の亡き後にも、この羊の檻を總裁し、世界の有らん限り、救世の大事業を續けて行くべき代理者を定めて置くのは、何よりの急務である。殊に最後の大慘劇も、早や五六ヶ月の後に迫つて居る。其曉に慰藉となり、依頼ともなるべきものは、彼等の外に無い。イエズス様が今に至つて、特に斯んな間をお出しになつたのも、決して偶然ではない。群衆の思はくを問はれた時、皆は口を揃へて答へました。然し今度自分等の考を問はれると、シモン・ペトロが最先に口を利きました。

御身は活ける神の御子、基督様です、

と、少の躊躇もなく答へました。是以上に、明白な、力の籠つた、完全な信仰宣言は望まれな。たゞイエズス様を約束のメツシアと認めたのみか、嚴密な意味に於ける神の御子、「活ける神の御子」と叫んだ。山をも動かす程の熱い信仰を以て、叫んだのであります。

【教會の基礎】、イエズス様はペトロの信仰宣言を喜ばれた。彼の偽りなき宣言に對するに、亦堂々たる宣言を以てせられた。遠い幾千年の後までも、不思議な効果を生むべき偉大な

る宣言を以てせられた。

福なる哉ヨナの子シモン。之を其方に啓示したのは、肉と血(人)ではなく、實に天に在す我父でありますぞ。私も亦其方に言ふ。其方は磐である。私は此磐の上に我教會を建ててあります。斯くて地獄の門は之に打勝つことが出来まします。又私は其方に天國の鍵を授けませう。すべて其方が地の上にて繫ぐ所は、天に於ても繫がれ、又すべて其方が地の上にて釋く所は、天に於ても釋かれませうぞ。

各時代の註釋家、神學者等は、深くこの御言を研究して、重大なる教理上の斷案を之から引出して居る。シモン・ペトロは御主様を『活ける神の御子』と宣言した。すると其の所謂『活ける神の御子』がペトロの誰なるかを宣言なさつたのだ。三年前、初對面の時から、早や彼にペトロの名をお與へになつたが、此に至つてその改名の理由を明にされた。ペトロとは磐を意味する。其の宏壯無比の建物たる教會が、頼つて以て安定を托すべき礎石を意味するのである。イエズス様は此時始めて『教會』と云ふ語をお用ひになつた。教會とは信徒の『集り』である。御父の御光榮を輝かし、一切の人を庇護つて、之に救濟の恵を得させるが爲に、築かれた大

きな大きな建物である。是こそ地上に實現された神の御國で、他日、天國に於て其の光榮ある完成を遂げる筈になつて居るのである。斯る宏大無双の建物を支持へる礎石に選まれるとは、ペトロの爲に何と云ふ名譽なんぞせうか。

然し此の建物の向ふを張り、之が破壊を計つて止まない別種の建物がある。イエズス様は之を『地獄の門』と名けられた。サタンが之を築き、無数の惡魔を役使し、其惡魔のお先棒たる惡人輩を驅り集めて、之を支配して居る。この暗黒の城は、絶えずキリスト様の教會を覆さんと務める。だが如何に地獄の總勢を繰出して、突撃を試みようとも、我教會はペトロ(磐)の上に根據を据ゑて居る。動きも揺ぎもするものではない。『活ける神の御子』が然うお約束になつた。寸分の間違ひもあらう筈はないのであります。

猶イエズス様は、極めて意義深長な譬を以て、右の御約束を敷衍し、説明なされた。ペトロを教會の基礎と定めた上で、之に其教會の鍵をお授けになつた。鍵を授けるとは、之が統治權を與へるとの意味である。其統治權が、絶對、無際限たることを見せるが爲に、別様の譬を借りて、『繫ぐ』と『釋く』の權を與へる、と仰せられた。ペトロが地上に於て爲す所は、天に於て

も批准認可する、と確言せられた。教會の統治に必要な、立法、司法、定教の三大権をお授けになつたのである。然し教會は物質的建物ではない。活きた、神秘的建物で、絶えず新陳代謝を繰返すのであるから、何時も活きた、神秘的基礎が無ければならぬ。一個の大きな群羊で、何時も之が司牧に當る人が居なければならぬ。一個の精神的家庭で、何時も慈父の愛と、賢い教導とを要する。この基礎、この牧者、この慈父こそ、聖ペトロの後を継げる羅馬教皇に外ならぬ。之をバーバ（父）と呼び奉るのは、家父の権力と慈愛とを兼備へ給ふからであります。教會の基礎は茲に据ゑられた。然しその教會が宏大無比の建物となるのは、今直ぐではない。前途は頗る遼遠い。民衆は今、猶誤れるメツシア觀に囚はれて居る。約束の救世主を以て現世的大王だと思ひ込んで、熱狂の餘り動もすれば無謀の擧に出んにも限らぬ。其反對に、敵は、何か善い口實もがな、と絶えず隙を狙つて居る。我身は人に憎まれ、世に棄てられ、迫害もされ、殺戮もされる筈であるが、然し夫には定れる時期がある。時期の熟せない中に、敵の手に落ちては折角の救世事業も腰を折られて了ふ。斯んな様な譯で、イエズス様は病者を癒し、悪魔を逐出しなされる毎に、此事を公にしてはならぬぞ、とお戒めになつたものである。今

度もペトロの宣言を得て、御心は大なる喜びに躍られたとは云ふもの、然し、未だ之を發表すべき時期ではないと見なさつた。「誰にも此事を言つてはなりませんぞ」と、厳しく弟子等をお戒めになりました。

【始めて御受難を告げ給ふ】、この頃からイエズス様は自分の行末を弟子等に打明け、人の子はエルザレムへ行き、多くの苦を凌ぎ、長老、司祭長、律法學士等に排斥され、殺されて、三日の後、復活するであります。

と御告げになつた。而も明に其事をお告げになつたのであります。成るほど前々にも、殆ど公生活の初から（三ノ二九・三ノ一四）、暗々裡に御受難の事を御話になつた事がある。然しその御言葉は、全く謎の様で、事の實現した上でなければ、到底悟れないのでした。然るに今日となつては、もう包みも隠しもなさらぬ。明白に、その無慘な、耻しいとも耻しい御死去をお告げになつた。御自分の身の上に就て、弟子等が確かな信仰を有つて居ることが分つたので、彼等の出遭すべき此の怖ろしい試嘗をも打開けて、豫め之が備をさせて置かう、と思召しなされたのであります。

メツシアが有ゆる苦、辱を嘗めて、死に給ふべきことは、幾百年前から豫言してあつた。然し弟子等は、一向その意味を悟り得ないのでした。彼等も當時の國人と同じく、誤つたメツシア觀を抱いて居る。救世主はイスラエルの大王となり、世界に君臨し、億兆に號令し給ふのだと信じ切つて居る。最先にイエズス様の神性を宣言したペトロすらも、イエズス様の御言を眞に受けない。彼は人々の中から、イエズス様をお呼出し申して、之を諫めました。

主よ、其んな事があつて貰つてはなりません。是は御身に有りますまいよ。師を思ふ熱誠に驅られて、彼は忽ち脱線した。前には天主様が彼の口を以て御話し下された。今は之に反して肉と血とが、口を利いたのである。世俗的考や、人間的感情が意見を發表したのである。彼の脱線したのも無理はありません。

人類救贖の爲に、苦んで死ぬのが、天主様の御定めであるのに、ペトロは夫を妨げようとした。イエズス様は其事を面白からず思ひ、振返つて、弟子等を見廻しながら、痛うペトロをお譴責めになりました。

サタン退け。私を躓かさんとするぞ。其方は天主様の事を味はないで、人の事を味つて居

るのです。

ペトロの賞讃を聞いた弟子等に、其譴責をもお聞かせなさいました。イエズス様は、嘗て惡魔に誘はれなかつた時、『サタン退け』と叱付けて、之を遠けなかつた事がある。今ペトロも第二の誘惑者となつて、天主様の御計畫を破らうとした。之に『サタン』の名をお冠せなかつたのは其爲で、『サタン』とは『反對する者』を意味する。強ちペトロを『惡魔』と御呼びになつた譯ではありませぬ。

【十字架の功德】、其時、イエズス様は、群衆と弟子等を御側近く呼集め、彼等に其の宗教の眞髓を説き、自分の弟子たらん者には、一番耻しい、そして苦しい十字架こそ、亦贖の器、救霊の道具であらねばならぬ、とお諭しになつた。矛盾も亦甚しい様だが、其實、高遠な眞理である。イエズス様は人々の心を地上より引離し、世間に愛着する念を断たせるが爲に、この眞理を彼等の胸に深く刻み付けて遣りたい、と思召しなかつたのである。

人、若し私の後に跟着て来たいと思はば、己を棄て、日々己が十字架を取つて、私に従ひなさい。そは己が生命を救はんと欲する人は之を失ひ、私と福音の爲に、己が生命を失ふ人は、

之を救ふでありませう。人、全世界を儲けようとも、其魂を損せば、何の益がありませう。又人は何物を以て其魂に易へませうぞ。此の姦邪で、罪深い現代に於て、私と私の言を耻ぢる人は、人の子も亦之を愧ぢるでありませう。蓋し人の子は、父の光榮の裏に、其使等と共に來り、其時、人毎に其行爲に従つて、報いるでありませう。

最後の一句は、罪人の爲には非常に怖ろしく、義者の爲には、言知れぬ慰安を與へるものである。茲にイエズス様は、第二の御降臨、世界終末の際に於ける公審判を、一寸お告げになつたのである。此事は、後で最つと詳しくお話しになる。世界終末の際に於ける公審判、自身が審判者として再臨すべき時の光景、その審判の様態等を、鮮に描いて御見せになります。して其の所謂「公審判」から、急に他の出來事に轉つて、

私は誠に諸君に申し上げます。此處に立つて居る方の中に、人の子がその國を以て來るのを見るまで、死なゝいものが數人ありますよ、

と仰せられた。マルコ福音書には「神の國が其權威を以て來るまで」と記してある。何方にしても、イエズス様が御威光を輝かして、御顯れになるの意味ではない。近き將來に於て、世の

罪を審く權能を顯はすべきことをお告げになつた迄に過ぎない。言ひ換ふれば、ユデア人が其不信の罪を罰せられ、紀元七十年、エルザレムは破壊され、神殿は焼拂はれ、國家全滅の不幸を見るに至るべきことを豫言されたのである。近代の註釋家は、大抵この意味に取ります。聖ペトロは、教會がよつて以て安定を托すべき巖である。隨つて教會は創設以來、殆ど二千年、天も裂け、地も崩れよと許りの暴風雨に襲はれたことすら、枚擧するに遑ない位。夫でも平然と澄し込んで居る。動きも搖ぎもせぬ。ますく發展擴張して行く許り、キリスト様の御約束は決して我を欺かない。何んなことがあつても、教會の將來に危懼の念を挾むには及ばぬのであります。

(六) 吾主の御變容

(マテ、一七ノ一一―一二) (マルコ、九ノ二八―三六)

【御變容の光景】、イエズス様は、既に御受難、御死去を豫言せられた。自分の弟子たらん者は、皆十字架を擔ぐ覺悟であらねばならぬ、と告げられた。夫から六日を経て、ペトロとヨハネと、ヤコブを伴ひ、或る高い山に登つて御祈禱をなさいました。御祈禱の中に、突然御姿が

變つて、異様に輝き渡られた。早や御受難も五六ヶ月の後に迫まつて来たので、イエズス様は、其の苦い杯を飲み干す爲の用意に、少しく御光榮を輝がし、天の樂を味ひ、以て御心をお強めになつたのである。三人の弟子等にしても、他日、御主様が、死苦に悩み給へる悲しい場面を目撃せねばならぬ筈でしたから、先づ之に其の神性の輝を仰がせ、彼等の信仰を固めて置きなさらうと、思召しなされたのであります。

イエズス様は、常に晩景から、山に退き、御祈禱をなさるので、此日も暮方になつて、山登りを致されたのちや無かつたでせうか。さて御祈禱の中に、弟子等の面前で、俄に御變容なさいました。御顔は太陽の如く照り渡り、御衣も輝いて、地上の布晒も、到底晒し得ない程に純白う雪の如くなりました。是まで奴隷の貌の下に隠れてお在になつたイエズス様が、一時その奴隷の貌を脱ぎ棄て、神の子の御姿をお顯はしになつた。其の賤しい人性の上に、尊い天主性の光を漲らせなされたのである。謂はゞ其の御復活や、御昇天や、天國に於ける永遠の御光榮をば、前以て垣間見せなされたものであります。

然し右のことは單に御變容の序幕たるに過ぎない。時に二個の人物が出て来て、イエズス様と物語り始めた。二個とは、モイゼとエリアで、彼等も威光を帯びて顯はれた。彼等が顯はれたのは、舊約全体の名義で以て、新約の創立者に敬意を表する爲であつた。モイゼは律法を代表し、エリアは預言者を代表したものである。彼等が物語つて居るのは、エルザレムに於てイエズス様の遂げ給ふべき御死去の事でした。イエズス様は有らゆる侮辱と痛苦によつて、その無窮の光榮を贏ち得給ふ筈でしたから、一時の赫灼たる光榮にまでも、苦辱を伴はせなさいました。ペトロ、及び共に居つた二人は、眠氣に負けて、居眠つて居たのだが、不圖目を醒すと、イエズス様の眩しい御光榮を仰ぎ、共に立てる二人の姿を見ました。其二人がイエズス様を離れて立去らうとして居る所でした。ペトロは週章て、イエズス様に申し上げました。

主よ、私等が此處に居るのは善い事です。思召ならば此處に三の盧を作り、一つは貴方様の爲、一つはモイゼ様の爲、一つはエリア様の爲に致しませう。

甚く怖れて居たものだから、自分ながら何を言ふのか解らぬのでした。彼は現世に、儂い、假の宿をして居ることを忘れて、何時までも今の幸福を味ひたいと思つたのであります。

場面は再び變化した。ペトロが然う言つて居る中に、一叢の輝ける雲が、彼等を蔽ひました

雲の中から聲が響きました。

是は我意を安んせる我愛子であるぞ。汝等之に聽け。

御父天様の御聲である。洗禮を御受けになつた時も、殆ど同じ辞を以て、イエズス様を御披露になりました。今日は、特に天國の最高立法者たる事を宣言し、其の説く所を敬聽せよ、ご諸人に仰付けなされたのであります。

三人の弟子等は、イエズス様方が雲の中に包まれ給ふのを見たり、天からの御聲を聞いたりして、甚く怖れ、地面に平伏して了つた。聽てイエズス様は近いて彼等に御手を觸れ、

起きなさい、懼れぬでも可い、

と曰うた。彼等は直に目を擧げて邊を見廻した。イエズス様の外に誰をも見ません。もう御變容は終を告げたのです。然しこの出來事は弟子等の心に、永く遣りました。聖ヨハネが其の福音書の巻頭に、「私等はその御光榮を仰視た。そは御父からお來になつた御獨子の如き御光榮でした」(ヨハネ)と、書いて居るのは、暗に是を指したのぢや無かつたでせうか。聖ペトロの如きは、明白に此事を物語つて居る。

彼は神にて在す父より、尊嚴と光榮とを賜はり、偉大なる光榮より、聲之が爲に降りて、「是ぞ我心を安んせる我愛子である、是に聽け」と言はれました。私等は彼と共に聖山に在る時、此聲の天より來れるを親しく聞きました(ペトロ後)と。

【山を降る時】、翌日、山を降る時、イエズス様は弟子等を戒めて、

人の子が死者の中より復活するまでは、諸子の見た事を誰にも話してはなりませんよ、

と堅く戒めて置かれた。彼等は、能く御戒を守つた。其の見た事を、當時誰にも語らなかつた。然し御話の意味が何うも解らない。「死者の中から復活するまでとは、何ちふ事だせう」と、互に語り合つて居る。其上、エリアに就ても、合點に參らぬ節がある。ファリサイ人、律法學士等の説く所によると、エリアはキリスト様よりも一足先きに來ねばならぬ。然るに今や反對に、後から出て來たのは、何うも變だ。斯う思つたものですから、イエズス様に

では、エリア様が先づお出になりませうと、ファリサイ人や、律法學士等が言ふのは、何うしたものでせうか、

と問ひました。エリアは火の車に乗つて、天に引取られた。今に死を免れて居る。世の終には

重大な任務を果すべく、天主様から遣はされる筈になつて居る。随つてユデア人は、エリアが再び地上に顯れ出づべきことを始終念頭に持つて、忘れ得ないのでした。ファリザイ人等も、能く此の大預言者の話をしたものと見える。イエズス様は彼等の間に答へられた。

成るほどエリアは、先に來つて、萬事を回復しますでせう。又人の子に就ては、多くの苦難を受け、且つ蔑にせらるべし、と録してあるが如くなるのです。私は諸子に申します。エリアは既に來ましたよ。そして人々は彼を識らず、縦に其の欲する所を彼に爲しました。彼に就て録された所に違はなかつたのであります。其の如く、人の子も彼等より苦を受けるでありませう。

イエズス様は二名のエリアを語られた。一名は實際のエリアで、使徒等が山の上で見に大預言者、一名は比喩的エリアである。實際のエリアはマラキヤ預言者の告げ置いた如く（マラキヤ）一度は、必ず來つて、國民を眞の信仰に引戻すのである。ファリザイ人等の言ふ所も、滿更嘘ではない。然し一名は既に見えた。彼はエリアの精神と權能とを以て基督様の先驅者たるべしと、未だ生れもせぬ先から告げられたのでした。でもユデア人は彼の使命を信じなかつた。

彼を散々に苦めた揚句の果は、之を淡暗い牢獄に繋ぎ、終には其の首を刎ねて了つた。自分も、纏て彼と運命を共にするであらう。斯う言つてイエズス様は、その明るい御變容に、再び暗い、痛ましい、御受難の光景を添へられた。是に於て弟子等は、洗者ヨハネを斥して、エリアと仰有つたのだな、と悟りました。

【御變容の山】、御變容の出來事は、何處の何と云ふ山の上で、行はれたのでせうか。福音書には『高い山』と記してあるだけで、其の山の名は出して無い。然し四世紀のエルザレム司教聖シリロは、之をタボル山に結び付け、古くからの傳説で、當時一般にさう信じられてあるかの如く書き遺して居る。聖エロニモも聖女パウラの碑銘に、同じくタボル説を採つて居る。タボル山はエスドロン平野の東北端に欵立ち、海拔五百九十五米突の小山に過ぎない。然し平野に突起つて居るので、割合人目に立易く、頂に登ると、随分遠望も利く。聖地では、頗る有名な山であります。

尤も近代の註釋家中には、タボル説を棄てて、ヘルモン説を取る人が多い。六日前まで、ヘルモン山の麓に在したのだから、是非ヘルモン山で有らねばならぬと云ふのです。然しヘルモ

山と云へば、イツレアの異教地に峙立てる山である。ガリレア地方の群衆が、其んな所まで推かけて行く筈が無い。然るにイエズス様がお降りになると、夥しい群衆が出迎へた。其中には律法學士等も居た、癲癩病者を連れて來た父等も居た。彼等はイツレアの異教者では無く、必ずガリレア人であつた。イエズス様は彼等の不信を咎めて、

あゝ不信、邪惡な現代なる哉、私は、何時まで諸君と共に居ませうぞ、

と曰うた。三年この方、御教を耳にせるガリレアの民に向つてでないならば、其んなに酷な御咎を浴せなさる筈がありましたらうか。タボル説を取る人は、斯う云つて反對するのです。何れの説も一理あります。何方に従つても差支はありません。

世の中の騒ぎに遠かり、思を高く上げ、心靜に祈つて居ると、天主様の御聲が聴取れる。イエズス様の照り輝ける御姿が仰がれる。イエズス様と共に居るのが、何とも知れぬ愉快なる。自分までが何時しか變客して、新しい人になるに至るものであります。

(七) 癲癩病者の平癒

(マテオ、一七ノ一四―二〇)
(マルコ、九ノ一三―二八)
(ルカ、九ノ三七―四四)

【山の下の癲癩病者】、翌日イエズス様は山を下つて、麓に残し置いた弟子等の方へ御出になりました。見れば夥しい群衆が彼等を取圍み、律法學士等は彼等に向つて、盛に議論を吹きかけて居る。群衆はイエズス様を見るや、皆驚き怖れました。今し方、神の光榮に輝いた御額には何とも知れぬ神々しさが尙漂つて居たものでせう。然し神々しい中にも、例の言ひ知れぬ優しさが溢れて居るので、彼等は忽ち御側へ馳寄つて、恭しく敬禮しました。

何を其んなに論じ合つて居るのです、

どイエズス様は御尋ねなされた。すると一人の男が、群衆の中から進んで來ました。イエズス様の御前に跪いて、

先生、私は啞の惡魔に憑かれた悴を連れて參りました。何うぞ私の悴を顧みて下さい。獨子であります。癲癩で、甚く苦んで居ります。屢火の中、水の中に落込みます。惡魔に憑かれ、俄に叫び出します。投倒されます。泡を吹き、齒を喰ひしぱり、五體は強直り碎けんばかりにした上で、惡魔奴は漸く立去るのであります。お弟子の方々へ連れて參りまして、逐出して下さい、とお願ひしましたが、お出來になりませんでした、

と叫びました。悪魔が癩癩病者に憑いて居たのです。憐れなる父は、イエズス様を尋ねて来たのですが、生憎と御不在だったので、弟子等に頼んだものである。弟子等は、直に悪魔を逐拂はうとしました。然し件の悪魔は、なか／＼頑強で、何うしても出て行かない。律法學士等は得たり賢しと、彼等に議論を吹きかけ、群衆の面前で、散々に彼等を辱めたのでありました。

恰もよし其所にイエズス様が御歸りになつた。不幸なる父の話を聞き、一同を見廻しなさると、得意の肩を聳かして、弟子等の失敗を喜べる律法學士等が居る。好奇的に事の成行を見守れる群衆が居る。信仰の足のフラ／＼せる弟子等が居る。イエズス様は急に情なく感じなさいました。

あゝ不信、邪惡な現代なるかな。私は、何時まで諸君と共に居ませうぞ、何時まで諸君を忍びませうぞ。其者を私に連れてお出で、

と仰有つた。人々は、早速連れて參りました。彼はイエズス様を見るや、忽ち悪魔の爲に癩癩を起し、地に打倒され、泡を噴いて、コロ／＼と轉げ廻りました。

主「何時頃から斯うなつたのです」

父「幼少の時分からでいます。悪魔は之を殺さんものと、屢火に水に投入れます。若し何うにか爲れますものなら、何うぞ私等を不憫と思召して、御助け下さいませ」

主「貴方が信じなさへしなされば、信する人には、何事も能はざるなしです」
イエズス様が斯う仰有ると、父は忽ち聲を擧げて、涙ながらに、

主よ、私は信じます。私の不信仰を御助け下さいませ、

と叫びました。時に群衆は益馳せ加はつて来る。彼等にワイ／＼騒ぎ立てられては面白くない。因つてイエズス様は不淨の悪魔を責めて、

啞にして聾なる靈よ、我れ汝に命す。此人を立去れ。再び入つてはならぬぞ、

と曰うた。すると悪魔は大聲に叫び、彼を甚く癩癩させて立去つた。彼は死人の如くなりまして。『死んだよ、死んだよ』と多くの人は謂つて居る。イエズス様は彼の手を取つて、引起

しなさいました。彼は立上つた。其時からスツカリ全快したのです。イエズス様は之を其父に御還しなさいました。人々は、皆天主様の大能に驚いて、イエズス様の爲し給へる總の事を感嘆しました。

【祈禱と斷食の必要】、左しもに頑強な悪魔も、イエズス様の一言に縮み上つて立去つた。弟子等は自分等の失敗が何に基くのやら、何うして自分等は彼を逐出し得なかつたのやら、一向の理由が分りません。イエズス様が家に御這入りになるや、彼等は竊に近いて、

何故私等は彼を逐出し得なかつたのです、

と問ひました。家とは路傍の唯ある家であつたらう、と云ふ人がある。然し群衆が奇蹟に驚いて、がや／＼と騒ぎ立て、居る場合なのに、路傍の家に這入つたからつて、其んなに打開け話が出来たでせうか。寧ろカフアルナムの御住宅と見る方が穩當ではありますまいか。兎に角、弟子等は内輪ばかりになつた時、自分等の不審を質したのです。イエズス様は答へて曰うた。諸子の不信仰故です。私は、誠に諸子に申します。諸子が、若し芥種ほどの信仰を有つて居ましたらば、此山に向つて、「此處から彼方へ移れ」と言ひますと、山は移るでありませう。何一つ諸子に能はない事はありますまい。然しこの類は、祈禱と斷食とに由らなければ逐出せないのです。

悪魔を逐出すには、先づ熱烈な信仰を抱いて居なければならぬ。芥種ほどに小さくても、活々し

た、力の籠つた、全幅の信頼を天主様に投げ掛ける、と云ふ程の信仰があらば、驚くべき奇蹟を行ふことすら出来る。然しながら、彼兒に憑いて居た悪魔は、殊更頑強で、有力で、之を逐出すのは、山を移すよりも難いのでした。随つて此類の悪魔に對しては、熱烈な信仰に加へるに、祈禱と斷食とを以てせねばならなかつたのです。聖ヨハネ金口は申した。「祈りつゝ、斷食する人は、風よりも軽い兩つの翼を有する；又そんな人は火よりも熱くて、地よりも高い。殊更悪魔の敵となり、仇となるものである」と。

アツズの聖フランシスコが、嘗て非常な怖ろしい誘惑に悩まされた事がありました。涙を流して天主様の御助力を祈つて居ると、何處からか聲が聞かれました。「フランシスコ、汝が、若し芥種の信仰を有つて居るならば、この山に向つて、彼方へ移れ、と曰つたら、遠く立退くであらう」と。「主よ、この山とは、何れでいますか」とフランシスコは問うた。「誘惑よ」と、お答があつた。「では、何うぞ仰の如く、私になし下さいませ」と、フランシスコが願ひしますと、忽ち誘惑は消え失せました。心内には、大なる平和が漲りましたとか。

第二章 幕屋祭

(一) エルザレム神殿に於ける教話

【幕屋祭とは？】、時は方に涼しい秋の候となつた。幕屋祭が近いた。幕屋祭はユデアの三大祝祭の一で、イスラエルの男子は、已を得ざる事故の無い限り、エルザレム神殿に参拜せねばならぬ。祖先が四十年の間、アラビアの曠野に彷徨ひ、天幕の中に住んだ當時を記念するのが、此祝祭の目的でした。其爲に橄欖や、松や、ミルトや、棕櫚の青枝を切り取つて、街衢に廣場に、庭前に、露臺に、城壁の下等に假小屋を作る。エルザレムは忽ち青葉の町と變ずる。そして八日間と云ふものは家を出て、其假小屋に住むのでありました。神殿内から吹鳴らす勇しい喇叭の音に連れて、喜ばしい歌の聲が到る處に起る。人々は、棕櫚の葉を翳すやら、レモンとか何とか果實の生つた枝を手にするやらして、盛に躍り廻る。殊に五日前に、贖罪祭が行はれ、我身は、もう罪を潔められて、清淨無垢になつたよ、と信じて居るものだから、其喜悅は一層大きいのでありました。

【從兄弟の勧誘】、さてイエズス様の從兄弟等、使徒ヤコボ及びユダを除いて、他の從兄弟等は今日になつても、未だイエズス様の御使命をハッキリ悟つて居ない。幕屋祭が近くや、イエズス様に向つて、頓だ事を言ひ出しました。

此處を去つて、ユデアへ行きなさい。貴方の行ふ業を弟子等にもお見せなさい。公に知られんことを求めながら、窃に事を爲す人はありやしませんよ。こんな事を爲す以上は、貴方の身を世に顯しなさい。

彼等も當時のユデア人と同じく、誤つたメツシア觀を抱いて居たのだ。基督たるものは、ユデアの大王、億兆の號令者であらねばならぬ、と思ひ込んで居たものた。ガリラアの如き片田舎に引込んで居るよりは、寧ろユデアへ行き、宗教、政治の中心地たるエルザレムに乘込み、堂々と教を宣べ、奇蹟を行ひ、多くの弟子を従へ、公に其のメツシアたることを顯すが可いと思ひ、其實行をイエズス様に勧めたのである。イエズス様は彼等に答へて仰有つた。貴方等の時は、常に備はつて居る。然し私の時は未だ來ないのです。世は貴方等を憎み得ません、私が其の所業の可けないことを證明するからです。貴方等は此祭日

に上京りなさい。私の時は、未だ満たないから、私は此祭日に上京りません。近いうちにエルザレムへ御上りになると知れたら、衆議會の方で、人民を煽動して、何んな事を遣り出すかも知れぬ。今は、未だ死ぬべき時ではない。イエズス様は從兄弟等に斯う仰つて、ガリレアに御止りになつた。でも從兄弟等が上京つた後で、御自分もカファルナウムを立ち、ガリレアを御通過になりました。然し誰にも知られぬ様にと思召しなされたので、公然とはせず、忍んだ様にして、祭日の爲め、御上京になりました。

【神殿内の御教話】、幕屋祭が始まつても、イエズス様はお見ねにならぬ。『彼は何處に居るんだ』とユデア人等(教師等)は、連りに搜ねて居る。群衆の中にも、イエズス様に就て、彼是ど囁いて居る。『彼は善人だ』と云ふ者がある。『否や、人民を惑はしてるんだよ』と、反對する者がある。然し何れもユデア人(教師等)を憚つて、イエズス様の事を陽に語る人どては無かつた。祝祭も半(三日目か四日目)になつた頃、突然イエズス様は神殿に上り、公々然と教を宣べられた。ユデア人は驚いた。

彼は、曾つて學んだ事も無いのに、何うして文字を知つてるんだよ、

と曰つて居る。エルザレムの教師等に就て、教を受け、講義を聞いた事もない其人が、聖書の奥義を説き、未聞の眞理を陳べ給ふので、流石の教師等も舌を捲いて驚かざるを得なかつたのである。イエズス様は彼等に向つて、一、自分の教は天主様から來たものである。二、自分の行動には非を打つべき所が無い。三、自分は天主である、近いうちに天に在す御父の許へ歸る筈である、順を追うて、此の三つを御説明になりました。

私の教は私のではない。私を御遣しになつた御方の教です。その御方の思召を行はんと欲する人ならば、此教が天主様から出たものか、私が自身から語つて居るのか、曉れるであります。己れ自身から語る人は、己の光榮を求めます。然し己を遣し給うた御方の光榮を求めぬ人ならば、眞實であつて、其人の裏に不義はありません。モイゼは律法を諸君に授けました。でも諸君の中に之を行ふ人の無いのは何うしたんです?、何なら諸君は私を殺さうと企んでお在なのです?』

イエズス様は、簡単に御自分の教の由つて來れる所を明にし、夫から一步進んで、平生の態度を御辨解なされたのである。安息日を破るのだとか、モイゼの律法を廢しようとするのだとか。

教師等は始終イエズス様に向つて讒謗を投掛け、終には之を殺して了はうと謀つて居る。其僻自分等は其モイゼの律法を一つも行つて居ないのだ。流石の教師等もイエズス様に鬮星を指されて返す辭もなく、其まゝ黙り込んで了つた。然し地方から參拜に来て、未だ教師等の陰謀を知らない群衆は、イエズス様の御言が何うも解らぬ。モイゼの律法を一つも行はぬ、と言はれては、些と癢にも障る。況してや「私を殺さうと謀つて居る」の、何のと、藪から棒に仰有るのを聞いては、此人も、まア何うか成つてよ、と思つたに相違ない。彼等はイエズス様に向ひ、君は悪魔に憑かれてるよ。誰が君を殺さうとしてるんだ、と申しました。イエズス様は、彼等の悪言には御頓着なさらぬ。前年、羊の門で癒した中風者の事を取り出して、前の御辨解をお續けになります。

私が一つの業を成しましたら、諸君は、皆訝かつて居られる。所でモイゼは割禮を諸君に授けました。尤も夫はモイゼからではなく、祖先から出たのでした。そして諸君は安息日にも人に割禮を行ひなされる。安息日に割禮を受けたからとて、モイゼの律法を破る譯はないとするならば、私が安息日に人の全身を醫したと云つて、私に諸君が憤りなされるのは何うした事で

せう。外見上からは是非しないで、正しい判断によつて是非を定めなさい。

イエズス様に悪言を投付けた群衆は、他から參拜に来たものでした。却つてエルザレムの人々は、教師等の陰謀を十分に分つて居たから、イエズス様の堂々たる御辨解を聞いては、流石に驚かざるを得ないのであつた。

人々が殺して了はうと謀つて居たのは、此人ぢやありませんか。御覽、唯今、公然と話をして居るのに、人々は何とも言ひません。彼が基督なることを司等は眞個に認めたくせうか？然し彼が何處の人だか、我々はチャンと知つて居る。キリストの來給ふ時は、其の何處から御出になるか、知る人は無い筈です。

彼等の言ふ所は如何にも變だ。彼等はミケヤの預言を知らなかつたのでせうか。メツシアがダウイド家に出で、ベトレヘムに生れ給ふべきことを信じて居なかつたのでせうか。否、知らぬでは無い、信じて居た。然し其頃の人々は、途法もない傳説を以て、其預言の意義を晦澁くなして居たのです。キリストはダウイドの町に御生れ遊ばす、夫から間もなく人目を避けて、何處かに雲隠れ、時が至ると、俄に威勢赫々として、御出現になるのだ、と信じて居たものだ

から、彼の様なことを申したのであります。イエズス様は彼等の誤つた考に、御話の緒を取り神殿内で呼びつゝ、教へて曰うた。

諸君は私をお知りだ。私が何處から来たものか云ふことも、お知りだ。私は私自身から来たものではない。私を御遣しになつた御方は眞實に在す。諸君はその御方を御存知でないのです。私は之を存知して居ます。私はその御方から出ました。其の御方こそ私を御遣しになつたのです。

御自分の使命の天主様から出たことを斷言されました。教師等は怒つて、イエズス様を捕へよう謀つた。然し、未だイエズス様の捕はれ給ふべき時ではない。誰も手を掛け得るものは無い。夫ばかりか、群衆の中からは、イエズス様を信する者が多くありました。

キリスト様(救世主)が御出になつたからとて、此人の爲して居る以上に、多くの奇蹟を爲し得なざるでせうか、

と彼等は言つて居る。イエズス様の奇蹟に驚き、是こそ約束のキリスト様に相違ない、と信じたのであります。

【ファリサイ人等の失敗】、群衆がイエズス様に就て、右様な噂を立て、居ることを耳にしたファリサイ人等は癩に障つて堪らない。司祭長と謀り、神殿の下役等を遣して、イエズス様を捕へさせようとした。然し下役等は何とも手出しが出来ぬ。折角イエズス様を捕へる積りで遣つて来たものゝ、群衆に打雜つて、イエズス様の手痛い當擦を聞くより外はありませんでした。

私は尙暫く諸君と共に居ます。そして私を御遣しになつた御方の許へ行きます。諸君は私をお捜ねにならうが、然し私には遣へますまい。私の居る所へは御出が出来ませんよ。

エルザレム滅亡の際に、ユデア人は熱心にメツシアの御降臨を希望し、そのお救助を求めたものでした。然し眞の信仰を起さなかつた爲に、到頭キリスト様へは辿り着き得ませんでした。況んや天に御登り遊ばしたキリスト様と、不信仰の中に死んで行くユデア人との間には、越ゆべからざる淵が横つて居る。何うしたつて其のキリスト様の在す所へ、行き得よう筈が無い。然し彼等は、其んな深い所までも悟るだけの頭を有ちません。

自分に遣へまいッて、然らば何處へ行く考なんだらう。異邦人の間に離散せる國民の方へ行

つて、異邦人にでも教へる積なんだらうか。「諸君は私をお捜ねにならうが、然し私には遣へますまい。私の居る所へは御出が出来ませんよ」とは、さて何の事だらう。

彼等は相顧みて、其んなに語合つて居る。其頃、異邦人の間に離散せるユデア人は夥しいものでした。夫等を頼つて國外へ赴き、異邦人の教化に力を盡す者なんだらうか、と云つて嘲笑つたのであります。

エデア人の嘲笑は、間もなく事實となつて顯れた。御教は忽ち全世界に弘まり、離散のユデア人、異邦人の別なく、一様に之を照す様になりました。之に反して自分等は、神殺の天罰を蒙つて世界の八方に、散々バラ／＼となり畢りました。何と云ふ皮肉なんでせうか。

(一) 幕屋祭の最終の日と姦婦事件 (ヨセフとマリヤ)

【最終の日】、幕屋祭は八日間行はれ、其間は毎朝一人の司祭が行列を従へてシロエの池に下り黄金の器に水を汲取つて持帰り、之を祭壇に献げます。すると群衆は感謝の詩を歌ひ、樹枝を打振り／＼躍り悦び、荒野に於て岩から水を流し、民の渴をお醫し下された御恵を感謝する

のであります。さて幕屋祭も、いよいよ終を告げると云ふ日に、イエズス様は右の祭式から話の柄を借り、立つて群衆に叫ばれた。

渴いた人があらば、私の許へ來つて飲みなさい。私を信する人は、聖書に曰つてあります如く(イザヤ)、活ける水の河が、其腹から流れ出るであります。

イエズス様は嘗てサマリヤの婦人と御話の序に、我身を「活ける清水」と稱し、靈的渴を醫すには自分を信じなければならぬ由を説かれた事がある。今度も同じ思想を繰返し、そして自分を信する人が、聖靈の賜を豊に蒙るべきことを譬へて、「活ける水の河が其腹(身内)から流れ出るであります」と曰うたのである。其聖靈は、イエズス様の御昇天後、お降りになる筈で、此時までは、未だ誰あつて、聖靈を蒙つた者は居なかつたのであります。

時に群衆の中には、「是こそ眞の預言者よ」と曰ふ人があり、「是こそキリスト様よ」と曰ふ人もあつた。然れども或人々は夫に反對して、「キリストがガリラヤから出る筈だらうか。聖書に「キリストはダウイドの裔である。ダウイドの居たベテレヘムの町から出る」と曰つてあるではないか」と曰ひ、イエズス様に就て、群衆の間に異論が起りました。中にはイエズス様を

引捕へようと欲する者もあつたが、然し誰も手を下し得ないのでありました。

さてイエズス様を捕へに遣はされた下役等は、司祭長、ファリザイ人の許に空手で歸つて行きました。「何故、彼を引張つて來なかつたのだ」と、彼等は怒鳴り付けた。「何うして何うして、此人の如く語つた人は未だ曾てありませんよ」と、下役等は答へた。餘程、感心の體である。彼等はイエズス様を捕へんものと、隙を狙つて御側に付纏つて居ました。その神々しい御行動を見ました。その感すべき御話も聴きました。根が悪人でない彼等は、沁々と感心して了つたのであります。ファリザイ人等は餘程开を忌々しく思つたものと見ね、

貴様等までが惑はされたのか、首長や、ファリザイ人の中に、一人でも彼を信じた者があるか。然れども彼の律法を知らない群衆だ、彼等は誑はれたものだ、

と、散々に悪罵を浴せかけ、猶もイエズス様を殺害せんと謀つて居る。所で何時ぞや夜陰にイエズス様の寓宅を叩いた彼のニコデモでした。彼はファリザイ人で、衆議會員で、内心ではイエズス様を信じて居たものでした。成るほど公然其信仰を表白しは得なかつたが、然しファリザイ人等の殺意を見ては、何うして手を拱いて、傍觀して居られません。

我々の律法では、先づ其人を聴き糺しもせず、その爲す所を知りもせぬで、之を罪に定める

と云ふことがありますか、

と斷然異議を唱へました。思ひがけも無い反對に、ファリザイ人等は少からず面喰つた。

足下も、まア、ガリレア人ですか。聖書を探つて見なさい。預言者はガリレアから起る筈ではない、とお曉りなさい、

と惡體を言ひました。其實ガリレアからはヨナス、ナウムの如き預言者が起つて居る。然し彼等はイエズス様を憎む餘りに、其んな事を思ふ暇すら無かつたのである。一體ユデア人、殊にエルザレムのユデア人は、餘程ガリレア人を輕視んじ、ガリレア人と云へば、無知無學な田舎者と思つて居ないのでした。イエズス様はガリレアに御成長なされた。弟子等も大抵ガリレア人でした。随つて、後日、基督教徒を嘲つて「ガリレア人」と呼做したファリザイ人等は、早や此頃から、イエズス様と其弟子等にそんな綽號を付けて、蔑視んで居たものらしい。でも彼等はニコデモの道理ある一語に、相談の腰を折られ、話は其まゝにして、思ひ／＼に自宅へ歸つて了つた。

【姦婦捕へらるる】、この日イエズス様は橄欖山へ行かれました。多分、露天に跪坐き、一夜を祈り明しなされたものと思はれる。翌日、黎明に復た神殿へ御出になりました。群衆は擧つて御側へ馳寄つて來ました。イエズス様は坐して彼等に教へて居なさると、律法學士、ファリザイの徒輩が、姦淫の現場を押へられた一人の婦人を引ばつて來ました。之を真中に立たせ、さてイエズス様に申します様、

先生、この婦人は姦淫を犯して居る所を押へられたのです。律法に、モイゼは斯んな者を石殺にすべく命じて居ります。貴方は何と仰しやいますか。

彼等が斯う申したのは、イエズス様を試みて、之を訴へる口實を得んが爲でした。「收税吏や、罪人の友」と呼ばれ給ふ位に、情厚いイエズス様の事だから、屹つと「石殺にしてはならぬ」と仰しやるに相違ない。其時こそ「モイゼの律法を破る不屈者だ」と叫び、之を衆議會に突き出さうと云ふ魂丹からであつた。

イエズス様は彼等の腹の底を看破つて、一向取合ひなさらぬ。黙つて身を屈め、指の先で地に物を書いて居なさる。そんな問題は自分の關係すべきものではない、と云ふ態度をお見

せになつたのであります。返答に窮して、然うなさるのだと早合點をしたものか、彼等は強ひて問ひます。何時になつても問ひ止めません。イエズス様は、やをら立上つて、

諸君の中に罪の無い方が、真先に石を彼婦人に擲ちなさい、

と仰有つた。そして再び身を屈めて、地に物をお書きになる。律法は全うせねばならぬ。罪人を罰するのは可い。然し官憲が職務を執行する場合、又は何か特別の事情に餘儀なくされた場合を除けば、然う易々と處罰を加へるべきではない。誰しも罪のない者は無いのだから、と御諭しになつたのである。ファリザイ人等も、ハタと行き詰つた。我と我身に願て見れば、罪の無い者と云ふは一人もない筈だ。姦婦を捕へて居た彼等の手は、何時とはなしに緩んで來た。年長者から初めて一人々次第に立去りました。後に残つたのはイエズス様と、真中に立つて居る婦人ばかり。其時イエズス様は立上つて婦人に向ひ、

婦人よ、貴方を訴へて居た人々は何處に居ますか。誰も貴方を罪に定めなかつたんですか？と仰有つた。

主よ、誰も、

ご婦人は唯だ一言答へました。嬉しいやら、耻しいやらで、亦云ふ所を知らなかつたのであり
 まし、
 私も貴方を罪に定めはしません。往きなさい。今後、復た罪を犯してはなりませんよ、
 と注意した上で、彼婦人を其まゝお歸しになつた。何時もながら、イエズス様の御情の深く厚
 いこと、云つたら、誠に以て感ずるの外なしであります。

平素貞操の徳に最も重きを置き給ふイエズス様が、公然と姦婦を庇ひ、之を易々と赦し、却
 つて告訴人等に赤恥を搔かせなかつた。殊に「私も貴方を罪に定めませんよ」と云ふ最後の
 一句の如きは、何うも面白くない。物の道理を善く分らない人には、罪を奨励するものゝ様に
 聞かぬでもない。斯う云ふ譯で、昔は此の出来事を餘り信者に話して聞かせぬのでした。各
 地の教會で用ゐて居た福音書中にも、此話だけは削つてありました。舊い寫本に、多く此事
 を載せてないのは、その爲であります。然し善く考へて見ると、イエズス様の御精神は
 決して其んなものではありません。イエズス様は夢にも罪を見逃しなかつたのではない、た
 だ罪人を憐み給うた迄である。サマリヤの婦人や、マリア・マダレナに御赦しになつた如く、

誠意から悔い悔める罪人に快く御赦し下された迄に過ぎない。世に貞操の花を香はせるには
 罪に汚れた者を片端から取除けて了ふよりは、寧ろ其の汚を清めてやるに若くなしです。
 姦淫罪を防ぐには、刑罰を以てするよりも、愛と親切を以てした方が一層有効でありま
 す。殊に男子たる者は能く勝手な事をする。自分では散々に放蕩を遣らかしながら、女子が
 少しでも不都合な事をする、直に、血相を變へて怒り出す、腕力に訴へる、裁判沙汰にも
 及ぶ。然し貞操と云ふ問題に就ては、男女の別は無い。天主様の御前では、男子も女子も一
 様に貞操を守らねばならぬ。イエズス様は這般の道理を、暗々裡に御諭示になつたのであ
 りました。

(三) ファリザイ人との大論戦 (ヨハネ二五九)

【自己証明】、エルザレムの神殿は婦人庭の所に、十三個の賽銭箱を備へて、参拜者の獻納金
 を受ける事にしてある。其庭に高さ五十クubitからの燭臺が二本ありました。幕屋祭中は、
 毎夜之に火を點すのでした。が、群衆は其周圍に集つて、笛を吹くやら、琴を弾するやらして、

踊り喜んだものであります。イエズス様は其燭臺の下に坐つて御教を説かれました。もう祭日が終つたので、燭は點してないが、然し夫から緒を取りて、再び御話になります。

私は世の光です。私に従ふ人は暗黒を歩きません。却つて生命の光を得るであります。斯う仰有ると、例のフアリザイ人が直に横槍を入れて、雑せつ返しました。

君は自ら我身を證明するのだ。君の證明は眞實ではない。

イエズス様はお答へになる。自分は我身の神たることを知つて居るから、我身を證明し得る。

否な、自分以外に正しい證明を爲し得る者は無い。よし證明には、二人以上を要するとしても自分は單獨ではない。父と共に在る。自分の證明は何處までも眞實だ、と力を籠めて斷言なさいます。

私が私を證明するからつて、私の證明は眞實です。私は何處から来て、何處へ往くか知つて居ます。然し諸君は私が何處から来て、何處へ往くか、御存知ぢやありません。諸君は肉身によつてお是非きなさる。私は誰をも是非きません。よし是非く事があつても、私の是非く所は眞實です。それは私は單獨ではない。私と私を御遣しになつた父とあるんだか

らです。諸君の律法にも、『二人の證明は眞實だ』(申命記一七、六)と録してある。私は私を證明します。私を御遣しになつた父も、亦私を證明して下さいます。

フアリザイ人等は申しました。
君の父は何處に御在だ。

イエズス様が、天主様を『父』と御呼びになるのだ、と彼等は覺りました。一つ困らしてやらうと思ひ、『君の父は何處に御在だ。其父を見せて貰ひたいものだ』と押搦つたのであります。イエズス様は、彼等の間に明白な答こそお與へにならなかつたが、然し答ふべき所は十分答へて置かれました。

諸君は私も私の父も御存知ないのです。若し私を御存知でしたら、私の父をも必ず御存知な筈であります。

神殿の内、賽銭箱の傍で教へ給ふ時、イエズス様は斯う仰しやつた。神殿内の事ですから、捕へようと思へば、直に捕へられる。でもイエズス様の捕へられ給ふべき時は未だ来て居ない。天主様を父と呼ぶなんて、失敬千万など、彼等はブリク怒つて居たのだが、然し誰も手

を掛ける者は居ませんでした。

「ユデア人の不信」、暫く間を措いて、イエズス様は再び彼等に向つて、御話を續けられます。

私は行きます。諸君は私を御捜ねなさらうが、然し御自分の罪の中にお死になさるでありませう。私の行く所へは、諸君は何うせ御出が出来ないのです。

やがて國民の上に来るべき天罰をお告げになつたのです。然し彼等は御言の眞意が解りません私の行く所へは、諸君は、何うせ御出が出来ないのです、と言つてるが、此人は自殺でもするんだらうかな。

ご皮肉を言ひました。ユデアでは、自殺を以て殺人犯と同様に見做し、自殺をした者は、暗い地獄へ落ち行くのだと一般に信じて居ました。でファリザイ人等は、イエズス様の極めて眞面目な御言を嘲弄つて、我々だつて自殺はやり切れぬ。其んな暗い所へなんぞ眞平御免だよ、と云つたのであります。イエズス様は彼等の嘲弄に對して、一層明に御答へになります。

諸君は下よりせる者、私は上からの者です。諸君は此世の者、私は此世の者ではありません。だから諸君は御自分の罪の中にお死になさるでせう、と私が申したのです。若し私の夫

(キリスト)たることを信じなさらぬならば、諸君は何うせ御自分の罪の中にお死になさるでありません。

イエズス様の御言は、いよ／＼出て、いよ／＼嚴肅になつて來ました。ファリザイ人等の不眞面目さも亦随つて、いよ／＼鮮明に暴露されます。

君は誰だよ。

信じなければ、救はれぬ、罪の中に死なねばならぬ、と云ふ程の君は、そも何んな御方だよ、と彼等は問詰めて來た。イエズス様は御答へになります。

私は素より諸君に言つて居る所の者(キリスト)です。私は諸君に就て言ふべき事、審くべき所を多く持つて居ます。然しながら私を御遣しになつた御方は眞實に在す。して私が世に在つて語る所は、彼の御方から聞いたものであります。

たとへ彼等の行動を咎め、容赦なく之を審く様な事があつても、夫は皆御父から聞いた所で眞實偽りなした、と仰しやつたのである。然し彼等は、ますます／＼暗黒から暗黒へと沈み行くばかり。天主様を父と稱し給ふのだ、と云ふことすら曉り得ない位。イエズス様は彼等の盲目を悲

み、自分がやがて十字架の上に擧げらるべきこと、その結果、多少目を開ける者の出づべきことを豫言なさいます。

諸君は人の子が擧げられよう時、私が其(キリスト)たることをお曉りになりませう。私が自分からは何事をも爲さぬ、父の教へ給へるが儘に、此等の事を語るのだ、とお曉りになるで

ありませう。私をお遣しになつた御方は、私と共に在す。私を孤獨にして置き給はぬ、と

云ふのは、私が常に思召に適へる事を爲すからであります。

今度はイエズス様の御言が良好い結果を生んだ。多くの人はイエズス様を信じました。イエズス様は其の信仰したユデア人に向つて曰うた。

諸君が若し私の言に止りますならば、實に私の弟子であり、眞理を曉り、眞理は亦諸君を自由ならしめるであります。

彼等はイエズス様を信じたとは云へ、以前の誤つた見解は少しも脱却して居ない。「自由ならしめる」なんて、我々は奴隷ではないぞ、と自尊心の強い彼等は、イエズス様に喰つて蒐りました。

私等はアブラハムの子孫です。未だ曾つて誰にも奴隷となつた事がありません。「自由になりませう」なんて、何うして仰有るんです。

劍もホロ／＼の挨拶振りである。餘程癪に障つたものと見ゆる。イエズス様は彼等に御答へになります。

私は誠に實に諸君に申します。すべて罪を犯す人は罪の奴隷です。奴隷は限りなく家に止るものではありません。限りなく家に止るのは子です。されば子(キリスト)が若し諸君を自由ならしめたならば、諸君は實に自由であります。諸君がアブラハムの子孫たることは、私も承知して居ます。然し私の言が諸君に徹底(よく分らない)しない爲に、諸君は私を殺さうとしなさん。私は私の父に就て見た所を語ります。諸君は諸君の父に就て見た所を行ひなさるんです。

血統の上からは、成る程アブラハムの子孫である。然し折角、罪の奴隷から救つてやらうと云ふ自分を殺さうとする所から以て見ると、實際は悪魔の子孫だ、と随分猛烈な皮肉を浴せられた。彼等は其皮肉を分つたか否か、其所は何とも知らぬが、然しアブラハムの子孫に非ず、

と言はれたことだけは、確に悟りました。で彼等は繰返して、我々の父はアブラハムです、

と叫びました。イエズス様は彼等の言尻を捉へて、更に一步を進められます。

諸君が果してアブラハムの子孫ならば、アブラハムの業を爲しなさい。然るに諸君は私をば、天主様から聴いた真理を諸君に告げるこの人をば、殺さんと謀つてお在だ。斯んな事はアブラハムの爲さなかつた所。諸君は御自分の父の業を爲さるんです。

自分等の父と言はれるのは誰の事だと、彼等も薄々解つて来た。是に於て、いよ／＼銅羅聲を張り擧げて叫び立てます。

我々は私通に由つて生れたものではない。我々はたゞ獨の父たる天主様を有つて居るのです、舊約聖書には、偶像崇拜を、私通や、姦淫によく譬へてある。自分等は偶像を崇拜する異邦人とは違ふ。眞の神を父と仰いで居るものだ、と言つたのである。固より信仰の上から云へば然うでしたが、如何せん、彼等の行爲が全然其信仰を裏切つて居る。イエズス様は其の點を捕へて、烈しく突込まれました。

天主様が果して諸君の父ならば、諸君は必ず私を愛しなされる筈です。私は天主様から出て来たのですから。私は私から来たのではない。彼の御方が私を御遣しになつたのです。諸君は何故、私の話を御曉りにならぬのですか。私の語る所を聞き得ないからぢやありませんか。諸君は悪魔なる父から出たもの、敢へて其父の望を遂げようと欲しなされるのです。彼は初から殺人者でした。眞理に立ちませんでした。眞理は彼の中に無いからです。彼が虚偽を言ふ時は、夫こそ自分から云ふのです。彼は虚偽者で、而も虚偽の父だからです。私は眞理を説きましても、諸君は私を信じなさらぬ。諸君の中に誰か私に罪ありと證しませうぞ。私が諸君に眞理を説くのに、何故私を信じないのです？天主様からの者は、天主様の御言を聴きます。諸君の聴かないのは、天主様からの者で無いからです。

大膽に、思切つて、事實を有の儘に直言して、彼等の自惚を打破らうとなされました。諸君の中に誰が私に罪ありと證しませうぞ、自分の肉を啖はうと嗔り狂ひつゝある敵を向ふに廻はして思切つた挑戦状を投付けなされたのです。然しイエズス様の無罪の清さ、其聖徳の高さは、天下に知れ渡つて居る。流石のユデア人でも、一人として其挑戦に應じ得る者が無い。唯相變

らず、

君はサマリア人よ、悪魔に憑かれてるよ、と我々が言ふのは尤だ、と毒付くのみでありました。イエズス様は狼狽へず、騒がず、彼等の毒舌を一々辨駁なさいませう。

私は悪魔に憑かれて居ません。却つて私の父を尊んで居るのに、諸君は私を侮辱なさるんです。私は私の光榮を求めません。別に之を求め、且つ審判し給ふ御方があります。私は誠に實に諸君に申します。人が、若し私の言を守りますならば、永遠に死を見ないでありませう。

是に於てユデア人は、いよく威丈高になつて、悪言を吐き散します。

我々は今こそ君が悪魔に憑かれてる事を曉つた。アブラハムも死ねば、豫言者等も死なれた。夫に君は、「人若し私の言を守らば、永遠に死を味ひますまいぞ」と言つて居る。君は我の父アブラハムよりも偉大なのか。彼も死なれた、豫言者等も死なれたのに、君は自分を何様となすのだ？

彼等の語氣はますます荒く、殺氣立つて來た。然しイエズス様は決してお騒ぎにならぬ。平然と構へながら御言を續けなさる。

私が若し我身に光榮を歸しますならば、私の光榮は皆無でせう。私に光榮を歸して下さる者は私の父です。諸君は夫を諸君の天主様ちやと言つて居られる。諸君は彼を御知りでないが、私は彼を知つて居ます。若し私が彼を知らぬと申しましたら、私も諸君と均しく嘘偽者でありませう。然し私は彼を知り、その御言を守つて居ます。諸君の父アブラハムは、私の目を見ようと樂んだものでしたが、見て喜びました。

アブラハムは信仰の目で以て、救主御在世の日を見ました。見て言ひ知れぬ喜悅に躍つたのであります。

君は未だ五十歳にもならないんだ。夫で居てアブラハムを見たぞ？

ユデア人は躍氣になつて詰め寄せた。イエズス様は靜に御答へになります。

私は誠に實に諸君に申します。アブラハムの生れぬ先から、私は居りますよ。

神と人、造物主と被造物、イエズス様とアブラハムとの間に存する差異を言ひ盡して餘蘊なし

である。我身は永遠に存するものだ、神に外ならぬのだ、幾らイエズス様だつて、是よりも明に斷言し得給うたでせうか。ユデア人は御言の眞意を十二分に曉つた。イエズス様を以て神を瀆したものと見做し、卽座に瀆神の罪に對する罰を加へようとした。時に神殿の修築工事は未だ竣つて居ない。庭には石片がコロ／＼して居る。其石片を掴んで彼等は立上つた。イエズス様に投付けようとしたのです。イエズス様は群衆の中に身を隠して、其ま、神殿を出て了はれた。

今の人も、よくイエズス様に石を投付けて居る。不信仰の石、傲慢の石、邪淫の石、詐偽の石、親不孝の石、大きい、小さい、種々雑多な石を打付けて居る。爲にイエズス様は御姿をお隠しになる。忽ち心は眞暗になる。ユデア人見た様に、いよく罪から罪へ溺れ込む。救霊も何も失ふ不幸に陥るのであります。

(四) 生來の盲者 (ヨノーハ一四)

【盲者癒さる】、其日か數日の後かの事でした。イエズス様は弟子等を伴ひ、街衢を御通りにな

ると、生來の盲者にハタと行遇ひなさつた。弟子等はその盲者の惘然な状を見て、

先生、此人が盲者に生れ付いたのは、誰が罪を犯した爲ですか。自分ですか？夫とも兩親ですか？

と問ひました。天主様が親の罪を必ず子孫に報い給ふのだ、と彼等は信じて居たものでした。成るほど肉身の災禍は往々罪の罰である。『積善の家に餘慶あり、積惡の家に餘殃あり』と云ふのは、滿更無稽の妄説ではない。然し如何なる災禍、如何なる疾病でも、悉く之を罪の罰に歸するのには、些と間違つて居る。イエズス様は御答へになります。

此人でも親御でも罪を犯した爲ではない。たゞ彼の身の上に、天主様の御業の顯はれんが爲です。私も晝の間(生きてる間)は、私を御遣しになつた御方の業を爲さねばなりません。誰も業を爲し能はぬ夜が來ますぞ。私は世に在る間と云ふものは、世の光です。

もう餘命が幾何も無い、急いで働かねばならぬ、と自ら御奮發なさいました。そして彼の盲者に物質的光を與へてやらうが、然し自分は亦精神的光を投げて、暗黒の世界を照すべき一大天職を帯びてゐることをもお漏しになつたのでした。イエズス様は斯う仰有つてから、地に

唾し、其唾で以て泥を造り、之を彼の目の上に塗り、

シロエの池へ往つて洗ひなさい、

と曰うた。シロエとは「遣はされた者」と云ふ義である。天から遣されたイエズス様と、此池の名と、如何にも配合が巧いちやありませんか。シロエの池は既に舊約のイザヤ豫言者時代から在つた。唯今もエルザレム城の東南の隅に残つて居る。長さが五十尺、幅と深さが十五尺ばかりもあります。イエズス様が泥を塗つて盲者を癒し給うたのは、少しの土を以て人祖の體をお造りになつた天主様の遣り口に酷く類似して居ませんか。然し一つは、亦夫によつて其奇蹟の超自然的性質を明にお見せなされたのぢや無かつたでせうか。さて彼の盲者はイエズス様の御言を信じ、其の仰有る通りに致しますと、忽ち目が明きました。立派に物が見える様になりました。生れてから初めて光を仰ぎ得た彼の嬉しさ！、あア誠に如何ばかりでありましたでせう。

【事實の調査】、近所の人や、彼が物貰ひをしてるのを豫て見て居つた人等は驚いて、「是は据つて乞食をして居た者ぢやないかね」と言へば、或人は「然うだ」と言ひ、或人は「否や、彼に似てるんだ」と言ふ。彼は夫を打消して、「私です」と言つて居る。人々はいよいよ驚いた。

た。

では何うしてお前さんの目が明いたんだよ、

と尋ねると、彼は答へました。事實を正直に物語りました。

彼のイエズスと仰有る御方が、泥を造つて私の目に塗り、シロエの池へ行つて洗へ、と言つて下さいました。私は行きました。洗ひました。そして見えます。

人々は重ねて、

其の御方は何處にお在でだ、

と彼に問ひました。然し彼はイエズス様を見た事が無い。

存じません、

と答へるより外はなかつた。是までは私の調査で、此の次に最つと重大な、公の調査が行はれた。彼の人等は、生來の盲者が癒されたのに驚き、當局者の手を以て、事實を調査べて貰はうと思つたんでせう。彼をファリサイ人の許へ連れ行いた。所でイエズス様が泥を造つて、彼の目をお明けになつたのは、安息日の事でした。安息日には目に唾を付けることすら出来ない

フアリザイ人等は豫てより言つて居たのだから堪りません。泥を造つたり、之を目に塗つたりするのは容易ならぬ罪だ、棄て置くべきで無い、と彼等は思つて、

お前は何うして見える様になつたんだよ、

と彼に尋ねた。彼は正直に答へた。

彼の御方が私の目に泥を塗つて下さいました。私は之を洗ひました。そして見えるのであります。

之を聞いて、フアリザイ人の間に諍がおツ始まつた。「此の人は安息日を守らぬのだ。天主

様から遣された者では無いよ」と言ふ者があり、「罪人が何うして斯んな奇蹟を行ひ得るか、

と反駁する者があります。で再び彼に向ひ、

お前は、其目を開けて呉れた人を、何と謂ふのだ、

と問ひました。

豫言者です、

と彼は言下に答へました。

【兩親を訊問す】、ユデア人等(フアリ)は、彼が嘗て盲者であつた、そして今は見える様になつたのだとは、何うしても信じ得ない。終には彼の兩親を呼び出して、
 是はお前等の子か？言ふ通り盲目に生れ付いたのか？然らば何うして今見るのか？
 と尋ねた。兩親は答へました。

ハイ、是は私等の子で、盲者に生れ付いたことは知つて居ます。然し何うして唯今見るやら、其所は一向存じません。誰が彼の目をお明け下さいましたか、其邊も私等には分りません。彼にお聞き下さいませ。善い年を取つて居ます。我身の事は自分で話しますでムいませう。

兩親が斯んなに言つたのは、ユデア人を怖れて了した。イエズス様をキリストだと宣言する人があらば、會堂から逐出す、破門に處する、と彼等が既に話合つて居たのでしたから、「善い年を取つて居ます。彼に御尋ね下さいませ」と巧く逃げたのであります。

【再び彼を訊問す】、兩親を訊問しても、格別埒が明かなかつた。彼等は已を得ず、再び盲者だつた彼を呼出した。

天主様に御光榮を歸し奉れ。我々は彼が罪人たることを知つて居るのだ。と言ひました。彼に事實を偽らせようとするのです。困つた判事もあればあつたものぢやありませんか。然し彼は其んなに卑劣な漢ではなかつた。幾ら欺かれても、事實を一步も枉げません。罪人だか何だか、私は存じません。然したゞ一つ知つて居ます。私は盲者でしたのに、今は見ゆる様になつて居ります。

百千の詭辨も、此の事實の前には碎けざるを得ない。意外の返答にファリザイ人等も、ホトホト困り果てた。何とかしてこの急場を切抜けたと思つたものか、辻褃の合はぬことでも彼が言ひ出せば、と儂い望に曳かされてか、今一度尋ねました。

彼はお前に何をしたか。何んなにしてお前の目を明けたのか。

餘りの五月蠅さに、彼も勘忍袋を破つた。目の前に轉げ出て居る奇蹟を信じ得ないファリザイ人等の態度が、癢に障つてならぬ。彼は思切つて皮肉を浴せてやつた。

早や貴方等に申し上げました。貴方等はお聞きになりました。何で復お尋ねになるのです？ 貴方等も彼の御方の御弟子にでもなりたいんですか、

ファリザイ人等は嚇つと怒つて、彼の上に咀の唾を吐きかけた。

お前こそ彼の弟子になれ。我々は悉くもモイゼ様のお弟子だ。天主様がモイゼ様に御話になつたことは知つて居る。然し彼が何處よりせるか、我々は知らないのだ。

斯んなに怒鳴られても、彼は決して辟易しない。いよく大膽に、ファリザイ人等を柳擡つてやりました。彼は答へて申します。

ほ、是は亦不思議な事、彼の御方の何處からせるか御存知でありませんツて？。私の目をお明け下さいました程の御方ですの！ 私等は知つて居ます。天主様は罪人に聴き給はぬ然し天主様に仕へ、その御旨を行ふ人があれば、之にお聴き下さいますことを。生來の盲者の目を明けた人があるよ云ふことは、開闢以來、未だ曾て聞かざる所です。彼の御方が若し天主様からお出にならなかつたら、何事をも爲し得なさらぬでういしましたでせう。

見事な三段論法で、ファリザイの先生等を遣り込めた。天主様は罪人にお聴きなさらぬ。然しイエズス様にはお聴きなさつた。自分の目をお明け下さつたのが、何より證據。して見るとイエズス様は罪人ではない。天主様の御親友だ。實に千鈞の重みある斷案を下したのです。ファ

リザイ人等も流石に言ふ所を知らない。

何だ、貴様は全く罪の中に生れて居ながら、我々に説法するのか、

と言つて、無法にも彼を外に逐出した。

【最初の公奉者】、彼は最初の公奉者でした。イエズス様の神聖を宣言し、之が爲に犠牲となりました。「逐出した」と云ふ語の中には、「破門に處した」との意味が含んで居る、と主張する學者が多い。たとへ正式に破門を宣告されなかつたにせよ、實際上、破門されたも同様に扱はれたことだけは、疑を容れません。然し彼は其の大膽な宣言に早速報いられた。イエズス様は彼が肉の目を開けてやると共に、その靈の目をも照し、自ら救主たることをお諭しになりました。彼が放逐されたとお聞になつた後、彼に行遇ひなさるや、

貴方は神の子を信じますか、

とお尋ねになりました。彼がイエズス様を見たのは今が始でした。たゞ御聲だけは聞き覚えて居ましたでせう。そして彼は、イエズス様が神の御子である、基督夫れ自身であるとは、今が今まで夢にも思つて居ません。たゞ天主様に遣され給うた偉大なる豫言者だ、と信じ込んで居た

許りでした。其んな豫言者だから、キリスト様のことも御存知であらう、自分に御示し下さるであらうと思ひ、御尋ねに答へて、

主よ、私は信仰いたしますが、何方で御座いますか、

と申しました。イエズス様は重ねて、

貴方は夫を見て居る。貴方と物語つて居るのが夫です、

と仰有つた。

主よ、私は信じます、

と言ふが早い、彼は平伏してイエズス様を禮拜しました。イエズス様は彼の信仰を喜ばれた併せてファリザイ人等が、傲慢の爲にいよく盲者となり行くのを悲み、周囲の人々を顧みて、審判の爲に私は此世に参りました。目の見えない人は見、見ゆる人は盲者となるであります、

と曰うた。群衆の中にファリザイ人が混つて居た。彼等はイエズス様の當擦を曉つて、

主よ、我々も盲者なんですか、

と問ひ詰めた。盲者の手引、イスラエルの明星と自惚れて居るのに、『盲者』と言はれては、何うしても黙つて居られなかつたのでせう。イエズス様は彼等に仰有つた。

諸君が若し盲者でしたら、罪はありますまい。然し今は自ら見ると言つて居られる。だから諸君の罪は遣りませぬぞ、

彼等の罪は遣る。何時迄も遣る。何時になつても、改心しない限りは遣らざるを得ない。此種の盲者は、もう何とも手の着け様がない。何んな醫師も、七を投げるより外は無いのであります。

イエズス様は世の光、この光の前に立つ人は、自づと二部に分れる。一部は心の清い、正しい人で、光を仰視て之を拜み、之に従ひ、之を愛します。一部は心の暗い、歪んだ人で、光を見るのを懼れて、之を避け、之を憎み、之に悪言を浴せかけます。私等は何方に翻して居ますでせうか。

(五) 善き牧者 (ヨハネ二一)

【羊の檻に入るの門】、イエズス様は盲者の目を開けてやると共に、その心までもお照しなされた。我身が約束のキリストたることを告げて、ファリサイ人に逐出された彼のお慰め下さつた。却つてファリサイ人等の心の盲目方を咎めて、其罪の何時迄も遣るべきことをお告げになりました。猶御話を續けて、ユデア國民の嚮導者を以て自ら任せる彼等が、其實、利己一天張りで、たゞ我身の利益だけを考へる傭人根性しか持たぬ、之に反して自分は國民の爲に身命を抛つのを辭せないのだ、と云ふことを、美しい喩を借り、鮮に描いて御見せになりました。其の見事な畫面は、彼の地方の牧畜生活をモデルにしたもので、何時もながら、御手際の瑞々しさには、誰しも感服せざるを得ないのであります。

私は誠に實に諸君に申します。羊の檻に入るのに、門よりしないで、他から越える者は盗人です。強盗です。門から這入るのは羊の牧者で、門番は彼に戸を開き、羊は彼の聲を聞き、彼も亦その羊を一々名言うて、之を呼出します。斯くて自分の羊を引出した上で、自ら先に立つて行きます。羊は之に従ひます。その聲を識つて居るからです。然し他の人にならば従ひません。却つて之を逃げます。他の人の聲を識らないからであります。

ユデア邊では、今日でも能く斯んな様にして羊を飼つて居る。四方に石塚を繞らし、荊蕪を屋根に被せて、狼や盗人が這入れぬ様にし、羊も牧者も其中に閉ぢ籠つて、一夜を明かす。翌朝になると、門を開いて、羊を野に連れ出し、草を喰ませるのであります。茲にイエズス様は羊の檻を聖會に、門を御自分に、牧者を聖會の役者に喩へられた。然し總括的にして御話なさつたので、未だ判然しない所がある。彼等もその語り給ふ事の何たるかを曉り得ませんでした。因つて今の喩を夫々に引當てて、再びお説明なさいます。

私は誠に實に諸君に申します。私は羊の門です。既に來た人々は(ユデアの司祭でも、律法學士でも、ファリサイ人でも)皆盗人でした。強盜でした。羊は彼等に聴き従ひませんでした。私は門です。誰にしても私に由つて這入りましたら、救はれませう。入りつ出つして、牧場を見出すでありません。

【善き牧者】、以上は羊に就て仰しやつたのである。自分に従ふ羊は、自由で、安全で、十分の飼料を得べきことを、巧く喩へて居なされる。今度は其羊の司牧に當る者に就て御話を進め、自分羊の檻の門たるのみならず、亦實に其羊の善き牧者だと云ふことを明にされます。

盗人が來るのは盗んで、殺して、亡さんが爲です。私の參りましたのは、羊が生命を得、而も猶豊に之を得んが爲であります。私は善き牧者です。善き牧者は其羊の爲に生命を棄てます。然し傭人で、牧者ではなくて、其羊が我物でない人は、狼の來るのを見るや、羊を棄てて逃げ失せます。狼は羊を奪ひ、之を追散します。傭人が逃げ失せるのは、傭人だから、羊の事を構はないからです。私は善き牧者です。私は私の羊を識つて居ます。私の羊も亦私を識つて居ます。恰當御父が私をお知りになり、私も亦御父をお知り申して居るが如くです。そして私は私の羊の爲に生命を棄てます。私は又この檻に屬しない他の羊を有つて居ます。彼等をも引張つて來ねばなりません。さて彼等も私の聲を聴き、斯くて一の檻、一の牧者となるであります。

聖會の一なるべきことを力強くお説きになつたのです。ユデア人と異邦人とを隔てる障壁は、この喩を以て全然撤去された。全世界の民は悉く一の羊檻に收容され、この善き牧者の優しい杖の下に飼牧されねばならぬのであります。

【結論】、以下、喩を離れて結論に入られる。父を識り、父に識られ給うて居る自分は、亦父を愛

し、父にも愛され給うて居なされます。その理由を簡単に申し述べなさいませう。

御父の私をお愛し下さいますのは、よし後では再び取戻すことがあるにせよ、兎に角、私が私の生命を抛棄するからです。誰も之を私から奪ふ者はありません。私が自ら之を抛棄するのです。私は之を抛棄する権を有し、又再び之を取る権利を有します。是は私の御父から承つた御命令なのであります。

斯の御話よりして、ユデア人の間に再び諍論が始まりました。『彼は悪魔に憑かれて、發狂してゐるよ。君等は何で彼の話を聴くのだ』と云ふ者が彼等の中に多くあつた。然し一方には、夫に反對して、『是は決して悪魔に憑かれた者の言ではない。悪魔が何うして盲者の目を明け得るものか』と云ふ者もあつた。後者はイエズス様の御説教と奇蹟とに沁々感服した人々でした。彼等はたゞ徒に感服した許りでしたらうか。亦イエズス様を救世主と認め、その御味方にならなかつたでせうか。

福音書は美しい寶玉を連ねた様なもので、一ヶ所でも棄つべき所はない。然れども此の『善き牧者』の喩くらゐ人の心を感動させ、信頼の念を唆るものはありません。實にイエズス様

は善き牧者です。私等一人づつを詳しく識り、私等の氣質を識り、境遇を識り、何が必要であるか、何んな疾病に、何んな災難に罹つて居るか、何んな誘惑に悩まれて居るか、チャンとお識りになつて、一々世話して下さいませう。助けて下さる。勞つて下さるのであります。

(六) 奉殿記念祭 (一〇ノ二一—三九)

【果して基督なるか】、幕屋祭の後、イエズス様は一應ガリレアへ御歸りになつた。夫から二ヶ月ばかりも経つと、エルザレムには奉殿記念祭と云ふのが八日間行はれる。ユダス・マカベがエルザレムの神殿を清め、新に祭壇を築いて、之を天主様に奉獻した記念祭である。時は正に冬で、唯今で云へば十一月の末から十二月の始頃に當るのでした。この記念祭は國內到處で行つても可いので、必ずしもエルザレムへ参拜せねばならぬ譯のものではなかつた。然し御父の御光榮、人々の救靈に少しでも益する所があればと思召して、イエズス様は態々エルザレムへ御上りになりました。神殿の東側、セドロンの谷に臨んだ廊は、サロモンの建てた舊い神殿の材料を以て築いたものだ、と云ふ口碑が遺つて居て、其爲に『サロモンの廊』と呼んだもの

でありました。イエズス様が其外廊を歩いてお在になると、ユデア人等は、直に之をおつ取り巻いて、

貴方は何時まで私等の心を惑はすのです。若し果してキリストならば、はつきり私等に言つて下さい、

と迫りました。「我こそ約束のキリストであるぞ」と言はして、之を引捕へ、羅馬人に突出す者から、然う言つたのです。後日、カイファも同じ間を持掛けました。そしてイエズス様が明白に御答へになるや、早速之に死罪を宣告しました。然し今は未だ御死去の時ではない。イエズス様は決して彼等の策略にお乗りになりなさらぬ。是まで自分の斷言した所、行ひ來つた奇蹟を簡單に陳べ、倒に彼等の不信仰を御答めになりました。

私は諸君に語ります。でも諸君は信じない。私が父の御名を以て行へる業こそ、私に就て證明するのです。然し諸君はやはり信じない。私の羊の數に入つて居ないからです。私の羊は私の聲を聴きます。私も彼等を知つて居ます。彼等は私に従ひます。そして私は彼等に永遠の生命を與へるのです。彼等は永久に亡びることなく、又誰も私の

手から彼等を奪ひ去ることもありません。之を私に賜うた私の父は、一切に優れて偉大なる御者です。誰も私の父の御手から之を奪ひ得る者はありません。私と父とは一つです。

【神の御子とは？】、ユデア人はイエズス様に逼つて、其身柄を明言させようとした。イエズス様は彼等の要求に應じなかつた。我身の神たること、父と同一なることを明に宣言せられた。信と愛とを以て繋かれたのみではなく、全く神と其實体を同うすると云ふことを宣言せられた。神たるキリスト、是は御教の根本義である。然るにユデア人等は、右の宣言を聞いて何うしました？ 一歩踏込んで詳しい説明を求めましたか。否、彼等は其の詳しい説明を恐れたのです。彼等は御言の眞意を十分に曉りました。左らばと云つて、イエズス様を眞のキリスト、約束の救主と認めたくはありません。彼等は直に石を取つてイエズス様に打付けようとした。彼等は返す辭を知らぬのでした。道理に詰まつて、暴力沙汰に出ようとしたのです。然しイエズス様は駭きなさらぬ。逃げようともなさらぬ。極めて冷静に、極めて堂々と、彼等に御答へなさいませぬ。

私は我父に由りて多くの善業を諸君に示しました。諸君は其中の何れの爲に、石を打付けようとするのですか？

斯う御詰りになると、ユデア人は、ブン／＼怒つて答へました。

何アに我々が君に石を打付けるのは、善業の爲ではない。胃潰の爲だ。君は人でありながら、自らを神にするからだ。

彼等はいよく殺氣立つて來た。然しイエズス様は相變らず落付き拂つて御答へになる。先づ聖書を引合に出して、自分が「神の子」と稱する理由を明になされます。

諸君の律法に「我は言つた。汝等は神であるぞ」(詩八ノ六)と録してありませんか。神の御言を告げられた人々ですら、斯んなに「神」と呼んである。夫で聖書が廢るものではない(聖書の權威は失はれないの意)、然らば私が「神の子」だと云つたからとて、父の聖としてお遣しになつた者に向つて、直に胃潰呼はりをするのですか。若し私が我父の業を爲さないならば、私を信じなさるな。若し私が夫を爲しますならば、たとへ私を信じたく無いにしても、業を信じなさい。さすれば父が私に在し、私も亦父に在ることを曉つて、信するに至るでありませう。

に至るでありませう。

イエズス様の堂々たる態度、水も漏らさぬ精密な論法には、流石の敵も開いた口が塞がらぬ。手にせる石までも思はず落して了つた。然しイエズス様に對する憎惡の情は、彌が上に燃え狂ふ許り。彼等は謀つてイエズス様を引捕へようとししました。衆議會に突出す考からだつたのでせうが、イエズス様は彼等の手を遁れて、ガリレアへ御歸りになりました。

ヨハネの福音書には、イエズス様が其ま、ペレアの地へお立退きになつたかの如く録してある。然しマテオとマルコによつて見ると、イエズス様がペレアへ御越しになつたのは、エルザレムからではなく、ガリレアからでした。「イエズス遂にガリレアを去り、ヨルダン河の向なるユデアの境に到り給うた」(マルコ、一〇ノ二)と明に記してある。疑を容るべき餘地は無い。して見ると、イエズス様は奉殿記念祭後、一先づガリレアへ歸り、翌年の二月頃に至つて、いよくガリレアを立ち、エルザレム指してお上りになつたものと思はねばなりません。

イエズス様の羊は其の御聲を聴き、その御後に従ひます。却つて其羊に非る者は、知るも知らぬも、イエズス様に向つて、石を打付ける。今だつて昔と異なる所は少もありません。

(七) 使徒等の養

(マテオ、一七ノ二一―二九
ルカ、九ノ三〇―三一
九ノ四四―四六)

【再び御受難を豫告し給ふ】、奉殿記念祭後、イエズス様は一應エルザレムを御引上げになりま
した。弟子等とガリレアに在す頃、彼等に諭して曰うた。

諸子はこの言を耳に藏めて置きなさい。人の子は人々の手に賣られ、彼等に殺されませうが
然し殺されても、三日目には復活するでありませう。

弟子等は一向お言の意味が解りません。彼等が餘りの悲さに壓倒されてはならぬので、瞭然
り得ない様に隠してあつたからでした。彼等も亦此言に就て、イエズス様にお尋ねするのを恐
れ、たゞ甚く悲んで居る許りでした。悲みながらも、イエズス様の亡くなられた後の事を思つ
たものらしい。自分等の中で、最も大きな者は誰でせうと云ふ考が、自づと彼等の心に浮み出
ました。彼等は夫に就て、お互に議論を闘はしながら途を續けて、カファルナウムへ歸りまし
た。

【魚の口の銀貨】、カファルナウムに歸り着いたら、二ドラクマの銀貨を取立てる人々が遣つて

来た。二ドラクマは我國の八十錢許りに當り、モイゼの律法により、二十歳以上の男子は、神
殿の維持費として、毎年之を納めることになつて居ました(出埃及記、アダル月(今の二月)の十
五日から二十五日まで)に取立てるのでしたから、時は恰當最後の過越祭へ御出掛けになる少し
前の事であつたらうかと思はれる。さて其人等はペトロに近いて、

君等の先生は、二ドラクマを納めにならぬのですか、

と問ひました。ペトロは例によつて気軽に、『納めなさいますとも』と答へて了ひました。彼は
イエズス様に其事を申し上げようと思つてか、やがて家に這入りました。イエズス様はペトロ
の言出すのを俟たず、御自分から先廻して、

シモン其方は何う思ふ。世の帝王は貢や税金を誰から取立るか。我子から？或は他人から？
と仰有つた。

夫は他人から取立てますよ、

とペトロは答へた。

では子等は自由だ。然し彼の人等を躓かしても不可から、其方は湖へ往つて釣を垂れなさ
い。そして初に上つた魚を取り、其口を開くと、スタタル銀貨(四ドラクマに當る)を得ま

すでせう。夫を取つて、私と其方の爲に納めなさい。

ペトロは命のまゝに致しました。彼は餘り出過ぎた事を言ひました。イエズス様が『活ける神の御子キリスト』にて在すことを思はなかつたのでした。『活ける神の御子』として、又『約束のキリスト』として、イエズス様には貢を納める義務があらう筈はない。然し一方からはイエズス様も、やはり人の子である。殊にペトロが輕率にも斷言したものですから、之を納めない日には、彼の人等を躓かせる恐がある。たゞ納めは納めても、神の力を顯はし、奇蹟を以て必要な金額をお求めになりました。斯くて神の子の威嚴を失はず、その權利を保持し給うたのであります。

【天國に於て大なる者】、夫はさて措き、イエズス様は、弟子等が途中で考へつゝあつた事を見て取られた。皆が家に揃つた時、

諸子は途々何を論じて居たのです、

と突然、御尋ねになつた。「自分等の中、最も大なる者は誰でせう」と、途すがら下らぬ諍をして來た彼等です。今出し抜けに然う問はれては、彼等も流石に恥しう思つたものと見え、皆黙り込んで了つた。何とも答へません。イエズス様は坐して、十二人を呼び寄せなされた。

彼等は近いて來たが、今度は自分等の方から、問ひ掛けました。

天國に於て、大なる者は誰だと思召なさいませうか。

彼等は相變らず、現世的王國を夢みて居る。イエズス様がメツシアとして世界の大王になり給ふのだ。富貴尊榮を擡にされるのだ。自分等は其の御國に於て、メツシアの左右に侍つて、榮華の限りを極めるのだ、と考へて居たものである。彼等はペトロの信仰宣言後、特別の寵遇をお約束になつたことを思出した。三人の弟子がイエズス様の御伴をして山へ登り、共にお祈をしたことを思出した。天國の建設に關する御話も、幾度となく承つて居る。夫等を皆現世的に解釋して、其んな下らぬ諍をしたり、質問をしたりしたのでした。彼等は謙遜を教へて戴く必要が大にありました。其所でイエズス様は、全く彼等の意表外に出で、

人若し第一になりたければ、一同の後になり、一同の召使とならねばなりません、

と曰うた。夫から一人の幼兒を取つて、彼等の中に置き、之を親切に抱き、續いて彼等に仰せられます。

私は誠に諸子に申します。諸子が若し翻つて幼兒の如くならなければ、天國へは這入れま

すまいよ。されば誰にしても、此の幼児の如く自ら謙るならば、其人こそ天國に於て大なる者でありませう。私の名の爲に斯る幼児の一人を承ける人は、私を承けるのです。又誰にしても私を承ける人は、私を承けるのではなく、實は私を御遣しになつた御者を承けるのです。即ち諸子一同の中に於て、最小き者こそ、最大なる者でありますぞ。

弟子等は天國に於て首席に就かう、第一人者にならうと、連りに野心を燃やして居たのでした。然し其んな野心に胸を焦して居ては、天國へ這入ることすら覺束ない。全然、天國の門前拂を喰されぬにも限らぬ。天國へ這入れるのは、唯幼児の如く、無邪氣で、謙遜な者ばかりだ。意外の御返答に、弟子等は唯もう顔を赧めて、耻入る許りぢや無かつたでせうか。イエズス様は弟子等に謙遜の必要をお説きになつた。謙遜にして無邪氣、幼児の如くならなければ天國へは這入れぬ。又自分の名の爲に、其んな幼児を承ける人は、自分を受けるのも同じだ、とお諭しになつた。「私の名の爲に」と云ふ御言を聞いて、ヨハネは不圖、前にあつたことを思付いたものらしい。イエズス様の御話を遮つて、

先生、私等は御名を以て悪魔を追出す人を見ました。私等に従はない人でしたから、之を

禁じましたよ、

と申しました。イエズス様のお弟子でも無いものが、その御名を借りて、悪魔を追ひ出すとは、以の外だ、と強ち思つた譯ではありますまい。たゞ無暗に先生の尊い御名を唱へて、狎れ褻しては勿體ない、と氣遣つたものと思はれます。志は決つして悪くないが、餘り胸が狭過ぎる今少し寛容であらねばならぬ。

禁じては可けません。私の名を以て奇蹟を行ひながら、直に私を誘り得る者はありはしません。諸子に反對しない人ならば、諸子の爲にする人です。諸子がキリストに屬する者だからと云ふので、私の名の爲に一杯の水を飲まして呉れる人があるならば、私は誠に諸子に申します。彼は其報を失ひますまい。

濁きに苦める宣教師に、一杯の水を恵んでも、以て主を愛するの實を證し、爲に報を蒙ると云ふならば、況して主の御名によつて、御名の光榮の爲に、悪魔を追出すが如き偉大なる事を爲しては、大いした報を戴くべきではありませんまいか。之を禁ずるなんて、餘り料見が狭過ぎると謂はなければなりません。

モイゼにも是に類似した事がありました。ヘブリア人の中に預言をする者があると聞いて、ヨズエがモイゼに向ひ、「吾主、モイゼ様、之をお禁めなさいよ」と申しました。モイゼは決して其んなに胸の狭い人では無い。「何で私の爲に嫉を起すのです。主の民が悉く預言する様に、誰かして呉れますまいかな」(民数記九ノ二七)と答へました。大人物の胸中は、如何にも見上げたものではありませんか。

第三章 最後のエルザレム旅行

(一) 意地悪のサマリヤ人 (九ノ五一―六二)

【サマリヤ人の拒絶】、イエズス様が現世から取られ、御死去あそばすべき日數も満ちようとして来た。因つて都のエルザレムへ上らんものと、御顔を堅めなさいました。時は是アダル月(今の二月)の終頃で、いよいよ最後の過越祭に臨まんとて、ガリレアをお立ちになつたのであります。途中にサマリヤ人の都邑を通過らねばならぬ。サマリヤ人とユデア人とは、豫てより犬と猿も雷ならぬ間柄である。殊に何かの大祝祭が近くと、サマリヤ人は平生に倍し

て意地悪くなり、ユデア人に當り散らす。何彼に付けて、始終妨害を試るのであつた。時にイエズス様の左右に従へる弟子等は、その數が少くは無かつた。然う無難作に、何の町へでも這入り込んで、宿泊されたものではない。イエズス様は、前以て夫々に準備をさせて置かんものと、二三の弟子を一足先にお遣しになつた。彼等はサマリヤ人の住める町へ入りました。然しイエズス様がエルザレムさしてお上りになるのだと見て取つた町の人々は、斷然お拒絶りしました。何うしても受付けて呉れません。ヤコブとヨハネの兄弟は、『雷の子』と字され、頗る熱血性の人でした。之を見るや、非常に憤慨して、イエズス様に向ひ、

主よ、私等が命じて、天から火を下し、彼等を焼亡させたら如何です。

と申しました。彼等の憤慨は、深い信仰、熱い愛から湧き出たものである。然し尙私の意が雜つて居る。未だ純ならざる所がある。イエズス様は振顧つて彼等をお叱りになりました。

諸子は何んな精神であるか、自分で解らぬのです。人の子の來たのは、魂を亡さんが爲ではない。却つて之を救はんが爲です。

舊約時代に、エリアは天から火を下して、惡王の臣下を焼殺させたことがある。然し新約の精

神は、慈悲心、忍辱の大精神である。イエズス様は此の大精神を弟子等の心に深く染み込ませたく思召された。其まゝ立去つて、他の村へお行になりました。

【随従者に三の教訓】、斯くて一行が路を續けて居ると、一人の男がイエズス様に近いて、

何處へでも、御出になります所へ、私も参ります。

と申しました。弟子になして下さい、と願つたのである。マテオ福音書によつて見ると、彼は律法學者でした。然し彼の心事は餘り感心されたものではなかつた。イエズス様に従つて居れば、世現の幸福が得られる位に考へて居たものらしい。イエズス様は御自分の極めて貧しい、悲惨な暮向を暴露して、彼に御見せになりました。

狐は穴があります。鳥は巢があります。然し人の子は頭を傾ける所すら有ちません。

輕卒に、深い考も無く、唯自分の弟子にさへなれば、と思つては足りない。自分の弟子は十字架を擔がねばならぬのだ、夫だけの勇氣がないならば、寧ろ止した方が可い、と御論しになつたのである。次に弟子になりたい心はあつても、優柔不斷で、何とも決し兼ねて居る他の一人には私に従ひなさい、

と御自分からお召出しになつた。従ひたいのは山々だが、然し偶ま父が死亡して居るので

先づ行つて父を葬る事をお許し下さいませ、

と、彼は暫の猶豫を願ひました。例の優柔不斷が邪魔を入れたのです。成るほど尋常の道から云へば、親に孝行せねばならぬ。父の死體を葬ると云ふは、子たる者の大切な義務で、等閑にすべきものではない。然し此處は非常特別な場合である。此機を取外したら、二度と其んな機會が廻つて来るか分らぬ。『大義、親を滅す』と云ふことすらある。君王の爲にすら、時として父母を捨置かねばならぬと云ふのだ。況して天主様の爲である。福音の爲である。其んなに愚圖愚圖して居るべき場合ではない。

死者に其死者を葬らせなさい。其方は行つて神の御國を宣傳しなさい、

と命じなさいました。今一人は申しました。

主よ、私は貴方に従ひますでういませう。然し先づ家に在る物を、夫々に處置する事だけは御許し下さいませ。

此人は前の二人の中間に在るのです。最初の人の如く輕卒ではない。次の人の如く優柔不斷で

も無い。だからイエズス様も之に力を落させる様な事は仰有らぬ。左らばとて之を激励して無理に押進めようともなさらぬ。然し家の事なんか氣にしては、神の御國の爲に働けるものではないので、

犁に手を掛けてから、猶背後を顧る様な人は、神の御國に適ひませんよ、と仰せられた。神の御國に志した上は、側目も振らずに突進せねばならぬ、と御注意なされたのであります。

イエズス様の御跡に従ふのは、實に喜ばしい事だ。有難い御恵だ。然し亦一方ならぬ困難が伴ふものである。前以て篤と考へ、十分に慮る所があらねばならぬ。だが優柔不斷で、何時迄も心を取極め得ないのも宜しくない。父母が何うの、兄弟が斯うの、と言つて居ては限りが無い。そして一應決心した上は、斷じて行ふのです。犁に手を掛けてからまで、後を顧る様では、到底主の途に進むことの出来るものではありません。

(一) 七十二弟子の派遣 (二〇ノ一―二四)

【七十二弟子とは?】、此の途中の事でした。イエズス様は弟子等の中から、特に熱心な、未頼しい七十二名を指名して、自分の行くべき町々、所々へ二人づゝお遣しになつた。早や自分の地上生活も終局に近いので、成るだけ多くの福音宣傳者を養成し、御教を遠く、廣く弘通流傳せしむべき方法をお取りになつたのである。尤も此の七十二名の弟子は、十二使徒團の如く、永く一個の團體を作り、宣教に従事すると云ふ譯のものではなかつた。今度の事は、全く一時的でした。然しこの員數に加はつた人々は、後日熱心な宣教團の中核となり、使徒等の補助者として、大に福音の宣傳に努めるのでは無かつたでせうか。

【訓戒】、出發に際して、イエズス様は預め必要な注意を與へ、有益な訓戒をお授けになりました。

收穫は多い。然し働く者は少い。で働く者を其收穫に遣し給へど、收穫の主にお願ひなさいよ。往きなさい。私が諸子を遣すのは、羊を狼の中に入れる様なものです。諸子は財布や旅囊や、履物やを携へてはならぬ。途中では誰にでも挨拶しなされるな。何の家に入りましても、先づ『此家に平安あれよ』と言ひなさい。若し其所に平安の子(平安を受けるに堪へる人)

があるならば、諸子の祈る平安は其上に留りませう。左もなくば、諸子の身に戻つて來るでありませう。同じ家に在つて、其内に在合せる物を飲食ひしなさい。働く者は其報を受けるに値するのです。必ずしも家から家へと移つては可けませんよ。

彼の邊の人々は、よく虚禮を尊ぶ弊がある。今日でも、珍らしい外人がアラビア地方へ行くとき右からも左からも招待を受け、御馳走攻めに遭ひ、應接に違ないと云ふ様なことが往々あるさうである。でイエズス様は預め其邊の注意をして置かれた。途中で長々と挨拶を換して、徒に時間を潰すな。行つた先でも、下らぬ御馳走攻めに遭ひ、自分の本分を誤るな。自分が派遣されたのは、人に招待される爲ではない。却つて人を招待して痛悔させる爲だ、病者を癒す爲だ、天國を宣傳する爲だ、と云ふことを夢にも忘れてはならぬぞよ、と申含めて置かれたのであります。猶曰うた。

何れの町へ入つても、人々が諸子を受けて呉れたら、諸子に供へられる物を食べ、其所の病者を癒しなさい。人々に向ひ、『神の國は諸君に近きましたよ』、と曰ひなさい。又何れの町へ入つても、人々が諸子を承けなかつたらば、街衢に出て、斯う曰ふのです。『諸君の町に

於て、我々に附いた塵までも、諸君に向つて拂ひますぞ。然しながら神の國の近いたことだけは承知して置きなさい』、と私は諸子に申します。彼日に當つて、其町よりもソドマの方が、却つて恕される所があるであります。

イエズス様は嘗て、御教を信じないゼネザレト湖畔の町々を咀はれたことがあつた。其事はマテオ福音書に記載してある。所でルカ福音書には、之を七十二弟子派遣當時の事の如く録してある。多分、同一の咀を同一の町の上に、二度までも浴せなかつたものと思はれる。コロザイン、ベツサイダ、カアアルナウムの町々は、三年の間も感すべき御教を承り、驚くべき奇蹟を目撃しながら、終に改心しなかつたのです。七十二弟子に、彼等を承けない町のあるべきことを告げ給うた序に、再び彼の町々の不信を思出し、其の不信の罰の纏て來るべきことをお告げになつたものではありますまいか。

禍なる哉、汝コロザイン、禍なる哉、汝ベツサイダ。そは若し汝等の中に行はれた奇蹟がチロとシドンの中に行はれたものなら、彼等は疾くに改心し、荒い毛衣を纏ひ、灰の上

に坐したであらう。然しながら審判に當つて、チロとシドンは汝等よりも恕される所があ

りませう。又、汝カアアルナムよ。汝は天までも上げられたが、地獄までも沈められるで
ありませうぞ。

果して三十年の後、羅馬の大軍はガリラアに推寄せた。コロザイン、ベツサイダ、カアアルナ
ウム、チベリアデス等の町々を攻め落とし、踏み倒し、叩き潰して、人の影すら見られぬ荒野原
となして了つた。何時もながら不信の罰は怖いものである。イエズス様は、その不信の罰の
怖ろしい所以をも説明して、弟子等に信頼の念を燃させなさいませう。

諸子に聴く者は私に聴くのです。諸子を軽んずる者は私を軽んずるのです。私を軽んずる
者は、私を遣し給ひし御者を軽んずるのであります。

【七十二弟子歸る】七十二弟子をお遣しになつてから、イエズス様は徐々と路を續けなさいま
した。幾日かの後、彼等は使命を果して歸つて來ました。喜悅の色を満面に溢らしつゝ、

主よ、御名によつて、悪魔すらも私等に歸服するのでありますよ、

と申し上げた。彼等の喜悅は左ることながら、尙夫れ以上に喜ばねばならぬ事がある。イエズ
ス様は曰うた。

私はサタンが電光の如く、天から落ちるのを見て居ました。

悪魔が歸服したツて、夫ならば自分に取つて耳新しい事ではない。汝等が行つた先には、サタ
ンが其勢力を奪はれ、其の是まで占領せし地位より蹴落されるのを、此處からチャンと見て居
たのだ、と仰有つたのである。續いてイエズス様は、彼等に授けた權能の如何なものであつた
かを繰返しなさいませう。

御覽。私は蛇、蝎、及び敵の一切の勢力を蹂躪るべき權能を諸子に授けました。何一つとし
て諸子を害するものは有りますまい。然しながら、悪魔が諸子に服するのを喜びなされるな。
寧ろ諸子の名の天に録されたのを喜びなさい。

悪魔を逐出すのは、神學者の所謂『特賜恩寵』で、人の爲に與へられる。必ずしも本人が天主様
の聖慮に適へる有徳家だとは限らぬ。救靈の保證にはならぬ。喜ぶには足りない。却つて其名
を天に記載されるのは、天國民たる資格を具備へて居る證據なんだから、大に喜んで可い譯で
あります。

【小き者の幸福】、其時イエズス様は聖靈に感じ、喜の情に得堪へず、叫んで曰うた。

天地の主なる御父よ、是等の事を學者、智者に隠して、小さき人々に御顯し下されたに付けては、私は御身を讃稱へます。然うです。父よ、斯の如きは御意に適うたからであります。一切の物は御父より私に賜はりました。子の誰なるかは父の外に知る者がありません。父の誰なるかも、子及び子の肯て教示しませう者の外には、知る者は無いのであります。斯くて弟子等を顧みて仰せられた。

諸子の視る所を見る目は福なる哉、私は諸子に申します。多くの預言者、及び帝王は、諸子の視る所を視んと欲しましたが、視る能はず、諸子の聴く所を聴かんと欲しましたが、聴く能はぬのであります。

イザヤ、エレミア、エゼキエル、ダニエル等の預言者は申す迄も無く、ダウイドの如き、サロモンモンの如き、エゼキアの如き諸王も、熱心に救世主を待ち設け、その御顔を仰視たい、その御教を承りたいと、深く望んだものである。然し彼等は、終に其望を達することが出来なかつた。今弟子等は小な、弱い、賤しい者でありながら、その救世主の聖顔に接し、親しく其の御教を承つて居る。幸福の至りではありませんか。

天主様の爲、人の爲に働いて、意外の成功を收め得たからつて、夫を無暗に喜んではならぬ。正しい、純な心で以て天主様の爲に盡し、人の爲に努めたのでしたら、たとへ其の事が巧く成功しようと、失敗に終らうと、少くもその働だけは天主様に認められたのだ。自分の名だけは天國に録されたのだ。其所を思つて、喜ばねばならぬのであります。

(三) 善きサマリア人の喩 (ル 一〇一―二五ノ三七)

【律法學士の質問】、七十二弟子が歸つた後の事である。一人の律法學者が立上つて、イエズス様に質問を試みた。

先生、私は何を爲しましたら、永遠の生命を得られますでういませうか？

イエズス様の言尻を捉へて、十分油を絞つてやらうと云ふ魂丹から、斯んな質問を提出したのでした。斯る場合には、何時も反問をして、相手方に其意中を漏らさせ、其棒を採つて倒に之を打つと云ふのが、イエズス様の慣用手段である。今度も彼の心底を看破りなさいましたので、

律法には何と録してありますか？貴方は夫を如何に讀んで居ますか？

とお問返しになりました。

汝、心を盡し、魂を盡し、力を盡し、精神を盡して、汝の神たる主を愛し、又汝の近き者を己の如く愛すべし（申命記、六ノ五）。

彼は律法の條文を其まゝ誦へました。イエズス様は言下に答へて、

貴方の答は正しい。之を行ひなさい。左すれば活きるを得るでありませう、

と曰うた。天主様を愛し、人を愛する、すべての掟は此の二つに釣る。永遠に活き、終なき生命を得るには、之を實行しなすれば、澤山だ。意外の御返答に律法學士も流石に面喰つた。

折角イエズス様の揚足を執る積で、質問を持出せば、反對に胸を刺される様な教訓を加へられた。攻撃の目算はガラリと外れた。お負けに律法學士ともあらう者が、そんな解り切つた事を

問ふのか、と思はれては、自分の顔が立たぬ。因つて自分は其んなに無駄な質問を出したので

はない、と見せかけるが爲に、彼は改めて、

私の近き者とは誰でいますか？

と、イエズス様に申しました。『近き者』とはユデア人の外にはない。國人をすら愛すれば、他は幾ら輕んじて、憎んでも、差支ないものだ位に、彼等は考へて居たのであつた。

【善きサマリヤ人の諭】、イエズス様は、彼等の狭い料見を打破つてやらんものと、一の美しい

諭話をお話しになつた。律法學士の質問には直接お答へにならなかつたが、然し其諭によつ

て、『近き者』の誰なるかを手に取るが如くお見せになりました。

或る人がエルザレムからエリコへ降ります時、強盜の手に陥りました。彼等は其人を剝取

り、傷を負はせ、半死半生の體になして、其まゝ棄去りました。

是は實景を其まゝ描いたものである。エルザレムからエリコまで、距離は僅か六里半許りに過

ぎないが、路は一千米突（九町許り）からの傾斜をなし、灰色が、つた石灰岩の起伏せる丘陵の

間を縫つて、ダラ／＼下りに降つて居る。兀々と秃げ上つて、青い草木も見えず、水の一滴も

無い谷が、其間を縦横に渡つて居る。夫こそ文字通りの荒野で、其割合に人通は可なり頻繁だ

から、追剝、強盜がよく出沒して、旅人を苦める。二十世紀の今日でも、單獨旅行は危険だと

謂はれる位に、物騒な、薄氣味悪い界限なのであります。

偶一人の司祭が同じ道を下つて参りました。然し彼は之を見ながら過ぎ去りました。又一人のレウイ人も其所に來合せて、之を見ましたが、同じ様に過ぎ行きました。然るに一人のサマリヤ人が、旅行をして彼の側に來ました。之を見て憐を催しました。近いて油と葡萄酒を注ぎ、其傷を繻帶し、彼を自分の馬に乗せ、宿に伴ひ行きて、看護しました。翌日デナリオ銀貨(凡そ三十錢)二枚を取出して、宿の主人に與へ、「此人を看護して下さい。この上、費用がかゝりましたら、私が歸る時、貴方にお拂ひしますから」と申しました。

サマリヤ人の慈善心と、司祭、及びレウイ人の不人情とは、何と云ふ甚しい相違なんぞせうか。ユデア人とサマリヤ人とは、仇敵も同然な間柄ぢや有りませんでしたか。夫にも拘らず、彼のサマリヤ人は、ユデア人の傷き倒れてるのを見て、憐憫を催した。親切に介抱した。同胞のユデア人が見棄てて顧みないのを、救つてやつたのであります。イエズス様は右の諭を語つた上で、律法學士自身に其結論を付けさせなさいました。

盜賊の手に落ちた彼の人の爲に、「近い者」と貴方に見えるのは、この三人の中で何方です

か？

斯う問はれては、他に答へ様のあらう筈が無い。

夫は彼に憐を加へた人でありませぬ、

と申しました。幾ら本嫌ひのサマリヤ人だつて、然うなれば愛せぬ譯には行かぬ筈だ。律法學士は自分で自分の間に答へさせられたのであります。

貴方も行つて其通りに實行しなさい、

と、イエズス様は簡單に言つて退けられた。流石の律法學士も、二の句が繼げない。其ま、悄然と引退りました。

この諭は、固よりキリスト教的博愛を描いたものではあるが、之を神秘的に解釋すれば、人類とキリスト様との關係を明にすることが出来ませんか。エルザレムからエリコへ下る途中、強盜の手にかゝつた人は、人祖の罪の結果、その聖寵を剝取られた人類で、強盜は即ち悪魔である。舊約時代の司祭や、レウイ人は、人類の斯る不幸を見ながら、之を救ふべき術を知らぬのでした。その獻げる祭祀、行ふ儀式は、以て人の罪を赦し、その心の傷を癒すに

は足りない。その儘、見過して行くより外はなかつたのであります。其所に「善きサマリア人」たるイエズス・キリスト様がお出になつた。深く／＼人類の不幸に同情を寄せ、秘蹟の油、お祭の葡萄酒を注いでその傷を綑帯し、之を聖會の旅宿に抱込んで、其の聖役者に、之が手當をお頼みになりました。何時までも、何處までも感謝し、讚美すべきは、キリスト様の御情ちやありませんか。

(四) マルタとマリア — 主禱文

(一〇ノ三八—四二)

【マルタとマリア】、イエズス様の一行は、進んで唯ある邑に入りました。マルタと云ふ婦人が自宅へ御案内申して、懇に待遇しました。このマルタは、マリア・マグダレナ、及びラザルの姉妹で、共にイエズス様を信じ、早くからそのお弟子となつて居たものである。吾主御受難前の出来事によつて観ると、彼等はエルザレム附近のベタニアに家を持つて居たことが分かる。『唯ある邑』とは所謂ベタニアを斥すのだ、と言ふ人が多い。然しルカ福音書の記事を以て、エルザレム旅行中の出来事とすれば、ベタニアでは何うも工合が悪い。實際、彼等はガリレアの人

でした。マリアの如きは、ガリレアのマグダラに住み、爲に『マグダラのマリア』とさへ呼ばれたものである。ガリレア御巡教の時には、彼等も他の婦人等と共に御跡に従ひ、何吳なく御身のまはり周旋して上げるのでした。今度の御旅行にも、イエズス様のお伴をしてガリレアからエルザレムへ上つたものである。(マテオ、二七ノ四五—二八ノ四九)左すれば本宅はガリレアに在つて、ベタニアのは別宅に過ぎなかつたのだと思はなければなりません。

さてマルタは、イエズス様一行を饗應すが爲に、シタバタと忙しさに奔走つて居る。マリアは却つて主の御足下に据り込み、謹んでお話に聴き惚れて居る。姉の忙しさは、全く知らず顔である。マルタは些と不平に思ひ、立止まつてイエズス様に申し上げました。

主よ、妹が私一人を残して、饗應させるのが御氣に懸りませんか。命じて私に手助けさして下さいませ。

ご。イエズス様は静に御答へになります。

マルタさん、マルタさん。貴方は様々の事に就て思煩ひ、心を騒がして居らつしやる。然し必要なのは唯一つです。マリアさんは一番良い方をお選みになりました。是は奪はれること

がありますまい。

イエズス様の仰有つた「唯一の必需品」とは何でせう。前後の場合から察するに、夫は外ではない。イエズス様の爲に外物を忘れる、イエズス様に我身を悉く獻げる、之を拜み之を愛し、之に聴き、其の攝理に我身一切を投懸けることを謂つたものに相違ない。イエズス様は決してマルタを御咎めになつたのではない彼もイエズス様の爲に出来るだけの事を盡しました。たゞマリアは、それより完全に其愛を證明した、と仰有つた迄に過ぎません。

【主禱文】、是も同じ途中の出来事で、或る所に在す時、イエズス様は御祈禱をなさいました。その御祈禱が終りますと、一人の弟子が、

主よ、ヨハネが其弟子に教へました如く、私等にも祈ることをお教へ下さいませ、と願ひました。イエズス様は早速願ひに應じて、彼等に仰せられた。

祈る時は斯う申し上げなさい。父よ、願ひは、御名は聖とせられ給へ。御國は來らせ給へ。我等の日用の糧を日々我等に與へ給へ。我等はすべて我等に債務ある人を免すにより、我等の罪をも免し給へ。我等を試に引き給ふことなかれ、

今度お教へなされた祈禱は、前方、山の上で、お授けになつたのからすると、少し短くなつて居る。たゞ五の願ひが無い。然し「御旨の天に行はるゝ如く云々」の願ひは、「御國は來らせ給へ」の中に含んであり、「我等を惡より救ひ給へ」の願ひは、「誘惑に引き給はざれ」の中に籠つてある。つまり同じ祈禱を二様に教へ給うたものと思へば、間違ひありません。

【祈禱の條件】、イエズス様は、祈禱の様式を授けた上で、亦その祈禱を聴届けて戴くに必要な二條件、根氣強さと、深い／＼信頼とをお教へ下さいました。

諸子の中に友を持つた人があつて、夜中、其友の許を叩いた。「友よ、僕にパンを三個ほど貸し給へ。友人が旅をして宅へ來たんだ。生憎と之に供へる物が無いから」と曰ひました。すると彼は内から答へて、「まあ僕を煩はして呉れ給ふな。もう戸は締まつて居る。子供は僕と一緒に床の内に居る。起きて君に與へ得ないよ、」と申しました。でも彼の人叩いて／＼止まなければ、私は諸子に申します。たゞへ自分の友だからつて、起きて與へなくとも、五月蠅さの爲に起きて來る。そして需用だけは何んでも與へるでありません。

ユデアの諺に「鍍面皮は無冠の帝王だ」とある。五月蠅く、鍍面皮しく、何時までも根氣強く

願へば、誰だつて拒絶り得ないものだ。イエズス様も其道理を諭さんが爲に、この喩を語り、猶結びとして、左の如く仰せられた。

私も諸子に申します。願ひなさい。然すれば與へられませう。捜しなさい。然すれば見出しませう。叩きなさい。然すれば諸子の爲に開かれませう。すべて願ふ人は受けます。捜す人は見出します。叩く人は開かれるであります。

祈禱を聴届けて戴くには、根氣強く願ひする必要がある然し亦厚い〜信頼の念をも持たなければならぬ。自分は慈愛限りなき父君に向つて御願を上げるのだ、と云ふことを暫くも忘れてはなりません。

諸子の中に誰か父に向つてパンを願ふのに、石を與へますでせうか。或は魚を願ふのに、其魚の代りに蛇を與へますでせうか。諸子は悪い者でありながら、善い賜を其子に與へることを知つて居る。況して天に在す諸子の父は、其の願ふ人々に、善き靈(聖)をお與へ下さいませんでせうか。

人は罪の爲に『悪くなつて居る』。夫にしても出来るだけ善い物を我子に與へようとする。況し

て天の御父は、子たる私等に、賜の中でも一番勝れて、完全な賜たる聖靈を、お與へ下さる筈ではあるまいか。大に頼しく思つて然るべきであります。

根氣強さと深い信頼、この二つの條件を備へた祈禱で、而も救靈に有益なことを求めるのならば、必ず聴かれる。天主様に二言は無い。私等の祈禱が往々聴かれない様に思はれるのは、所要の條件を缺いて居る爲であります。

(五) 途すがら弟子等に教へ給ふ (一ノ三七一―五四カ)

「ファリザイ人の上に喙の雨」、イエズス様が御話をして居なされる所に、一人のファリザイ人がやつて来た。自宅へ御出て、晝飯を召上つて下さいませう様に、とお願ひした。一寸した機會でも取逃がさないで、人を教へ導かう、と云ふのを主義とし給ふイエズス様の事だから、快く承諾して、彼の家に入り、食卓に就かれた。然し食事の前に、お手をお洗ひになりませんでした。食事の前に手を洗ふのは、ファリザイ人の極めて大切にせる所、殆ど神聖犯すべからざる儀式の如くして居る所なものですから、主人は餘程訝しく思つて居る。イエズス様は直に彼の

心中しんちゆうを讀よまれた。フアリザイ人等じんらの形式主義けいしきしぎに向つて痛棒つうぼうを喰くらはせ、彼等かれらが民衆みんしゆうを蠱惑まごはす爲ために被かつて居ゐる偽善ぎぜんの皮かはを、容赦ようしゃなく引剝ひきはいでお遣やりになりました。痛悔つうくわいせる罪人ざいじんに對たいしては、非ひ常に情厚じやうこうく在ますイエズス様さまも、フアリザイ人等じんらの偽善ぎぜんだけは、決けつして御容赦ごようしゃなさらぬ。痛烈骨つうれつぼねを刺さす様な咀のろひを彼等かれらの上うへに浴あびせられました。

さてもフアリザイ人諸君じんしよくんは、杯さかづきと皿さらの外部そとを淨きよめるが、諸君しよくんの内部うちは、盜ぬすと不義ふぎとに充満みちみつて居ゐるのです。愚おろかな人等ひとたちよ、外部そとを造つくり給たまうた御者おんものは、亦また内部うちをも造つくり給たまうたぢや無いですか。然しかし餘あまつた物ものを施ほこしなさい。然さすれば一切いっさいの物ものは忽たちまち諸君しよくんの爲ために淨きよめられるでありませう。

幾いくら杯さかづきや皿さらを洗あらつたからツて、夫それで心こころが淨きよくなるものでは無い。心こころを淨きよくするには、自分じぶんに餘あまつた物ものを施ほこすに限かぎる。「施ほこしは人をすべての罪つみより遁のがす」(トピア)とトピアは曰いつた。成なるほど施ほこそれ自體じたいが罪つみを淨きよめ得うる譯わけのものでは無い。然しかしながら心こころを淨きよくするには、海うみや河かはの水みづよりも確たしかに大おほいな効力ちからを有もつて居ゐる。夫それだけは決けつして疑うたがひを容いれない所ところである。

イエズス様さまは斯かう云いつてフアリザイ人等じんらの偽善ぎぜんを咎とがめた上で、更さらに三さんの「禍わざはひなる哉かな」を彼等かれら

に投なげつけなさいました。モイゼの律法りつぽうによると、人民じんみんは毎年まいねん、その農畜産のうちくさんの收穫とりのいれの十分一じふぶんいちをレウイ族れういぞくの人々ひとびとに納なめ、レウイ族れういぞくの人々ひとびとは、また其十分一そのじふぶんいちを司祭しさいに奉たてまつつて居ゐました。所ところでフアリザイ人等じんらは、極ごくく些細さいさいな、納なめるに及およばぬ物ものまでも、几帳面きちやうめんに奉納ほうなしながら却かえつて大たい切せつな天主様てんしゆさまの掟おきてを等閑なほざりにして居ゐる。其上そのうへ、彼等かれらは好このんで上席じやうせきに就つき、人ひとに尊たつとばれたが。而しかも外面うへべにこそ善人ぜんじんを装よそうて居ゐるが、心こころは汚きたい墓はかの如ごときものである。墓はかを踏ふんだものは、汚点けがれを受ける、と云いふのが律法りつぽうの定めである。隨したがつて墓はかは人目ひとめに立たち易やすくして置おかねばならぬのに、彼等かれらばかりは全まったく隠かくれた墓はかである。知しらず識しらずの中に幾多かねたけの人ひとを汚けがして居ゐるか、知しれぬのであります。

禍わざはひなる哉かな、フアリザイ人諸君じんしよくんよ、諸君しよくんは薄荷はくか、ヘンルーダ(藥草の名)その他た、一切いっさいの野菜やさいの十分一じふぶんいちを納なめるが、義ぎと天主様てんしゆさまの愛あいとをさし措おいて居ゐる。此等これら(義ぎと天主様てんしゆさまの愛あい)は固もとより爲なさねばならぬ。彼等かれら(十分一じふぶんいちの奉納ほうな)をも亦また怠おこりてはならなかつたのです。

禍わざはひなる哉かな、フアリザイ人諸君じんしよくん、諸君しよくんは會堂くわいどうにあつては上座じやうざを、街衢ちまたに於おいては、敬禮けいらいを好このんで居ゐるのです。

禍なる哉、諸君、諸君は露れない墓に似て、上を歩く人々は之を知らないのです。其時、一人の律法學士が主の御言を遮つた。律法學士と云へば、ファリサイ派に屬せる教師だ其教師の一人が、

先生、其んな事を仰有つては、私等をも侮辱なさるんですよ、
と、イエズス様に注意した。然し彼等だつて、やはり同じ穴の狐だ。イエズス様は一寸とも御遠慮なさいません。

律法學士、諸君も亦禍なる哉、諸君は擔ひも得ない荷を人々には負はするけれども、自分は指一本でも其荷に觸れないのです。

禍なる哉、豫言者の墓標を建つる諸君、之を殺したのは諸君の先祖で、諸君は自ら其先祖の所業に同意する事を證するのです。彼等が之を殺したのに、諸君は其墓を建て、居るのです。のであるから天主様の御智慧が仰になりました。(天主様が斯うお)「私は彼等に預言者や、使徒等を遣しませう。そして彼等は其中の或者を殺し、又或者を迫害するであります。」と。されば世界開闢以來、流された凡の豫言者の血、即ちアペルの血より、祭壇と神殿との間に斃れ

たザカリアの血に至るまで、現代は其罪を問はれるであります。私は誠に諸君に申しませう。現代は其んなに罪を問はれるであります。

禍なる哉、律法學士諸君、諸君は知識の鑰を奪取つて、自分も入らず、入らんとする人々をも拒んだのであります。

彼等は宗教上の知識の鑰を握り、救靈の道をも辨へて居ながら、自分も其道に入らず、人の入るのも妨げました。「禍なる哉」と言はれても致方はありますまい。

イエズス様の御答は寸分の無理もなかつただけれども、ファリサイ人、律法學士等は非常に憤慨した。様々の事を以つて、イエズス様を閉口させようと務めた。隠謀を運し、イエズス様の御口から何事かを捉へて、之を訴へんものと、懸命に働きました。

【ファリサイ人の偽善に注意せよ】、イエズス様がファリサイ人宅に晝飯を召上つてお在になる間に、群衆は夥しく其附近に蟻集つて來た。其家をお出行きなされると、忽ち大勢が周圍を取巻いた。イエズス様を見たい、御話を承りたい、と一時に推掛けて、互に踏合ふ程でした。イエズス様は彼等に向ひ、ファリサイ人の偽善を避けること、迫害を恐れない事、堅く信仰を

執守つて動かない事、この三つを注意して置かれました。

フアリザイ人のパン酵(教)、あれは偽善です。御注意なさいよ。覆はれた事で、顯はれざるは無く、隠れた事で知れざるは無い。諸子が暗黒で言つた事は、光明に言はれる。室内で囁いた事は、屋根の上で宣べられるであります。

幾ら巧に偽善を装うても、終には暴露れるものだ、と云ふことを御諭しになつた。是は前方、幾度も仰有つた所ですが、念のため、今一度繰返しなされたのである。次に迫害を怖れるには及ばぬ、勇氣を出せ、と教へなさいませ。

されば私の友たる諸子に私は申します。肉體を殺しても、其上には何にも爲し能はぬ者を懼れなさるな。諸子の懼れねばならぬ者を御目に懸けよう。殺した上で、地獄へ投入されるだけの權能を有つた者を懼れなさい。然うです。私は諸君に申します。之を懼れなさい。五羽の雀は四錢で賣るぢやありませんか。然しその一羽でも、天主様の尊前に忘れられる事はありません。諸子の頭髮すら一々算へられてあります。だから懼れるには及ばぬ。諸子は多くの雀にも優つて居るのです。

懼れない許りでは足りない。信仰を固く執守り、誰の前をも憚らず、公々然と其信仰を宣言せねばならぬ。

私は諸子に申します。總て人々の前に於て、私を宣言する者は、人の子も亦神の使等の前に於て、之を宣言するであります。然し人々の前で私を否む者は、神の使等の前でも否まれませうぞ。又すべて人の子を譏る者は赦されるであります。然し聖靈に對して冒瀆した者は赦されませう。人々が諸子を會堂に、或は官吏、權威者の前に引張り出す時は、如何に、又何と答へ、何を言はうか、と思ひ煩ひなさるな。言ふべき事は、其時、聖靈が諸子に教へて下さいます。

迫害が如何に猛烈しくつても、希望を失つてはならぬ。力を落すにも及ばぬ。天主様が、共に居つて保護して下さい。助けて下さる。御見棄てになる様なことは、決して無いのであります。

【財寶の空しさ】、其時、群衆の中から聲を擧げて、イエズス様に依頼をした者がありました。先生、私の兄弟に命じて、家督を私と分たして下さいませ。

と、彼はイエズス様の權威を借りて、兄弟の取り込んで居る財産を回復さうと計つたのである。

然しイエズス様の御答は峻烈しかつた。

人よ、誰が私を貴方等の判事、且つ分配者と定めたのです？

イエズス様のお建てになるのは天國である。物質上の富や、政治上の問題に係り合ふのは、決して御本意ではない。然し其んな事に係り合ふのを謝絶りながらも、この機會に、富の恃むべからざる所以を、弟子等の頭に染み込ませて置いたら、と思召されて、彼等に曰うた。

慎みなさい。すべての貪慾に用心なさい。人の生命は、その所有物の豊けさに由るのではありませんよ。

ご。實際、富で以て一寸の生命でも延長することも出来ねば、些の幸福でも増大される譯ではない。斯う云つた上でイエズス様は、御言の意義を一層明白にせんが爲に、次の如き喩を語られました。

一人の富豪がありました。其畑が豊に稔つたので、彼は心の中に考へました。何うしようか私の作物を積むべき處は無いのだが？彼は終に申しました。可し斯う爲よう。私の倉を毀ち、更に大きなのを建て、其所に私の作物と貨財とを積まう。そして私の魂に向ひ、魂

よ、數多の財産は多年の用に貯へてある。心を安じて、飲んで食べて、樂めつて言はうよ、ご。然るに天主様は彼に仰つた。愚な者よ、汝の魂は今夜呼還されるのだ。然すれば備へ置いたのは誰の物になるだらうか？ご。自分の爲に財を積みながら、天主様の御前に富まない人は、斯んなものです。

【お攝理に「任せよ」】富は空しい、恃み難いものである。然しながら、明日の事を思ふと、蓄貯に心を勞せぬ譯には行かぬ。斯う云つて連りに思煩ひ、矢鱈に蓄財の夢を貪る人は多い。でイエズス様は、山上の御説教に述べられた美しい格言を繰返して、再び弟子等をお戒めになりました。

私は諸子に申します。生命の爲に何を食べようか、身の爲に何を着ようか、と思ひ煩ひなさるな。生命は食物に優り、身は衣服に優つて居ります。鳥を鑑みなさい。播く事なく刈る事なく、倉も納家も有ちません。然れども天主様は之を養ひ給ふのです。諸子は鳥に優ること幾何でせう。

諸子の中に誰か工夫して、自分の壽命に一肘(一尺七寸)でも加へること出来ますか？され

ば斯んなに最小いことすら能はぬのに、何で其他の事を思ひ煩ふのです。百合が何んなに長つかを鑑みなさい。働きもせねば、紡ぎもしません。でも私は諸子に申します。サロモンですら、其の榮華の極に於て、彼の百合の一つほごに粧うたことがありませんよ。今日野に在りて、明日は爐に投入られる草ですら、天主様は斯んなに粧つて下さる。況して諸子をや。信仰の薄い人等だ！で諸子も、何を食べようか、何を飲まうか、と求めなされるな、又大きな望を起しても可けません。世の異邦人は是等一切の物を求めますけれども、諸子の父は、諸子が之を要しなされることは御存知です。だから先づ神の國と其義(聖)とを求めなさい。然すれば是等一切の物は諸子に加へられるであります。

斯く教へてから彼等の心を一層高く引上げなされた。富に心を奪はれないのみか、進んで富の主人公となり、之をドシ／＼慈善業に使用つて行く様にお勧めなさいました。

小な群よ、懼れぬでも可い。諸子に御國を賜ふのは、諸子の父の御意に適へる所です。諸子はその所有物を賣りて慈善を行ひなさい。自分の爲に古びない財囊を造り、盡きない寶を天に貯へなさい。彼所には盗人も近かず、蠱も壞ひません。諸子の寶の在る所に、諸子の心も

亦在るものです。

一切を抛つて、清貧の徳を完全に守る様、特選の弟子等にお諭しになつたのであります。

聖アントニオや、最初の山修士聖パウロや、其他數知れぬ修道者等は、この御言を文字通りに實行したものである。彼等が現世ながらに、天使の如き生活を營むに至つたのは、全く富の煩を脱し得た結果ではなかつたでせうか。

(六) 續いて弟子等に教へ給ふ (一二ノ三五―五九)

【警戒の必要】、既に富の輕んずべきこと、天國に財寶を積むべきことをお諭しになつた。夫から急にお話を進めて審判の場に移り、三の比喩を借りて、警戒の必要をお説きになる。第一の比喩は、僕が主人の歸宅を待つて居る所から取つたものであります。

諸子は腰に帯を引締め、手には燭を点して居なければならぬ。主人が婚筵から還つて来て、門を叩かば直に開けて上げようと、待構へて居る人の如くあらねばならぬ。主人がお出になつた時、目醒めて居る所を見當られた僕等は幸福です。私は誠に諸子に申します。主人は自

ら帯を締め、彼等を食卓に就かしめ、彼等の間を通つてお給仕をして下さるでありませう。主人が十二時に御出になつても、三時に御出になつても、其んなにして居るのを見當りまじたら、彼の僕等は幸福でありますぞ。

第二の比喩は、盜賊を警戒する所から取つたもので、主の日は盜賊の如く、不意に来るべきことを御注意なされたのであります。

諸子は知つて置きなさい。家父たるものが、若し盜賊の來るべき時を知りましたら、必ず警戒して、其家に穴を穿たせはしませんでせう。諸子も用意して居なさいよ。人の子は諸子の思はぬ時に参りませうぞ。

其時、シモン・ペトロがイエズス様の御言を遮つて、

主よ、この喩は私等の爲に仰有るんですか、總の人の爲なんですか、

と問ひました。イエズス様は彼に答へて、第三の喩を語られた。忠實な僕、用心深い家父の喩の意義を一層明にされた。厚い信用を置かれ、高い地位に据ゑられた者は、一層の注意を要する旨をお告げになつたのであります。

時に應じて、麥を程よく分配させようと戸主がその家族の上に立てし忠實で、賢い執事は誰でせう。主人がお出になつた時、其んなに實行して居る所を見られた僕は幸福でありますぞ。私は誠に諸子に申します。主人は自分の有てる一切の物を、之に掌らしめるであります。若しや彼の僕が、主人の御出になるのは遅いよ、と心の中に謂つて下男や下女を打叩き、飲んだり、食つたり、酔ばらつたりし始めて居るとませうか。當にして居ない日、知らない時に、彼の僕の主人が御出になつて、之を處罰し、不忠實な者と、其報を同じうせしめるであります。又主人の旨を知つて居ながら、用意もせず、主人の意に従つて行ひもせぬ僕は、多く鞭たれるであります。然し知らずして罰に當る事を爲した者は鞭たれる事も少いでせう。すべて多く與へられた人は、多く請求され、委托された所が多ければ、催促される所も多くあるであります。

然らば、使徒等の如く多く與へられ、多く委托された者は、亦多く要求され、多く催促されるものと覺悟しなければならぬ。天主様は極めて公平です。依怙沙汰と云ふは微塵もあらせられぬのであります。

【火の燃立つを望む】、イエズス様は警戒せよ、忠實であれ、と繰返し御諭しになつた。然し此の二つを全うするには、世間に向つて勇ましく闘ふ覺悟にならなければならぬ。で御自分の御手本を持出して、迫害に打突かつた時の用意を御説きになります。

私は地上に火を放たんとて参りました。其の燃ゆるが外に何をか望みませう。さて私には受くべき洗禮があります。开が遂げられる迄は、私の思の逼れることは如何ばかりでせう？ 私が地上に平和を持つて来たのだと思つてお在ですか。否、私は諸子に申します。却つて分離を持つて参りました。今からは一家に五人あらば、三人は二人に、二人は三人に對して分離れるであります。父は子に、子は父に、母は女に、女は母に、姑は嫁に、嫁は姑に對して分離れるに至るであります。

茲に『火』は、聖徳を喻へたものであらうと云ふことです。自分が苦難を忍び、迫害に倒れた結果、世界に聖徳の火が盛に燃わ擴がる様、夫を望みなさつたものである。イエズス様は平和の君です。苟にも迫害を祈り、不和を冀ひ給ふ筈がない。然し善と惡との戦は到底免れ難い所。御國を遠く弘め、その基を十分固うするには何うしても迫害に揉まれる必要がある。弟子

たる者は、豫め夫だけの覺悟であらねばならぬ。だから前以て其邊の注意をして置かれたのであります。

【季節の兆】、イエズス様は弟子等を訓戒せられた。然し群衆も御身の周圍を取巻いて居たので彼等にも一言の注意をお與へになりました。

諸君は西から雲が起るのを見れば、直ぐ雨が来るだらう、と仰有る。果して其通りになる。又南風が吹くのを見れば、暑くなるだらう、と仰有る。實際然うなります。僞善者よ、諸君は天地の氣象を見分けることを知つてお在だ。夫に何うして今の時を見分けないので。何うして自ら義しき事を見定めないので。

前にも申しました如く(七頁)上巻、ユデアは西に地中海を控へ、南はアラビアの砂漠に接して居る。随つて西風に送られる雲は、水蒸氣を多分に含んで居る。却つて南風は、アラビアの燒砂を渡つて来るので、非常に暑苦しい。イエズス様は夫から話柄を採つて、群衆の不信仰をお咎めになつたのです。天候さへ見定め得る者が、何うして今の時を見極め得ないのだ。今こそキリストの時である、徴候は歴然と顯れて居るではないか。早く今の時を見分けて、悔い悛め

なければ、天主様の義しい審判を蒙り、取返の付かぬ不幸に陥らねばならぬぞよ、と續いて御戒めになります。

諸君は敵手と共に、官吏の許へ行く時、途すがら彼の赦を蒙るべく務めなさい。然もないと恐らく彼は判事の許へ君等を引行き、判事は下役に付し、下役は監獄に打込むであります。

私は誠に君等に申します。最後の一厘までも還さない中は、其所を-outすまいぞ。

このお話は山の上の説教中にも出て居るが、然し彼と此とは主旨が一樣でない。彼は兄弟に對する愛を説いたものであつた。此はもつと廣く、一般的に亘つて居る。彼の「敵手」は兄弟であつたが、此の「敵手」は天主様で、若し天主様の御怒を買つて居る様なことでもあるならば、未だ時日のある中に、早く和解をして置くが可い。然もなくば、永遠窮まりなき罰を蒙るに至らんかも計られない、と御注意なされたものである。「官吏」とか、「判事」とか、「下役」とか云ふのは、ユデアの裁判制度から借用されたもので、此では一々引當る所がある譯ではありません。誰しも天主様の審判の嚴さを思ひ、深く怖れ、遠く慮る所があらねばならぬ。「主を畏るゝは智慧の始」であります。

(七) 改心の必要 (ル一二三ノ一―九)

【改心せざれば滅ぶ】、イエズス様がお話をしてお在になる時、偶ま人がやつて來た。總督ピラトが、エルザレム神殿の庭に於て、數人のガリレア人を殺害し、彼等の血を犠牲の血に混へた事を告げた。エルザレムには頑固な愛國黨員があつて、能く一揆を起し、羅馬政府に反抗を試みる。そして熱血性のガリレア人は、何時も其一揆に加はつたものである。斯る際にピラトは、何の容赦もあらばこそ、思切つて高壓手段を取り、神殿の庭だらうと、何處だらうと、流血に漂はしたものでした。當時の人々の考では、何かの災難に出遭した人は、重い罪でもあつて、天主様に罰されたのだ、と云ふのでしたから、群衆も今の話を聞いて、然う思つたに相違ない。で、イエズス様は彼等の思違ひを諭し、併せて悔悛の必要をお説きになります。

其のガリレア人が、斯る目に遭つたからとて、總のガリレア人よりも罪深いのだと思ひますか。否、私は諸君に申します。諸君も改心しなければ、皆同じく亡びるであります。又シロエに塔が倒れて、夫に壓殺された十八人でも、エルザレムに住める總の人に優つて、負

債(罪)があつたと思ひますか。否、私は諸君に申します。諸君も改心しなければ、皆同じ様に亡びるでありませうぞ。

ユデア人はイエズス様の御警告に耳を假さず、悔い悛めようともしなかつた。爲に四十年ばかりの後には、ローマ軍に攻め破られ、何十万と云ふ大勢が討滅ぼされたのであります。

【實らない無花果】、イエズス様は改心の必要を説かれた。改心は何人にも缺くべからざるものだ。死は盗人の如く、思はぬ時にやつて来る。今日は人の身、明日は我身の上に出て來ぬにも限らぬ。一刻も油断をしてはならぬ。改心を差延すより危険はない、と云ふことを論さんが爲に、左の喩話をお加へになりました。

或人が葡萄畑に無花果の樹を植ゑました。來つて其果を求めましたが、一向見付かりません。葡萄畑の小作人に曰ひました。「私が來て此無花果樹に果を求めても見付からぬことは、早や三年になる。伐り倒して了へ。何の爲め、徒に地を塞ぐのだ」と。小作人は答へて申します。

「旦那、今年も之を容して置いて下さい。私が其周圍を堀つて、肥料を施しませう。或は果を結ぶことがあるかも知れません。若し夫が有りませなんだら、其後に伐り倒しなさいと。

果のない無花果樹とは、改心して善業の果を結ばうとしないユデア國民で、主人は云ふ迄もなく天主様です。天主様が罪人の改心を氣永くお待ち下さるのは、何時までも、平氣で罪を犯させる爲ではなく、一日も早く果の無い生活を止めさせたい聖慮からである。小作人はキリスト様で、驚くべき同情を以て、國民の爲に天主様の御哀憐をお求め下さいます。然し未だに改心の實を結ばない。氣遣はしいものだ、と御注意なされたのであります。

私等も聖會の畑に植ゑられた無花果樹である。幾年前から植ゑられましたか。して幾程の果を結びましたか。今のまゝにして居ては、終に伐り倒されることは無いでせうか。主は盜人の如く、思はぬ時に御出になる。其時に當つて、御手に獻ぐべき果が一つも無かつたら、何うなりませう?。

(八) 途 中 の 第 一 安 息 日 (一三ノ一〇—二一)

【屈まつた婦人】、カファルナウムを御立ちになつてから、第一安息日が來た。旅行を續ける譯には行かぬ。イエズス様は會堂に入つて、御教話をなさつた。其所に一人の可哀相な婦人が居ま

した。十八年も前から悪魔に憑かれて、非常に弱り込み、身體が屈まつて、少しも上を仰視することすら出来なくなつて居たのです。イエズス様は之を見て、坐に同情を催された。御側へ呼び寄せて、

婦人よ、貴方は其病から救はれましたぞ、

と言つて之に按手なされました。すると婦人は忽ち全快した。十八年の久しい間も、屈つて居た首も背もチャンと伸びて、上が仰げる様になつた。婦人は嬉しくて跳り上らんばかり。誠心から天主様に光榮を歸し奉りました。

【反對者の赤面】、然るに會堂の司はファリザイ主義の人だつたんでせう。イエズス様が安息日に病をお癒しになつたのを見て、腹立たしく思ひました。直接にはイエズス様を咎め得ないで、群衆に喰つて蒐り、

働くべき日は六日間ある。其間に來て癒して貰ひなさい。安息日には可けません、と強かイエズス様に當擦をやりました。イエズス様はお答へになります。

偽善者等よ、諸君は安息日に當つて、各自の牛か驢馬かを芻槽から解いて、水飼ひに曳き行

くちやありませんか。このアブラハムの女は、十八年間も悪魔に繋がれて居たものです。安息日にだつて、其繋を解いてやるべきでは無かつたんですか。

斯う突込まれては、反對者連も流石に赤面した。群衆は擧つて、イエズス様の御手に行はれた總の光榮ある事を喜びました。

【二個の喩話】、イエズス様も亦彼等の心底の美しさを見て、少からず喜ばれた。二個の喩話を以て、自分の創設むべき天國(聖會)の、目醒しい發展を暗示されました。

神の國は何に似て居ますか。私は之を何に擬へませうか。恰も一粒の芥種の如きものです。人が取つて之を其畑に蒔きますと、長つて大木となり、空の鳥が其技に憩ひました。

續いて又曰うた。

私は神の國を何に擬へませうか。恰もパン酵の如きものです。婦人が取つて之を三斗の粉の中に藏して置きますと、終には悉く膨れるに至るものであります。

前にも記して置いた通り(三二卷)、芥種の喩は、聖會が遠く廣く外に伸びることを語り、パン酵の方は、内に及す感化力の驚くべき次第を説いたものである。實際さうでせう。キリス

ト教は世界の隅々までも弘布つて居る。思想界は益キリスト教的色彩を帯びて来た。我日本の如き異教國ですら、社會萬般に亘つて、キリスト教の影響を蒙つて居ること、云つたら、夫は、
 非常にものぢやありませんか。

【救はれる者は少い】、安息日は過ぎた。イエズス様は再旅行を續けなさる。町々村々に御教を説きながら、イエエルザレム指して御進みになります。時に或人が、

主よ、救はれる人は少う御座いますか、

と問ひました。メツシアは眼前に据ゑ置きながら、連りにメツシアを待焦れて居た當時の事とて、一般に斯んな問題を頭に浮べて居たものである。イエズス様は彼の間に直接御答にならない。然し皆に向つて、救に到るの途を説き、間接に御答へなさいました。

窄い門から這入ることに務めなさい。私は諸君に申し上げます。多の人は這入ることを求めても能ひますまいよ。家父が既に入つて、門を閉ぢました時、諸君が外に立つて、門を叩き、「主よ。私等にお開け下さいまし」と言ひ出させよう。すると彼は答へて、「其方等が何處の人だか私には知らないよ」と仰有るでせう。「私等は尊前に於て食べもしました。飲みもしました

貴方様も私等の衢に於てお教へ下さつたのであります」と其時、諸君は申しなさらう。でも家父は相變らず、諸君に向ひ、「其方等が何處の人だか知らない。惡を爲せる輩だ。悉く私から立去つて呉れ給へ」とお答へになるでせう。斯くて諸君はアブラハム、イザアク、ヤコブ、及び諸の預言者が神の國に在るのに、自分等ばかりは、外に放逐されると見たらば、其處に痛哭と切齒とがありませう。又東からも、西からも、北からも、南からも來つて、神の國にて席に就く人々もありませう。そして御覽、後の人が先になり、先の人が後になるでありませんか。

家父とはイエズス様です。イエズス様は天國に盛大な宴會を設け、客を御招待になります。宴席の門は大きく開いてある。客はドシ／＼集る。然し時限が來ると、門はピタリと締つて了ふ。遅れて來た者は這入ることが出来ない。家父との故い關係、親しい交際を申し立て見ても、夫は入門を許して戴く理由にはならぬ、と云ふのです。時のユデア人は、第一に招待を受けた先客でした。然し彼等は其の招待に應じて、出て行かうとしなかつた。仕方が無いので、異邦人が彼等の代りに招待された。後の鳥が先になり、先の鳥が後になつたのです。信者たる者も

大に鑑みる所があらねばなりません。

【ヘロデの古狐】、此日に二三のファリザイ人がイエズス様に近き、

ヘロデが貴方を殺さうとして居ます。此處を出て、立去らなさい、

と申しました。實際ヘロデが其んなことを企らんで居たものでせうか。洗者ヨハネを蹴つた程の彼である。イエズス様の勢望の日増に高まるのを妬んで、何か恐ろしい企圖をして居たかも知らぬ。然しファリザイ人等の平素の悪心、そのイエズス様に對して抱ける敵意から以て見ると、何でもイエズス様を威嚇して、其處を立退かさうと謀つたものでは無いでせうか。何れにしても、イエズス様は驚きなさらぬ。飽まで冷靜に、飽まで森嚴に、お答へになります。

往いて彼の狐に告げなさい。御覽、今日も明日も、私は悪魔を逐出す。人々を醫す。そして三日目には我事が畢るであります。然し今日も、明日も、其次の日も、私は歩かなければならぬ。預言者たる者が、エルザレムの外に斃れるのは、相應しくありません。

天の御父に承つた使命が自分にある。是非その使命を全うせねばならぬ。定つた時が来ると自分はエルザレムに乗り込んで死ぬ。自分の死所はエルザレムだ。ヘロデの領内ではない。百

のヘロデがあつても、怖れるに足らぬ、と御答へになつたのである。この序にイエズス様は、エルザレムの上に懸れる悲惨な運命を想ひ遣られました。

エルザレムよ、エルザレムよ、預言者等を殺し、汝に遣されし人々に石を擲つ者よ、鳥がその巢雛を翼の下に集めるが如く、私は汝の子等を集めようとした事が幾度だつたでせう。然し汝は之を肯じなかつたのです。看よ、汝等の家(殿)は荒廢て、汝等に遣されるであります。せう。私は汝等に申します、「主の御名によつて來れる者は祝せられさせ給へ。」と汝等の唱へる時が來るまでは、私を見る事がありますまい。

國民の上に差懸れる天罰を告げると共に、彼等が世の終には改心して信仰を起し、自分に向つて、「主の御名によつて來れる者は祝せられさせ給へ」と叫ぶべき事を預言せられたのであります。

イエズス様は御死去の近くに隨つて、いよ／＼痛切に國民を警め、併せて私等をもお諭し下さいました。自分はキリスト信者だ、キリスト様をお識り申して居るのだ、と思つて油断をしてはならぬ。行爲の伴はない信仰は、死んだ信仰です。何の益もないものであります。

(九) 第二 安息日 (一四ノ一—二四)

【水腫の人】、途中で復安息日が来た。イエズス様は、フアリザイ人の長だった人に招待され、パンを食せんとて、其家にお這入りなされた。人々はイエズス様の御舉動を伺つて居る。アラを見付かつたら、直に一本突込んでやらうと云ふ腹なのだ。偶ま水腫(脹滿の類)に罹つた人が御前に居ました。癒して戴きたいと思ひ、這入つて来たものらしい。イエズス様は居並べる律法學士、フアリザイ人等に向ひ、

安息日に醫しても可いませうか、

とお尋ねなされた『可い』と答へたら、平素の主張を裏切る譯になる。然し『可けない』と答へては、『不人情』と譏られさうにある。彼等は進退谷つて、何とも答へない。默然として居るばかり。因つてイエズス様は彼の人を執へ、即時に之を醫して立去らせ、さてフアリザイ人等に向ひ、質問を試みなさいませう。

諸君の驢馬なり牛なりが、井に陥つたと致しなさい。安息日だからとて、速に之を引上げな

い人がありませうか。

斯う出られては、流石の彼等も答へる所を知らぬ。何とも口を開き得ないのであつた。

【宴席に就く時の心得】、ユデアの宴席は食卓を中央にして三方に席を併べ、一席に三人づつ、就かれる様になつて居ました。各席の中央がフアリザイ人等の冀へる上席でした。さて此日に招待された人々は、概して傲慢なフアリザイ人だつたものですから、先を争つて上席に就かうとします。その醜しい態を御覧になつたイエズス様は、喩を以て彼等をお戒めになりました。

貴方は婚筵に招待された時、決して上席に就きなされるな。貴方よりも貴い人が招待されてありましたら、恐らく貴方と其人とを招待した人が参りまして、『何うぞこの御方に席を譲つて下さい』と申すでありませう。然うなると、赤面して末席に就かねばならぬ様になります。だから招待された時は、往つて末席に就きなさい。然らば招待した人が来て、『友よ、上へお進みなさい』と言つて呉れます。其時こそ、列席せる人々の前に面目がありませう。すべて自ら驕る人は下げられ、自ら謙る人は上げられるでありませう。

申す迄も無いが、イエズス様は決して謙遜の假面を被る様にお勧めなされた譯ではない。其ん

な似而非謙遜は、露骨の傲慢と何の選む所がありません。たゞ通常、世間一般に行はれる禮儀作法の型を説き、併せて眞實偽りなき謙遜をお教へ下さつた丈に過ぎないのであります。

【純乎たる慈善】、イエズス様は客を戒めると共に、主人公にも、純乎たる慈善、利我の觀念の少も雜らない博愛をお諭しになりました。

貴方は晝飯か晚餐かを設けます時、朋友や、兄弟や、親族や、富める憐人やをお招きなさるな。恐らく彼の人等も亦貴方を招き、爲に貴方は相當の酬を受ける事になりませう。却つて饗筵を設けなさる時は、貧窮、廢疾、跛足、盲目の人々をお招きなさい。彼等は貴方に酬い由が無いので、貴方は却つて幸福です。義者の復活に當つて、貴方には酬いられるのでありませう。

【大なる晚餐】、イエズス様が右のお話をして居なされると、列席の一人が、如何にも感に堪へない面體で、

天主様の御國に於て、パンを食する人は幸福で御坐いますよ、

と申しました。選を受けて天國に昇つた善人は、幸福なる哉と言つたのである。聖書には、

天國の福樂を樂しい饗宴に喩へた所が多い。イエズス様は彼の言を端緒に、一の美しい喩を語り、前の二個にも超えて、重要な教訓をお遺しになりました。

或人が大なる晚餐を設けて、多くの人を招待しました。さていよいよ晚餐の時刻になりますと、僕を遣して招待された人々に、もう万の準備が出来たから、出席して貰ひたい、と言はせました。すると彼等は一同に謝絶り出した。初の人と言ひます。「私は小作場を買ひました。行つて見なければなりません。何うぞお容し下さい」と。次の人は言ひます。「私は五頭の牛を買ひました。往つて試みようと言ふ所です。何うぞお容し下さい」と。又一人は、「私は妻を娶りました。行き得ません。」と申しました。僕は歸つて其由を主人に告げた。家父は怒つて僕に言ひます。「速に町の衢と辻に行き、貧窮、廢疾、盲目、跛足の人々を此處へ連れて御出で」と。やがて僕は、「主よ、仰の如く致しました。然し未だ空席があります。」と申しました。「では道や、籬の下に行つて、私の家が一杯になるまで、強ひて人々を這入らせなさい。私は誠に諸子に言ふ。彼の招かれた者の中に、一人でも私の晚餐を味ふ者はありません。まいぞ」と、主人は僕に言ひました。

天主様は誰彼の別なく、總の人に救の恵を御與へ下さる。昇初、天國の晩餐に招待されたのはユデア人であつた。然し彼等は、何の彼のと辞柄を設けて、御招きに應じない。已を得ず、卑賤しい民衆をお招きになつた。幸ひ民衆の中には、快く御招待に應じた者が少くはなかつた。夫にしても天國の家は廣く大きい。空席は未だなかく多い。で異邦人の間に人を遣して、一杯になるまで、強ひて驅集めなさるのであります。

私等は幸に主の御招待を蒙つて居る。然しいよく天國の宴席に就て、其の言ひ知れぬ美味を味ふ迄は、決して油断はされぬ。何時變心して、彼のユデア人見た様に、折角の御招待を、むざ／＼と御謝絶り申す様にならぬとも限らぬ。世帯や、妻子や、歡樂や、其んなものに心を奪はれない様、何時も／＼警戒の眼を醒して居なければならぬのであります。

(一〇) 弟子たらん者の覺悟 (ルカ、一四)

【キリストの眞の弟子】、安息日を終へて、イエズス様は又復途に上られた。夥しい群衆が御伴をして來ました。行く／＼イエズス様は、自分の弟子たらん者に要する覺悟をお説きになり

ました。

人が私の方へ参りましても、その父母、妻子、兄弟、姉妹、己が生命までも憎むでないならば、私の弟子たり能はぬのです。又己が十字架を擔いで、私に従はない人は、私の弟子たり能はぬのです。

イエズス様の御語は、一寸聞けば矯激に失する様に思はれる。然し實は其んなものではない。己を捨て、身を犠牲に供するだけの決心が無いならば、自分の弟子にはなり難いと云ふことを、力説された迄である。「憎む」と云ふ語にでも、眞實に憎むの意を持たせてはならぬ。イエズス様が之をお用ひになつたのは、天主様を愛するの熱きを表はすが爲、たゞ夫れだけに過ぎないのであります。

【二個の喩】、次にイエズス様は、二個の痛切な喩を語られた。一時の感情に任せて、自分の弟子となり、聽て離れ去る様な人は、如何な恥を掻き、如何な危険に陥るべきかを、警告め置かれたのであります。

諸君の中に、誰が塔を建てようと欲するならば、先づ坐して之に要する費用を見積り、之を

成就するのに、自分の有つて居る所で足りるか否かを計へないでせうか。然はなくて、若し基礎を据ゑた後に、成就することが出来ないならば、恐らく見る人は擧つて之を嘲り、「此人は建てかけても、成就することが出来なかつたよ」と言ふであります。又誰か國王が、出でて他の國王と戦を交へようと云ふ時は、先づ坐して、二萬を率ゐ來れる者に、我一萬を以て當り得るか否かを慮らないでせうか。若し當り得ないとするならば、未だ敵が遠い間に、使節を遣はして講和を申し込むであります。夫れと同じく、諸君の中に誰でも、其の有てる物を悉く見限らないならば、私の弟子たり能はぬのであります。實にキリスト様の弟子となるのは、天國までも達する程の高い塔を築くのである。又キリスト教生活と云ふは、不斷の戦闘生活で、困苦缺乏は離れないものである。たゞ一時の感情に驅られて弟子となり、戦闘を遣り出した計りでは足りない。最初の志は、是非とも之を終まで持つ續ける必要がある。中途半端にして止めるより大きな耻はない。前以て篤と考へ、十分慮る所があらねばならぬ。然し自分には何うも困難な様だ、迎も遣り切れさうにない、と見たらば、基督信者になるのを止しても可いかと云ふに、然うではない。たゞ難關に打突かる覺悟を

何時も忘れな、一切を抛棄てる決心で掛れ、とお諭し下された迄に外ならぬのであります。

【鹽】、兎に角、イエズス様の弟子になりはなつても、弟子の務を盡さない者ほど、厄介な、始末に負へぬ者は無い。イエズス様はその旨を諭して、之を鹽に喩へられました。

鹽は良い物です。然し鹽が若し其味を失つたならば、何を以て之に鹽しませう。土地にも益せず、肥料にもならぬ。外に棄てられるのみです。聞く耳を以つた人はお聞きなさい。

鹽は鹽としてこそ種々に用所がある。腐敗を止める。物に味も附ける。然し鹽その物が腐敗して其力を失つた日には、之に付ける鹽と云ふは無いものだ。もう全く抛棄てるより外はありやせぬのであります。

よく言つたものです。最善が腐敗すれば、最悪になるとは。眞の教を知り、眞の道を悟つたキリスト信者が腐敗した日には、もう何とも手の着けようが無い。殊にそのキリスト信者の中でも、多くの聖寵を戴き、高い地位に立ち、勝れた身分に召された上で腐敗したならば、いよく以て始末に負へなくなる。注意せずんばあるべからずです。

(一一) 天主の御哀憐 (一五ノ一―三二)

【諭話の分類】、イエズス様は平生から、通俗で、極く分り易い諭話を以て御教の旨義を人々に曉らすべく務められました。其の諭話は福音書に出て居るのばかりでも、四十の多きに上つて居る。大體、之を三つに分類します。第一は、種蒔の諭話を始とし、ガリラヤ宣教中に述べられたもの、第二は、今度エルザレム旅行の途すがら語られたもの、第三は、御死去の少し前に説かれたものであります。

第一類の諭は、既に録して置きました(上卷)。(三〇)。(第二類に属するのは、都合十四程あつて、其中から、善きサマリア人、五月鯛い友、愚な富豪、果の無い無花果樹、大なる晚餐の諭は、是も早や申し上げました。失せたる羊、失せたる銀貨、放蕩兒、不正な家令、無慈悲な富豪と貧しいラザルの諭は、唯今此處に記します。不正な判事、ファリザイ人と收税吏、無慈悲な僕、葡萄畑の小作人の諭は、時の先後に従ひ、夫々に書き載せることに致しませう。弱い者、小な者、賤しい、罪ある者に對するイエズス様の御情に感じて、收税吏や、罪人が

犇々と推かけて、御教を承らうとする。傲慢なファリザイ人、冷たい、鐵の様な心を有つた律法學士等は、例によつて自分等の僻んだ目に見答めて、

此の人は罪人を接けて、共に食するのだ、と咥いたものである。イエズス様は御自分の態度を辨解し、併せて彼等の迷夢を醒してやりたものと召され、失せたる羊、失せたる銀貨、放蕩兒、この三の諭を語られました。三つとも天主様の御哀憐、天主様が悔い悔める罪人を快く赦し、そが正道に立歸つて來るのを、如何に御喜び遊ばすかと云ふことを、明にしたものであります。

【失せたる羊】、さてイエズス様は、彼等に第一の諭を語つて曰うた。

諸君の中に、誰が百頭の羊を持つて居るとしまして、其中の一頭を失ひましたら、九十九頭は野に措いて、其の失せたるを見出すまでは尋ねませんか。そして之を見出したらば、喜んで己が肩に乗せ、家へ歸り、朋友や、隣人を呼集めて、「私と共に喜んで下さい。失つた羊を見出しましたよ」と言ひませんか。私は諸君に申します。天に於ても同じ様に改心せる一個の罪人の爲には、改心を要しない九十九人の義者の爲によりも、大なる喜があ

るでありませう。

身體はグタ／＼に疲れ果てるまで、野山を奔走つて迷羊を捜ね、之を見當るや、喜んで肩に乗せ、羊の檻に連れ歸る牧者の喜、夫こそ吾主の御姿をつくりぢやありませんか。實に吾主の御胸に渦き立てる優しい御情を、手に取る如く見せるのは、馬槽と、十字架を外にしては、この善き牧者の姿である。カタコンブの壁畫中に、善き牧者の姿の最も多く見られるのは、之が爲ではありませんでせうか。

【失せたる銀貨】、次にイエズス様は失せたる銀貨の喩を以て、天主様が罪人を捜し求めて、之に痛悔の恩寵をお與へになる、その活動的哀憐を描いてお見せ下さいました。

又、如何な婦人でも、ドラクマを十枚ほど持つて居まして、其一枚を失ひましたら、燈を點し、家を掃き、念を入れて、見出すまでは捜しませんか。さて見出したらば、自分の朋友、隣入を呼集めて、「私と一緒に喜んで下さい。失つたドラクマを見出しましたよ。」と言ひませんでせうか。私は諸君に申します。恰度そんな様に、神の使等の前に於て、改心せる一個の罪人の爲にも喜があるでありませう。

ドラクマと云へば、我國の三十錢位に當る小な銀貨です。然し僅十ドラクマしか持たない貧しい婦人の爲には、夫でも大金だ。熱心に之を捜し、捜し出しては、非常に之を喜ぶのも、無理はありません。

【放蕩兒】、第三の喩は誰の心にでも、常ならぬ感動を興へ、萬人の齊しく嘆賞措く能はざる美しい物語である。この喩話に出て居る放蕩兒は、その罪狀が頗る重い。然し改心の第一歩を踏出したのも彼自身である。眞實にして堅固な改心の必要條件、放蕩兒と父、及びその兄の心理状態等、夫は如何にも手際よく、鮮明に描出してあります。其の喩と云ふは斯うであります。或人が二人の兒を持つて居ました。次男の方が父に向ひ、「父よ、私に配當すべき財産をお分け下さい」と申し出ました。父は言ふが儘に財産を二人に分けて與へました。すると幾日も経たぬ中に、次男は一切をかき集めて、遠國へ旅立ちし、彼處に於て、放蕩三昧な生活をなし、その財産を浪に費しました。既に一切を費し終はつた後、彼の地方に大なる饑饉が起つて來た。彼も漸く乏しくなり出した。往つて其地方の或る人に縋ると、其人は之を己が小作場へ遣して、豚を牧はせた。斯くて豚の喰ふ豆莢なりと自分の腹に充したいと望んで居た

が、夫すら與へる者は有りませんでした。

是が豪家の次男に生れ、何不自由なく成長した彼の放蕩兒の成れの果である。歩一步、零落の阪を降り、終に貧苦のドン底に落ち込んだ、悲惨な、惱ましい有様が、面に見るが様ぢやありませんか。次に彼の胸に萌した改心の望から、其の父の許へ歸り、赦を蒙る所までも寫出してあります。

さて彼は己に省みて申しました。「我父の家には、パンに飽き足つて居る傭人が幾人である。夫に私は此處に餓死せんとするのだ。起つて父の許へ行き、そして申し上げよう、父よ、私は天に對しても、貴方の前にも罪を犯しました。もう貴方の子と呼ばれるには足りません。何うぞ私を貴方の傭人の一人と視做して下さい。彼は終に起上つた。父の許を指して行きました。未だ程遠い頃、父は之を見て、哀憐の情に得堪へず、趨せ行いて其頭を抱き、之に接吻しました。「父よ、私は天に對しても、貴方の前にも罪を犯しました。もう貴方の子と呼ばれるには足りません。」と彼は申しました。でも父は僕等に言ひました。「疾く最上の服を取つて来て、之に着せなさい。其手に指環を飾めさせ、其足に履を穿かせなさい。又肥れた積

を引張つて来て、之を屠りなさい。私等は會食して楽しみませうよ。この私の子は、死んで居たのが蘇生つた。失せて居たのが見出されたのです。斯くて酒宴を開きました。イエズス様は此處までお話しになつてから、更に長男を引合ひに出して、いよく父の底知れぬ情を活躍せしめて居なさいます。

時に長男は畑に居ましたが、歸つて家近く参りますと、奏樂の音や、舞踏の響が聞ける。僕の一人を呼んで、「是は何事だ」と問ひました。「ハイ、弟さんが御出になりました。恙なく御迎へ申したと云ふので、お父様が肥えた積をお殺しになつたのでムいます」と僕は言ひました。長男は立腹した。家に入るのを承知しません。で父は自ら出て来て、懇に願ひました。彼は父に答へて申します。「御覽なさい、私は多年お父様に仕へ、未だ曾て貴命に背いた事はありません。でも朋友と會食する爲と云つて、小山羊の一匹でもお與へになつた覚えがありません。然るに彼の貴方の子です。娼妓等と共に財産を喰盡してから歸つて来ましたら、貴方は之が爲に、肥えた積を屠りなすつたのです！」と。父は曰ひました。「子よ、其方は何時も私と共に居つて、私の物は其方の物じや。然れども其方の弟は死んで居たのに蘇生り、失せて

居たのに見出された。愉快を盡して喜ぶのが當然だつたのじや』と。胸の狭いこの長男、弟の改心、その歸宅を見ながら、何とも思はない、却つて父が易々と救を興へたと云つて、腹立たしく思つて居る此の長男とは、申す迄もなく、フアリザイ人や、律法學士等である。却つて改心した放蕩兒は、悔い俊めてイエズス様に近いて居る收稅吏や、罪人ではありませんか。

天主様の底知れぬ御哀憐、何時もく御情の御腕を擴げ、罪人の改心をお待ち遊ばすその感すべき御哀憐を思ひなさい。何んなに深い罪惡の底に墮落しても、失望する譯は決してありません。猶私等も罪人に對して、常に情をかけ、哀憐を施し、決して彼の長男の如き、冷酷な人であつてはならぬのであります。

(一一一) 財産の善用に關する諭 (一六ノ一—一八)

【不正な家令】、イエズス様は、弟子等の爲にも諭を語られた。財産の善用に就て、信者の心得べき點をお諭しになりました。

或る富豪があつた。一人の家令を使つて居ました。彼の家令は、主人の財産を浪費したと訴へられた。主人は彼を呼寄せて、「其方に就て私の聞いた事は何事じや。家令であつた時の會計を差出せ。其方はもう私の家令たることは出来まいぞ。」と申しました。

この家令は主人の財産を私して、夫を放蕩費か何かに使ひ込んだものらしい。其事が終に暴露けて主人の譴責を蒙り、暇を出されることになつた。家令は途方に暮れた。我身の振り方に就て、篤と考へて見るのです。その獨語の中には、よく家令根生をさらけ出して居る。

家令は心の中に謂ひました。家令の職を奪ひ取ると主人は仰有るが、さて何うしたものだらうか。農耕は出来ないし、乞食するのは耻しい。よし家令を罷められた時、人々の家に承けられるには、爲すべきことを知つて居るぞ。

彼は斯う獨語しながら、急に畫策を運らし、仕事に取懸ります。即ち、彼は主人に負債のある人々を呼集めた。初の一人に、「貴方は私の主人に幾許の負債がありますか」と曰つた。「油百樽です」と其人が答へると、「貴方の證書を取り、早く坐つて、五十とお書きなさい」と家令は曰ひました。又次の人に「貴方の負債は幾許ですか」と問うた。

「麥百石です」と其人が云つたら、「貴方の證書を取つて、八十とお書きなさい」と家令は申しました。

家令の行つた事は、何時しか主人の耳に入つた。主人は固より彼の働いた不正を是認する筈が無い。然し其の手段の巧妙なものには流石に舌を捲き、彼の敏腕を譽めました。

イエズス様が此諭を語られたのは、家令の用ひた不正手段を奨励する爲ではない。たゞ富を利用して、永遠の幸福を買ふの利益を論じたい思召からでした。因つて家令の敏腕に主人が舌を捲いた譯を述べ、併せて弟子等に教訓をお與へになります。

何うも現世の子等は、光の子等よりも、お互に巧妙ものです。私も諸子に申します。諸子も不正の富を利用して、友を造りなさい。息が絶えました時、諸子をその永遠の住所に承入れて貰へる様に致しなさい。小事に忠實な人は大事にも忠實です。小事に不正な人は大事にも亦不正です。然らば諸子が若し不正な富に於て忠實でなかつたらば、誰か諸子の物を諸子に與へませうぞ。何んな僕でも、二人の主兼任へることは出来ません、或は一人を憎んで一人を愛

し、或は一人に従つて一人を疎むでありませう。諸子も天主様と富とに兼事へることは出来ないのです。

「ファリサイ人の嘲笑」、イエズス様は「不正の富」と呼ばれた。富は常に不正を働く原因となり、機會となり、手段ともなるからである。「小事」とか「他人の物」とか云ふのは、皆この「富」の類語である。却つて「大事」や、「眞の富」や、「諸子の物」やは、永遠の富、天國の福樂を斥したもので、要するに富を利用して、天國の福樂を求めよ、と教へ給うたのである。所で群衆の中にファリサイ人が混つて居ました。彼等は貪慾にして飽く事を知らない、不正な富の奴隷であつた。始終の御話を聴いて心の中に嘲つて居ります。イエズス様は彼等に曰うた。

諸君は人の前に自ら義とするものです。然し天主様は諸君の心を知つてお在だ。蓋し人に取つて高いものは、天主様の御前には憎むべき者でありますぞ。

斯う云つて、厳しく直向から彼等を譴めつけた上で、彼等が天國の教を信せず、平氣で律法を破り、婚姻制度を破壊して居るのを咎められます。

律法と預言者とはヨハネを以て限りとする。其時から神の國が宣傳へられる。人は皆力

を盡して、之に到らんとする。律法の一畫が墮ちるのよりも、天地の廢るのは易いものです。すべて妻を出して、他に娶る人は姦淫を行ふのです。又夫から出された婦を娶る人も、姦淫を行ふものであります。

【無慈悲な富豪】、イエズス様は既にファリサイ人の態度を厳しくお咎めになつた。更に話を續けて、富の利用を誤ると、如何なる禍の淵に沈まねばならぬかと云ふのを御説きになります。曾つて一人の富豪があつた。身には緋色の布と、亞麻布とを纏ひ、日々奢り暮して居たものです。又ラザルと云ふ一人の乞者が居ました。全身腫れ糜れ、富豪の門前に偃し、その食卓から零れ落ちる屑になりとも飽足らんものと、欲んで居るが、然し誰も與へて呉れる者が無い。却つて犬までが遣つて来て、その腫物を舐るのであります。

ラザルは其犬を追拂ふだけの力すら持たなかつたのです。イエズス様は現世に於ける富豪と乞者の大なる懸隔を見せられた。次に來世に於ける光景を描出されます。

さて乞食は死にました。天使に携へられて、アブラハムの懷に到りました。富豪も亦死んで、地獄に葬られました。苦痛の中に在りながら、彼は目を舉げて、遙にアブラハムと、其

の懷なるラザルを見ました。彼は叫んで申します。『父アブラハムよ、私を憫み給へ。ラザルを遣しその指尖を水に浸して、私の舌を冷さしめ給へ。私は此の火焰の中に甚く苦んで居りますので』と。アブラハムは彼に曰ひます。『子よ、其方は存命の間、善い物を受け、ラザルは同じ間に悪い物を受けたことを記憶しなさい。さればこそ只今彼は慰められ、其方は苦むのです。夫ばかりか、我々と其方等との間には、大きな淵が定め置かれてある。此處から其處へ渡らんと欲するも叶はず、其處から此所へ移ることも叶はぬのです。』

ラザルの携へ行かれぬ「アブラハムの懷」とは、其頃ユデアの教師等が「古聖所」を意味する爲に使つて居た語でした。古聖所に於て、國祖のアブラハムは、死後その子等を懇に引取り、己が忝うせる幸福を共にせしめる、と彼等は信じて居たものであります。

富豪は又申します。『然らば父よ、願くはラザルを私の父の家へ遣し給へ。私は兄弟を五人ほど持つて居ります。彼等もこの苦惱の所へ來ない様、之に證明さして下さいませ』と。アブラハムは彼に曰ひました。『モイゼと豫言者等とがある。彼等は之に聽くべきぢや』と。彼は申します。『然らば父よ、父アブラハムよ、でも誰か死者の中から行きましたら、』

彼等も改心するでありませう」と。「若しモイゼと預言者等に聴かない程しの彼等ならば、たどへ死者の中から復活すとも、信ずることはあるまい。」とアブラハムは曰ひました。話はふつつり此に終つて居る。十分に餘音を遺してある。富豪の失望、富に心を奪はれるの危険等を、言外に溢らしてあるぢやありませんか。

世には富者があり、貧民があり、因つて以て社會が立つて行く。たゞ富者は其富を私せず、之を散して、貧民を賑はし、窮乏を恤み、以て功績を積み、天國を求めねばならぬ。貧民は亦自ら働き、自ら勞して、其窮乏の中を抜出るべく務めると共に、謹んで天主様の聖慮を奉戴かねばならぬ。分に安んずる、と云ふことを知らず、矢鱈に富者の身を羨んだり、自暴を起したり、不正な手段を弄んだりしては宜しくない。無慈悲な富豪と、ラザルに就て鑑みなさい。思半に過ぎるでありませう。

(一三) 躓に注意せよ

(マテオ、一八ノ六一—四九)
ルカ、一七ノ一一—二

【躓の害】、富を輕せよ、とイエズス様が説かれたのに、フアリザイ人等は少からず躓かされ

た。イエズス様の御言を嘲つて、私に咥いたで。イエズス様は彼等の迷妄を醒してやつた上で再び弟子等に向ひ、躓の害をお説きになります。

躓は來らざるを得ない。然し之を來す人は禍なる哉、私を信ずるこの最と小き者の一人を躓かす人は、驢馬の挽く磨を頸に懸けられて、海の深みに沈められる事が、寧ろ彼の爲に優つて居る。躓あるが爲に世は禍なる哉。躓は來らざるを得ない。然し躓を來す人は禍なる哉。若し貴方の手が貴方を躓かしたならば、之を切斷てなさい。不具で以て生命に入るのは、両手を持ちながら、地獄の滅えざる火に行くよりも、貴方の爲には優しです。彼處にて其蛆は死なす、その火は滅えませんよ。若し又貴方の右の足が貴方を躓かしたならば、之を切斷てなさい。片足で以て永遠の生命に入るのは、兩足を持ちながら、滅えざる火の地獄に投入られるよりも、貴方の爲には優しです。彼處にて其蛆は死なす、その火は滅えませんよ。若しや貴方の目が貴方を躓かしたならば、之を抉つて取棄てなさい。片目で以て神の御國に入るのは、兩目を持ちながら、火の地獄に投入られるよりも、貴方の爲には優しです。彼處にて、其蛆は死なす、其火は滅えませんよ。

躓の害を説いて餘蘊なしぢやありませんか。茲に「蛆」とあるのは、イザヤ預言者の語(六六)を其まゝ引用して、悪人が地獄に於て良心の責に嚙まれる苦痛を形容したものである。猶地獄の悪人が滅えざる火に苦しめられ、何時になつても燒盡されない状を描いて、「火に醜られる」と云ひ、序に善人が天主様の聖寵に強められ、潔く犠牲となり、以て腐敗を免かれることをも、同じく醜に譬へられました。

各は火を以て醜けられ、又犠牲も各鹽を以て醜けられるであります。鹽は佳い物です。然し鹽が若し其味を失はば、何を以て之に鹽しませう。諸子の心に鹽を持ちなさい。諸子の間にも、平和を持つて居なさい。

犠牲の精神を十分に貯へて、心の腐敗を防ぎ、お互の間に平和を保つべきことをお諭し下さつたのであります。

【靈魂の價値】、續いてイエズス様は、人を躓かしてならぬ理由を、他の方面からお説きになります。

諸子は慎んで、この最と小さき者の一人をも輕んじてはならぬ。私は諸子に申します。彼等の天

使等は、天に在つて、天に在す我父の御顔を常に見て居るのです。實に人の子の參りましたのは、失せたる者を救はんが爲でした。諸子は之を何と思ひますか。百頭の羊を有つた人があつて、若し其一頭を失つたらば、九十九頭は山に措き、往つて其の迷へる羊を尋ねるぢやありませんか。さて之を見出すに至りますと、私は誠に諸子に申します。迷はなかつた九十九頭の羊よりも、猶その一頭の上を喜ぶものであります。斯の如く、この最と小さき一人でも、之が滅びるのは、天に在す諸子の御父の御旨ではありません。

靈魂の價値は斯の通りです。天主様も斯くまで之を貴重んじなされる。何んなことがあつても、之を躓かして、其滅亡の原因となる様なことを仕てはなりません。

靈魂の價値を認めなさい。而も自分の靈魂は自分で救ふべきもので、人を待みにするものではない。然し自分の靈魂を救ふべく働きなからも、人の靈魂の爲にも相當の努力を惜んではならぬ。唯之を躓かしめぬだけに、満足すべき筈では無いのであります。

(一四) お互ひ赦合ふべきこと (ルマテオ、一八ノ一五―三五)

【諫言】、人を躓かしてはならぬ。然し自分が人に害を受け、無理を加へられた時は、如何なる態度を執るべきでせうか。夫に就ても、イエズス様は美しい教訓をお遺し下さいました。若し貴方の兄弟が、貴方に罪を犯したらば、往つて貴方と彼を相對の上で彼を諫めなさい。若し貴方の言ふ所を聞き、そして改心いたしましたら、之を赦しなさい。貴方は兄弟を儲けたのです。一日に七度も貴方に罪を犯して、又一日に七度も「改心します」と云つて貴方に立歸つて参りましたら、之に赦しなさい。然し貴方の言ふ所を聴かないならば、他に一人か二人かを伴ひなさい。二三の證人の口によつて、事がすべて定まる様に、然う致しなさい。若し是等の言ふ所も聴かないならば、教會に告げなさい。教會にも聴かなければ、貴下の爲には、異邦人か、收税吏の如き者と見做しても可い譯です。當時のユデア人は、異邦人や收税吏をば、破門された者も同様に見做し、之と事を共にするのを禁じて居たものでした。固よりイエズス様は、彼等のこの遣り方を是認された譯ではない。

唯之を例に取つて、不都合な信者を除名し、破門する權を聖會にお授けになつたのみであります。プロテスタント派の人々は、是點に就て頻りに異論を唱へて居ます。然し前後の文面から見、夫より外に解釋が出来ますか。除名の權は何んな社會にでもあります。是が無くては、社會は立行くものではない。さて聖會が何んな處分を下しても、夫は必ず天に於て是認されます。イエズス様は其事をも弟子等にお約束になりました。私は誠に諸子に申します。すべて諸子が地上に於て繋ぐ所は、天に於ても繋がれませう。又すべて諸子が地上に於て釋く所は、天に於ても釋かれるでありません。亦お互の間に平和を保つ天主様は、たゞ聖會の下す處分を是認し給ふばかりではありません。亦お互の間に平和を保つ報として、其の希望、其祈願をも、快くお聽容れ下さるのです。私は重ねて諸子に申します。諸子の中に、若し二人、地上にて同意しましたらば、何事を願ふども、天に在す我父より賜はるであります。蓋し私の名を以て二人三人相集まる所には、私も其間に在りますよ。

【幾度赦すべきか】、其時、ペトロが使徒團の中から進んで、イエズス様に近き、次の如き質問

を持出しました。

主よ、私の兄弟が私に罪を犯しました時幾度之に赦さねばなりませんか。七度でムいますか、ど。ユデアの教師等も、三度までは宥せ、と説いて居ました。ペトロは随分思切つた積で、七度と申しました。然るにイエズス様の御答は、全く意外でした。

私は其方に「七度まで」とは言ひません。七度を七十倍する迄にしなさい。

何時までも、何處までも赦せ、と仰有つたのである。決して、幾度と數をお極めになつたのちやありません。

【負債ある臣下の喩】イエズス様は、ペトロに御答へになつた所を更に喩を以て明になされませう。

されば天國は、其臣下に精算を爲さしめんとせる王様の如きものである。精算を始めて見るど、王様に一万タレントの負債ある者が差出された。

一タレントは、二千四百圓許りに當る、一万タレントと云へば、即ち二千四百万圓、非常な大金である。そんな大金を背負ひ込んで居ては、到底、返済す見込の立たう筈がない。

返済すべき術が無いものだから、この身は勿論、妻子も、總の所有物も賣飛ばして、償ふ様

にど、主君は命じました。「暫く私をお忍容し下さいませ。悉く御返済いたすでありませうから」と、その臣下は平伏してお願ひしました。主君は彼を憐んで之を許し、その負債を棒引にしてやりました。臣下は出て行つたが、自分に百デナリオの負債ある一人の同僚に行遇ひました。「負債を返せ」と云ひつゝ、執へて彼の喉笛を扼めた。同僚は平伏して「暫く私をお認容し下さい。悉く返済しますから」と願つた。然し彼はなかく承知しません。去つて、負債を返す迄はと、之を監獄に投入しました。

一デナリオは我三十錢に當る、百デナリオで僅三十圓ばかり。自分は二千四百万圓からの負債を帳消にして貰つて居ながら、三十圓位の端金を免して遣れぬとは、如何にも冷酷である。不人情も亦甚しい、と云はなければならぬ。

同僚等は、その顛末を見て、甚く憂へ、來つて事の次第を悉く主君に物語りました。主君は彼を呼付けて曰ひました。「汝、凶悪い臣よ、汝の願によつて、自分は負債を悉く汝に免してやつた。然すれば自分が汝を憐んだ如く、汝も亦同僚を憐むべきではなかつたか」と。斯くて主君は怒つて、負債を残らず返すまではと、彼を刑吏に付しました。諸子が若し心

から各、自分の兄弟に救さないうならば、天の我父も、亦諸子に斯く爲し給ふであります。

この喩の意義は明白でせう。王様は天主様で、一万タレントの負債ある臣下とは、私等に外ならぬ。私等は罪を犯して、到底支拂ひが出来ない程の債務を背負つて居る。然し謙つて御赦を願ふと、天主様は快くその負債を帳消にして下さるのです。負債のある同僚とは、私等の兄弟で、私等はお互ひの間に多少不都合をやり、氣に障る様な事も仕出かして居る。然し之を天主様に負うて居る所に比べたら、一萬タレントに百デナリオの差異どころでせうか。だから其の僅な負債を兄弟に對して赦しきらぬ様では、逆も天主様の御哀憐を辱うし得る筈がない私等が人に赦すが如く、天主様も私等に御赦し下さるのであります。

【信仰と謙遜】、使徒等は七度の七十倍も敵に赦せ、と教へられました。然し其んな事は、人間の力に及ぶ所ではない。活々たる信仰が無くては、逆も實行し得るものではないと悟り、イエズス様に、

願くは私等の信仰を増し給へ、

と願ひました。イエズス様は答へて彼等に曰うた。

諸子が若し芥種一粒ほどの信仰でも有らば、この桑樹に向ひ、「根抜けて、海に移し植ゑられよ」と曰へば、必ず諸子に従ふであります。

然し夫ほどの驚くべき業を爲したからとて、夢にも夫を鼻に掛け、大きな面をしてはならぬ。

諸子の中に誰か、僕に畑を耕させるか、羊を牧はせるかして居るとして、其僕が畑から還つて来た時、「直に行つて食べよ」と之に申しますでせうか。却つて「私の晩食を準備し、私が飲食する間は、帯を締め、私に給仕せい。然うした上で、お前は飲食するのだ」と言はないでせうか。命じた事を爲したればとて、主人は其の僕に感謝しますでせうか。私は然う思ひません。夫と同じく、諸子も命せられた事を悉く爲した時にも、「私等は無用の僕、爲すべき事を爲した迄だ」と言ひなさい。

何れも、感心な教ばかり。仇敵には何處までも赦す、我身の善業には、少も驕る所がない。たゞ爲すべき所を果した迄だ、と飽まで謙つて居る様にとは、何處から觀ても、崇高い、立派な、人間の智慧の思付きも得ない程の教訓ちやありませんか。

この感すべき御教訓を何時も心に思ひ、身に實行ふべく務めませう。

(一五) サマリアとガリラアの間 (ル一七ノ二二―一九カ)

【十人の癩病者】、イエズス様は、エルザレムへ御上りになるに付け、眞直にサマリアを横り、エフライムからユデアへ進み給うとはなさらぬ。迂廻して途を東に取り、シトボリス附近からヨルダン河を渡り、ペレア地方へ出る御積りで、サマリアとガリラアの中程を御通りになつた。或る村へお這入りになる時、十人の癩病者が之を出迎へた。モイゼの律法によると、癩病者は人に近くことを許されない。因つて彼等は遙向うに立止り、聲を揚げて、

師、イエズスよ、我等を憫み給へ、

と叫んだ。彼等はイエズス様を救主と認めた。その御情、御力を信じた。その御哀憐を祈つたのです。イエズス様は忽ち同情の膺を動かした。然し彼等の信仰を試すが爲に、行つて、身を司祭等にお見せなさい、

と仰有つた。癩病の癒れたか、否かを検査するのは、司祭の役目だつたのです。十人は御言に

従つて行いた。途中、癩病は全然消失せた。身体は眞奇麗になつた。九人は其まゝ立去つたが、一人だけは、我身の潔くなつたと見るや、大聲に天主様を讚美しつゝ還つて來た。イエズス様の御足下に平伏して感謝しました。見ればサマリア人です。ユデア人が人非人の如く賤めて居たサマリア人です。イエズス様は答へて曰うた。

潔くなつたのは十人ぢやありませんか。其九人は何處に居るのです？立戻つて天主様に光榮を歸し奉る者は、この異邦人の外に見ねないのだな。

斯う嘆息された上で、彼人に向ひ、

立つて往きなさい。貴方の信仰が貴方を救ひましたよ、

と語やさしく仰有つて、立去らせなさいました。

【神の國とは？】、當時のユデア人、殊にファリサイ人等は、連りに神の國を待つて居ました。ユデア國民に權勢と、光榮と、幸福とを齎す神の國(メツシ)を待つて居ました。然るにイエズス様は、宣教の始から、「天國は近い、悔い悛めよ、」と連に説いて居なさるが、今以て夫らしい徴候も顯れぬ。で或日の事、例のファリサイ人等はイエズス様に向ひ、

神の國は何時参りますのでせうか、と問ひました。イエズス様を困らす積で、皮肉を言つたのです。イエズス様は彼等の間に直接の答はお與へになりなさらなかつた。然し天國と云ふものゝ性質を明白にして、彼等の謬見を正しなさいました。

神の國は目に見えて來るものではない。又看よ、此處に在り、彼處に在り、と云ふべき質のものでもない。神の國は即ち諸君の中にあるのです。

神の國は物質的のものではない。其の顯はれ出る時の徴候を、物好きに捜すよりは、寧ろ各自の心を準備して、茲に其の國を格らすべく務めるが可い。神の國は心の中に在るべきものだ、と仰つたのであります。

【神の國の來るべき時期】、フアリザイ人に然うお答へになつた後、イエズス様は言を更めて弟子等の注意を催された。フアリザイ人には、神の國の建設に就て御話しになつたが、弟子等には、其の完成、即ち世界終末の時の狀況を語られました。

諸子は、人の子の一日（世の終に光榮を帯びて來り給ふこと）を見たいと欲する日が参りま

せうぞ。然し之を見ることはありますまい。又人が「看よ、此處に在り、彼處に在り」と曰つても、往きなざるな。従つてもなりません。電光が閃いて、空の極より極に光るが如く、其日に當つて人の子も然あるであります。然し其前に、彼は豫め多くの苦を受け、且つこの時代の人に棄てられねばなりません。ノエの日に起つたが如く、人の子の日にも亦然あるであります。ノエが方船に入る日まで、人々は飲んで食つて、妻を娶り、嫁に遣されて居ました。して洪水が來ました。彼等を悉く滅しました。又ロトの日に起つた如くなるであります。人々は食べて居ました。飲んで居ました。買つて、賣つて、植ゑて、建てて居ました。ロトがソドマから出た日に、天から火と硫黄とが降つて、彼等を悉く亡しました。人の子の現はるべき日にも、亦其通りであります。

だから其時に、人の子と永遠の幸福を共にしたいならば、万事を抛つて之に従はねばなりませぬ。其時、人は屋根の上に居り、器具は家の内に在るならば、下つて之を取らうとしてはなりません。畑に居る人も亦同じく歸つてはなりません。ロトの妻の事を思ひなさい。すべて己が生命を救はんと欲する人は之を失ひ、失はん人は之を保つてあります。私は諸子に告げ

ます。彼夜に、二人一個の寢床に居ませうが、一人は(天國に)取られ、一人は遺されるでありませう。二人の婦が共に磨を挽いて居ませうが、一人は取られ、一人は遺されるでありませう。二人の男が畑に居ませうが、一人は取られ、一人は遺されるでありませう。弟子等は謎の様な、而も恐ろしいこの御話を承つて、一方ならず怖れたものと見ゆる。主よ、何處に於てゴムいますか、

と問ひました。何處で其んな怖ろしい事が行はれるか、彼等は夫を知らんと欲したのである。然しイエズス様は、曖昧な御返答しかお與へにならなかつた。時や、處を慮るには及ばぬ。肝要なのは罪を避けることだ、と云ふことを仄めかし、

何處にもせよ、屍の在る所には、驚も亦集るものです、

とお答へになつた。悪人は屍の如きもので、悪人の居る所には、必ず天罰の驚が遣つて來るものだ、と御諭しになつたのであります。

油断をすな。注意せよ。人の子は思はぬ時に來るものだ、とイエズス様は繰返し、御警めになりました。私等が動もすると、現世の慮に氣を吞まれ、財寶や、歎樂に心を奪はれて

救靈の大問題を等閑にしたがるものですから、折さへあれば、始終その點を御注意なさつたのであります。

(一六) 止みなく祈れ(二スノ一四)

【不正な判事と寡婦】、恐るべき審判の曉を待ちつゝ、止みなく祈り、何時になつても倦むべきでない。イエズス様は右の道理を諭さんが爲に、左の如き喩を語られました。

或る町に、天主様も畏れず、人をも顧みないと云ふ判事が居ました。又同じ町に一人の寡婦があつて、『私に仇する人を處分して下さい』と言つて、始終彼の許にやつて來るのでした。彼は久しく夫に應じなかつたが、其後心の中に謂ひます様、『自分は天主様も畏ろしくない。人も顧みない。然し彼の寡婦は何うも五月蠅くて仕方がない。彼女の爲に處分してやらう。然もないと、最後には、來て自分に打つて蒐るかも知れないんだ』と。

流石の判事も、婦人の執拗さには弱らせられた。到頭起つて彼女の爲に處分して遣つた。夫に就て御主様は曰うた。

諸子は、彼の不正な判事の言つた事をお聴きなさい。天主様だつて、其のお選みになつた人が、夜晝御自分に叫ぶのに、何うして處分もせず、其の苦むのを見ながら、黙つてお忍びになりますでせうか。私は諸子に申します。天主様は、早速彼等の爲に處分して下さいませう。然し人の子が参ります時、世に信仰を見出すでういませうか？

燃ゆるが如き信仰を抱いて居てこそ、止みなしに、何處までも祈る氣になるものです。「信仰が無くなる」と、祈禱も絶ゆる。誰が信せずして祈る者があらうぞ」と、聖アウグスチンも申されたちやありませんか。

【ファリサイ人と、收税吏】、ファリサイ人や、同じ臭味の人々は、徒に義人面をして自ら恃み他を蔑視する癖があつた。彼等を戒め、その自惚を打破るが爲に、お話しになつたのが、左の如き喩話でありました。

祈禱をしようと言ふので、神殿へ上つた人が二人ありました。一人はファリサイ人で、一人は收税吏でした。ファリサイ人は立つて、心の中に斯う祈りました。「天主様、私は他の人の如く盗人、不正者、姦淫者でなく、又この收税吏の如くでも無いのを主に感謝いたします。

私は一週に二回斷食します。全収入の十分一を納めます」と。然るに收税吏は遙に立つて居て、目を天に擧げることすら敢てしません。唯胸を打つて、「天主様、罪人なる私を憐み給へ」と言ふのみでありました。私は諸子に申します。此(收税吏)は彼(ファリサイ人)よりも義とせられて、自宅へ下つて行きました。蓋し總て自ら驕る人は下げられ、自ら謙る人は上げられるであります。

收税吏はその謙遜なる祈禱によつて、天主様の御憐を蒙り、罪を赦され、心は眞奇麗になつて、神殿を下りました。ファリサイ人も、自分では大に天主様を尊び、功德を増した積りで、自宅へ歸りましたでせうが、其實、彼はその傲慢故に罪を重ね、天主様の排斥を蒙るに至つたのである。傲慢より恐るべきものはありません。

イエズス様のガリラアに於ける宣教は茲に終りました。一行はガリラアとサマリアの境に沿うて東に進み、ヨルダンの岸に到着された。河を渡れば、即ちペレアの地です。



第四章 ペレア地方に於ける宣教

(一) 婚 姻 問 題

(マテオ、一九ノ一一二二
マルコ、一〇ノ四〇一四二)

【ヨルダン河の對岸】、是等のお談話を爲し終つた上で、イエズス様はガリラアを去り、ヨルダン河の向なるユデアの境に到り、其處にお止り遊ばした。群衆は夥しく之に従ひ、再び御側に寄り集つた。イエズス様は例の如く彼等を教へ、その病を醫してやられました。此地方はヨハネが初めて洗禮を施した所で、彼の記憶が未だ人々の心に残つて居る。『ヨハネは何の奇蹟も行はなかつた。然し彼が此人に就て告げた事は、皆眞實であつたよ』、と云つて多くの人はイエズス様を信仰しました。

【婚姻問題】、イエズス様が何處へ御出になつても、影の形に従ふが如く、御身の周圍を離れないのは、フアリザイ人である。何とかして、イエズス様の信用を叩潰し、其の宣教を妨げたいものと思ひ、イエズス様に近いて、

人は如何なる理由の下にも、其妻を出すことが出来ませんか、

と問ひました。其頃、ユデアの教師間には、離婚問題に就て、喧しい議論があつた。何んな理由の下にも、離婚を許して可い、と云ふ一派と、姦淫罪の故でなければ許すべからず、と主張する反對派とがあつた。互に鎬を削つて相争つて居た。フアリザイ人等は、イエズス様を議論の渦中に引込んで、反對派の怨を買はせようと企んだのである。然しイエズス様は決して彼等の罪に嵌りなさらぬ。彼等に答へる前に、

モイゼは諸君に何を命じましたか、

と例によつて、お反問しになりました。

モイゼは離縁狀を書いて妻を出すことを許しました、

と彼等は答へた。モイゼの權威を持出して問題を解決しようとしたのです。夫に對してイエズス様は、天主様の權威に訴へなさいます。

諸君は讀まなかつたですか。即ち元始に人をお造りになつた御者は、之を男女に造り、『此故に人は父母を離れて、其妻に就き、二人一體となるべし』と仰せられた。然すれば既に二人で